

(表紙)

十五年戊寅三月朔日

甲子至十八年辛巳九月

十一日甲申

寛永軍徴^{卷之}十九ノ上稿

寛永軍徴卷之十九

十五年戊寅三月朔日甲子至十八年九月十一日甲申

402 平塞録云、三月朔日真源公凱陣云々、二日ノ下ニ見ユ、

403 藤掛集書云

水野美作守と有馬藏人と直爭論の亘

一 水野美作守と有馬藏人本丸一番乗の争ひハ、落城有之

て三月朔日藏人美作陣屋へ被参直被申ハ、今度廿七日落城の時、大將分にて自身本丸へ一番に乗込申候者某にて候の由被申候、美作守返答に、一番に乗込は、夫ハ藏人殿若輩にて左様の事被仰候、本丸の儀は已に我等者共先仕候、數人手負・死人有之、誠に敵強防候得者乘兼たる仕合候處に、拙者悴伊織を召列再拜を取て下知仕、手負・死人をも蹈付て乘崩し、家頼の者共も悉粉骨を尽し、其上松の丸へ真一番に馬印を立、旗を入、拙者儀ハクルス有之所に、腰曲輪の石垣の上ニ罷在候得者、貴殿御乘来候由承候に付、則使を以申達候へ者、以之外御せき候御返事に付、重て不得御意候、不加之拙者家來鈴木半之丞と申者、某一番ニ乗候段申断、御納得之上にて石垣をも御乗上り候事無紛候、半之丞次にハ居不申候やと尋らる、本より半之丞も其外手廻の者共も大將と大將の争ひに候へ者、詰懸居申に付、半之丞被召出、藏人殿へ被引合、藏人被申ハ、半之丞理り申候段も無紛候、定て作州御乗込候て御座候やと存、旗・馬印有之所へ直様へ参尋候得者、貴殿御

事ハ披群跡に御座候由候、然時ハ半之丞も旗と馬印を見て、定て作州も可被参と利口者にてこそ候へ、左のミ半之丞理り申たるが、貴殿の一番乗に成可申候哉、此藏人自身罷越、眼前に見申たる所證據に立可申候也、兎角自身乘込候事ハ貴殿より此藏人早に相究り候条、左様に御心得可被成と堅固被仰候、作州被申ハ、縦某ハ陣屋に臥居候ても馬印と旗を一番に本丸へ入候、是一ツ、鈴木半之丞貴殿を押へて一番乗と被仰候所を、二番乗と相究る上にて石垣より上へ引上げ申候、是二ツ、又貴殿御出候由申來り候に付、則時に拙者方より今枝甚左エ門ト云使番を以達候、是三ツ、是程無紛儀を跡より御出候て、拙者足輕共居申中へ御出張候て、一番乗杯と被仰候事、殊之外御無案内の儀与存候、誠に我等再拜を取て下知仕、大分家来の能侍共を眼前にて歴々討死させ、手負及數百人尺粉骨乘崩、剩旗・馬印を押立事、諸人同前の儀共に候、如斯我等手を碎乗取候本丸を、貴殿の一番乗に仕候事ハ中々思ひも不寄事にて候、左様にハ罷成間敷候間、能御思案有之

被仰候へと作州被申候、藏人被仰ハ、旗を一番に本丸へ被立候事無紛候、去に付て我申様も大將分にて自身乗込候事ハ拙者早く候へハ、大將分の一乗と申事に候、我等参居候所までハ貴殿も敵突て出候や、御氣遣候と見得て御出無之由、殊之外藏人悶被申に付、作州被仰ハ、唯今双方何かと申候共、貴殿御悶被成と見得申候間、我等一番乗に相究候(歌)御合点参間敷候、先御帰候て御吟味有て重て被仰聞候へと被申候、そこにて藏人殿小姓衆御茶一ツと被仰候、御茶一貼(匙)を参候て則退出候、いかにも主客共に手荒成會ぶり目を驚候、鈴木半之丞、藏人殿腰送りに罷出居候へは、流石の藏人にて言葉被掛候、常の者にて候ハ、半之丞を見ぬ振をするか目禮共か、にらミ付て帰り可被申處に、いかにも御挨拶能半之丞と言葉被掛候事、何れ藏人唯の者にてハ無之由、水野家来共藏人を譽申候云々、

三日の下
に抄載す、

猶々、八日相國ニテ御通之刻も候はん間、必御立寄

候ハ、可忝候、猶重而可得御意候、御病中ニ貴札忝

次第ニ御座候、已上、

此方より社可申入之處ニ、被入御念候御書中忝令拜見候、
一昨夕も申相候、今度之御働誠書中ニ難申候、先申候ハ
んヲ、御氣色然々ならず候由承候間、御養生之儀ニ進申
候、恐惶謹言、

【寛永十五年】

三月一日

茂利（花押）

【墨引】村尾源左衛門様

御報

【鍋島信濃守勝茂臣】

鍋嶋六左衛門尉

405の1

【真本日高與一左エ門家藏】

寛永拾五年寅二月廿八日辰之刻ニ有馬原之城被責落之時、
薩摩軍衆之内より貴老・友野七郎殿・有馬久右衛門殿一
番ニ城乗被成、於屏際被碎粉骨御働之處ニ、敵方之石打
ニ被相當、三間程之石垣より下ニ打落申候、誠被遂御名
誉、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、於後日誰人御
尋候共此旨無相違可申達候、仍證文如件、

寅三月朔日

藤井助四郎（花押）

日高（正盛）十兵衛尉殿

まいる

【本文書ハ「旧記雜錄後編五」一二七三号文書ト同一文書ナルベシ】

【同上】

寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ有馬原之城本丸責落之
時、薩摩軍衆之内より貴老・友野七郎殿・藤井助四郎殿
ハ先陣被成、於屏際ニ被碎粉骨御働之處ニ、敵方之石打
ニ被為當、三間程之石垣より下ニ打落申候、被遂御名誉
候儀、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、向後之證文
為如件候、

寅三月朔日

有馬久右衛門尉

純「兵」（花押）

日高（正盛）拾兵衛尉殿

参

【本文書ハ「旧記雜錄後編五」一二七一号文書ト同一文書ナルベシ】

405の3

【同上】

寛永十五年寅二月廿八日辰之刻ニ有馬原之城被責落之時、

薩摩軍衆之内よりハ貴老・有馬久右衛門殿・藤井助四郎

殿一番ニ城乗被成候而、於屏際被碎粉骨御働之處ニ、敵

方之石打被相當、三間程之石垣より下ニ打落申候、被遂

御名譽儀、我等も同前ニ城乗仕、慥ニ見届申候、為後日

證文如此候、以上、

寅三月朔日

友野七郎（花押）

日高十兵衛尉殿

（正意）
まいる

〔本文書ハ「旧記雜錄後編五」一二七二号文書ト同一文書ナルベシ〕

405の4

十兵衛正盛國に還り、右ノ石疵瘳すして、此年五月二十

九日ニ死せり、隆盛院に葬り一雄宗將居士と法諡す、此

役ニ服する所の冑と右三通ノ證文併せて、七代孫、今の

日高與一左衛門珍藏すと云へり、冑に石痕尚残ると也、

406

〔伊地知至右エ門重政付衆中小原織部佑取拂候〕

米請取方并銀子錢

三月朔日〔上文二月廿六日ニアリ〕

一真米三斗七升五合

有馬ニ而

右者主從拾五人之内拾日分

同日
一赤米三斗七升五合
同

右主從拾五人之内拾日分

右者、二月廿六日之朝より三月六日之算用ニ請取申候、

〔以下ハ三月四日ニ載ス、二月二十六日より三月六日迄日數十日

也、一日一人能米五合賦ニして、一日拾五人分ハ七升五合宛ニ

當れり〕

全米佛方但出入賄

三月朔日

一真米六升ハ つきかん（ちか）

右者二斗俵沓ツ、上白米ニシテ之つきかん（ちか）なり、

〔以下ハ三日ニ載ス〕

全買物方

三月朔日〔上文二月十五日ニアリ〕
一赤米六斗 おこし 代銀貳拾三匁貳分

一真米三斗沓舛 代銀拾四匁

一赤米沓舛ハ あぢ魚五ツ之代 使八右衛門

〔以下二日に載ス〕

407の1

〔寛カ〕
□永十五年二月廿八日、有馬□之□御責被成候時、薩摩

軍衆之内從貴老・有馬久右衛門殿・日高拾兵衛殿ハ一番

ニ城乗被成候間、於屏際ニ敵之鎗奪取被成、御高名之儀、我等も同所ニ城乗仕候而、鎗ニ見届申候、為後日證狀如件、

寅三月朔日

友野七郎(花押)

藤井助四郎殿

まいる

407の2

右系傳云、寛永十五寅二月廿八日、肥前國有馬原城御貴之時、助四郎・有馬久右衛門尉・日高拾兵衛・友野七郎四人、一番ニ城乗、助四郎事於屏際敵之鎗奪取候次第、同列之内友野七郎見届候、證文一通并右鎗一本在、兼門と銘在長鋒也、鋒先九寸五部、幅七部、中心老尺二寸、



二日乙丑

408 平塞録云、三月云々、二日妙解公凱陣、傳曰、一揆不殘平義ノ故ニ上使衆差圖有テ、諸大將人數少々殘シ、三月

二日ヨリ五日迄ノ間皆凱陣也、尤今月朔日ヨリ上使衆ノ下知ニテ原ノ城ノ本丸石垣等ヲ崩ス、小笠原信濃守殿・松平丹波守殿・有馬左衛門佐殿・寺澤兵庫頭殿人數ニテ請取テ被崩ケル云々、
四日ノ下
ニアリ

409

『真本大重仲兵衛家藏』

寛永十五年二月廿八日、有馬於原之城本丸乗入、敵合首被討捕、粉骨之至髓見届申候、為後證如斯候、仍證文如件、

寅暮春二日

伊地知李右衛門(花押)

大重傳左衛門尉殿

参

410

『真本出水士山下直助家藏』

覺

寅二月廿八日、有馬原之城ニ而、貴老本丸石垣高サ三間程登屏ヲ乗越、敵あまた、矢共いつル殊之外之御手から、於其場手おかせられ候、鎗ニ見届申候、為證跡之如此ニ候、

寛ノ十五寅

村尾源左衛門尉(花押)

三月二日
『伊地知重政付衆中時加久藤預
山下氏』金剛坊老
上

411 『寫本家藏』

覺

寅二月廿八日、有馬原之城ニ而、貴老本丸石垣高サ三間
程登、屏ヲ乗越、敵二人仕留、無比類御手から、其場ニ
居合鎗ニ見届申候、為證跡之如此候、

寛ノ十五寅

村尾源左衛門尉(花押)

三月二日
『重政從兵加久藤士』
岩崎彈之丞殿
参

412 『全』「在赤川次兵衛」

覺

寅二月廿八日、有馬原之城ニ而、貴老本丸石垣高サ三間
程登、屏ヲ乗越、敵老人仕留被成候、無比類御手から、
其場居合鎗ニ見届申候、為證跡之如此候、

寛十五寅

村尾源左衛門尉判

三月二日
『重政從兵加久藤士』
赤川弥七郎殿
参

413 「重政附衆小原織部取拂帳買物方」

三月二日

一真米沓舛式合ハ、 たふ式丁之代
但宿本ニ而買申候、

「上文ハ朔日ニ、下文ハ三日ニ載スレハ、此ニ略ス」

414 此日加久藤士前田内藏介その僕市之介を隨へ、有馬より

鹿兒島に使用して帰れり、

415 「出水士伊東氏藏」

寛永十五年二月廿八日、原之城本丸へ城乗之刻立合申候、
御手前始之鎗合、從脇見届申候、其後先へ御通ニて、御
手柄を不存候、為後證如此候、已上、
「本マ、」

寅三月二日 伊地知李右衛門尉(花押)

伊尻三郎右衛門尉殿(祐丞)
まいる

416 「北郷久加世別記上文在二月十二日」

富岡ニ而天草退衆之改被成候間、渋谷伯耆守重國・久加
兩人富岡江罷渡、主税介殿・大和守殿・寺澤兵庫頭殿家
中衆參會可致改之由、有馬より山田民部有榮問合付而、
重國・久加同前ニ同三月二日上津浦致出船云々、下文在三日

417 「堀興延日記」

一嶋原一揆之者若落人茂哉候半、浦々江番之者堅可申付
旨、諸國江被仰渡、御當國久志浦地頭甚左衛門殿興親
興延為名代、興延三拾三歳ニ而、同寅年三月二日、久
親父志浦へ差越致勤番、同年四月十三日ニ帰宅、落人無之
事、

418 (ハリ紙)

「九ノ張紙

證文写

右、同二月廿八日春之城本丸之屏を越、貴老敵を打取被
成候、慥ニ見届申候、

三月二日 高橋銀右衛門判

長野正右衛門殿

三日丙寅

419 寛明日記云、三月三日於肥州島原自今日至五日陣拂有之
阪陣也、原ノ城者自諸將遣人夫墮之、

420 藤掛氏云、其後三月三日・四日・五日の中に各陣拂ひ有
之帰陣也、原の城をハ諸大名衆より人夫を出させ、石垣
を破却せられ候、左候て温泉山に若一揆共隠れ居可申や
との事にて、諸手より足輕を出し候て狩せ候へ共、敵一
人も居不申候、鹿・猪大分出候へは、すハ敵出たる欵と
て、驚き操(操カ)き谷へ落、或ハすねを損し、死するも有之、
何れの足輕と云事ハ不分明事、

(墨引) 村尾源左衛門尉様
(重候) 『小笠原氏臣』 『景信』
小河五左衛門尉

人々御中

先日以後者以書状茂不得御意、疎遠之様罷過候、御氣色

弥能御座候哉、無御心許奉存候、私手前も□而痛□申候、
(入)

乍去行歩一圓叶不申候間、爰元ニ而得貴意候儀罷成間敷

と存、千萬御残多奉存候、向後之儀ハ何方罷有候共、以

書中茂別而可申談候間、左様御心得可被下候、随而押掛

武具致進上候、愚音之驗迄御座候、恐惶謹言、

『寛永十五年』

三月三日

景判

422 「重政付衆小原織部取拂留」

米拂方但出入賄

三月三日

一真米壹斗者

赤川弥七郎殿

飯米とシテ御遣ニ而候、

同日

一真米四舁ハ

膳長坊へ

借米被成候間遣申候、

「此間一行二月二十七日の事あり、其日に載おく也」

「全」

御振舞方

三月三日

一白米五合者

右者伊地知弥右衛門尉殿江御振舞、
「重延」

三月三日

一白米貳合五夕ハ

右者有馬主馬丞殿へ御振舞ニ而候、
「純秀」

「上文ハ二月廿九日ニ、下文ハ三月五日ニアリ」

「全」

買物方

三月三日

一真米貳舁ハ

酒壱舁代

右者三月三日ニ取申候、

同日

一真米七合五夕

若女之代

「下文ハ四日ニ載ス」

423 「天草覺書」

一有馬原城ハ寅二月廿八日落城、上使御目附衆ハ中三日

御逗留、御仕置等被仰付、三月三日有馬表御引取被成、

島原へ御着、陸七里、

424 「肝付兼屋從臣緒方主殿覚書」

一三月三日、御節句ニ軍衆へ御通・御酒・草餅被下候、

425 「北郷久加世別記上文在」

一同三日富岡江参着、竹之内備前・山之内勘兵衛・肥後

内藏助・山本内匠・本田民部右衛門・大馬場吉右衛門

致同心、四日より六日迄改有之也、下文在

四日丁卯

426 寛明日記云、三月四日、城内ノ男女ノ首一萬五千餘級有

之、伊豆守下知トシテ城ノ前田ノ中ニ獄門ニ梟ク、但諸

柵木ヲ以テ跡先ヲ尖カシテ突并タリ、

427 天草覺書云、同四日島原御逗留ニテ、高來郡之繪圖等被

仰付候也、

季安云、上使御目附衆ノコトヲ云ヘリ、

428の1

平塞録云、四日 公義ヨリ諸將へ在陣中ノ扶持方代銀ヲ
給フ、傳曰、公義ヨリ被仰下候旨ニ任せ、上使衆ヨリ

公義御勘定頭能勢四郎右衛門殿・山中喜兵衛殿申渡、右

兩人衆ヨリ正月朔日ヨリ三月十日迄ノ扶持方代銀ヲ被渡

ケル、

428の2

請取申御扶持方之事

役高五十四萬石二萬千六百人 百石ニ付四人扶持之積

合七千四百五十二石者 京舛也

此銀三百七十式貫六百目 但シ石ニ付五十目遣

寛永十五年三月四日 長岡佐渡判

有吉頼母判

能勢四郎右衛門様

山中喜兵衛様

428の3

同日上使衆ヨリ諸手打捕ル一揆ノ首ヲ梟ヘキ由被申渡ケ

ル、傳曰、諸大將歸國家老之面々殘居居ケル故、細川家ノ老中ヨリ諸大名之老中へ可申觸由下知アリ、

428の4

伊豆守様被仰出候者、方くニすたり有之首一ツ所ニ掛させ候へと、諸手の御衆へ拙者共方より可申入旨被仰出候間、如是ニ候、被得其意最前ニも被仰付、道奉行衆を御出被成、捨り有之首一所に御掛せ可被成候、此方之道奉行も則申付差出申候、為念御名之下御判刑ニ而可被下候、恐惶謹言、

三月四日

有吉頼母

英貴判

長岡佐渡守

興長判

鍋嶋信濃守様

御家老中

多久美作

判

松平右衛門佐様

御家老中

黒田美作

判

有馬玄蕃頭様

御家老中

有馬内記

判

立花飛彈守様

御家老中

十時三弥之助

判

寺澤兵庫頭様

御家老中

片岡九郎左衛門

判

429 此日北郷久加と松平主税介・伊東大和守・寺沢兵庫頭ノ衆ト天草退衆を改檢すと云へり、

430の1

『在阿久根古帳』

手形

粟三拾四石六斗六舛先かき

阿久根町瀆

右者、天草立ニ付、水手女房跡飯米とシテ可被相渡候、

但女房百拾式人ニ而候、日数八千三百五拾式日分ニて候、

我々以手形可被相渡由、任御廻文如此候、

寅三月四日

兩人

『阿久根御藏下代』

田上九兵衛殿

『全』

小幡主膳正殿参

430の2

【同上】

手形

粟五拾七【石七斗イ】三舛合【石七斗イ】先かき 折口濱村

右者、有馬立ニ付水手卅五人ニ而日数千三百八十一日分、女房跡飯米とシテ可被相【渡】之由、御廻文を以被仰付候間可被相渡候、以上、

寅三月四日

「右、寛永十五年寅ノ留帳ノ中ニ有之」

431 「小原織部佑取拂帳」

米請取方并銀子銭

三月四日

一真米壹斗五舛 先かき

同

同日

一赤米壹斗五舛 同

同

右者、引飯米とシテ三月七日より同拾日迄之算用、主

從拾五人分とシテ請取申候、

合米拾石四斗三舛八合

内 五石六斗九升五合 先搔

四石七斗四舛三合 前搔

内 上白米四斗式舛 上之飯米

中白米六斗七舛三合 次飯米

能米六石四斗九升七合五斗

赤米式石八斗四舛七合五斗

右は伊地知重政在陣中、地頭所加久藤またハ羽月の持留などより齋らしゆき、出水の米津・天草の上津浦或者有馬にて、主從三十五人より漸く減少せしに應じて給たる兵糧、都合右の如し、

【全】

買物方

同四日

一真米式舛

肴小鯛式ツ之代

同日

一同式舛五合

堅魚婦三ツ之代

同日

一赤米式斗ハ

米之津宿へちん也

「自是白紙なり」

432 「蒲生土有馬氏家藏」

覺

手負
村尾筑前守 付衆
瀬口覚左衛門尉 同
田嶋平左衛門尉 下人宇
右衛門

湯田平兵衛尉 下人 付衆
兒玉勘解由左衛門 當病
山本勝右衛門尉

指合
河崎長右衛門尉 達野源左衛門下人
清藏 河崎織部祐下人
休藏

黒木甚左衛門下人 桑幡六右衛門下人
善左衛門 金八 上村盛左衛門下人
与兵衛

嶺崎弥右衛門下人 松下源五左衛門下人
吉左衛門 大藏允 福崎内藏允下人
神介

椎原宇右衛門下人 川内清右衛門下人
新六 仲右衛門 野村九右衛門下人
利兵衛

野村与右衛門下人 湯田平右衛門下人
采女正 清吉 竹内二郎兵衛下人
郷左衛門尉

連順坊下人 池田主馬首下人
源四郎 佐左衛門 谷山諸右衛門下人
万介

馬渡四郎兵衛下人 帆足加兵衛下人
市兵衛 早左衛門

合人数三十人

五日戊辰

433 「天草覺書 上使御目付衆ノコト」
上文ハ四日ニアリ」

五日島原御出船、天草郡寺澤兵庫頭殿領内大矢野へ御渡

海海上、則御止宿、
七リ、

434 「蒲生土有馬氏家藏」

覺

市来八左衛門尉与力衆
(宗丞)

手負 村尾筑前守 下人二人

田嶋平左衛門尉 下人三人 湯田平兵衛尉 下人三人

兒玉勘解由左衛門 下人三人 山元少右衛門尉 下人二人

河崎長右衛門尉 下人三人 達野源左衛門尉 下人三人

合人数廿九人

三月五日

御船奉行中

435 『全』

覺

市来八左衛門尉与力衆
(宗丞)

村尾筑前守 瀬口覚左衛門尉 田嶋平左衛門尉

湯田平兵衛 兒玉勘解由左衛門 山元少右衛門尉

河崎長右衛門 達野源左衛門尉

右下人
宇右衛門

右者、伊地知弥右衛門尉殿へ振舞也、

同 万介 同 休蔵

同 清蔵

同 善左衛門尉 同 金八

与兵衛

438 「北郷久加世別記」

同 吉左衛門 同 大蔵丞

同 甚介

一此日渋谷重國へ上津浦へ伊豆守殿急度御着之由付而、

同 新六 同 仲右衛門尉

同 利兵衛尉

富岡より帰陳也、

同 采女正 同 盛吉

同 郷左衛門尉

同 源四郎 同 佐左衛門尉

同 万介

439 證文

同 市兵衛 同 早左衛門尉

今度有馬城於本丸鉄炮射通被成事、拙子最前より罷居申

ノ 式拾九人 刁三月五日

候而見届申候、為後日如此ニ候、

刁三月五日 長瀬新兵衛判

436 「蒲生松下源五左エ門書留」

湯田平右衛門尉殿

刁三月五日より十日分御上米請取、同七日之有馬陣拂、

同八日ニ出船被成、八左様江津浦ニ同十日御着被成候、

六日己巳

蒲生衆何も同前ニ参被着候、

440 天草覺書云、同六日上津浦村へ御着海上、亦上使御目附

衆ノコト也、

437 「伊地知重政付衆小原織部佑取拂留」

御振舞方

三月五日
一白米式合者

441 六日、北郷久加等、退衆改畢て帳面となせり、

送状

一拾三端老艘

甌之嶋之船頭

清左衛門尉

右之舟ニ立五拾帖「楯板ナラン」ツミ申候、於其津ニ御請取可被成

候、以上、

三月六日

池袋九左衛門（花押）

老岐舎人佑（花押）

野村五郎左衛門尉

まいる

443 「北郷久加世別記上文在」
三〇日

同四日より六日迄改有之也、松平主税介殿内より大田仲

右衛門・千賀七太夫・榎野権左衛門、伊東大和守殿内よ

り伊東大蔵介、寺澤兵庫守殿内より九里六左衛門・田代

八右衛門被罷出、何れ茂相合改之、重國ハ上津浦へ伊豆

守殿急度御着之由付而、同三月五日ニ上津浦江帰陣云々、

下文在
七日

七日庚午

七日、栖本江御着御止宿陸ニリ、亦上使御目付ノコトヲ云

ヘリ、

445 「蒲生松下源五左衛門書留」

三月七日、有馬陣拂ニ而候得共、我々順風悪候而、八日

之朝船乗、其日柳ノせとニカ、リ云々、

446 「重政附衆小原織部佑取拂留」

米拂方但出入賄

一米式斗五舛五合

有明之
久蔵

右者、日数五拾壹日、正月十六日より三月七日之晚

迄ノ賄也、

水無口之
大蔵介

一同二斗五舛五合ハ

日数右同

一同式斗五舛五合

日数右同

一同式斗五舛五合

日数右同

西田七左衛門尉殿

一同老舛者

ミ老丁之代

一米式斗五舛式合五夕

日数五拾日

一かたけ
彦八

一同式斗五舛式合五夕 日数右同

内匠丞

一同式斗五舛五合 日数右同

与吉

一同式石四斗ハ

正右衛門尉殿

六介殿

弥市殿

益右衛門

松介

李之助

久八

弥助

彦助

合拾人、正月十六日之晚より三月五日之朝まで

一上白米六斗式舛二合五夕

上御老人之飯米 日数四拾三分

合米六石八斗五舛五合

内 白米三斗式舛式合五夕

右、左右衛門重政手勢召列たる三拾五人の賄かた、差引算用

せし總合なり、上御壹人とハ即重政を云へり、

447 「北郷久加世別記上文在」

久加ハ同月七日上津浦へ帰陳矣、下文在、十三日、

448 「蒲生谷口氏 上文在二月廿七日」

一有馬ヲ三月七日ニ出船仕、柳之ミなどへ中一日逗留申、

明日十日ニ天草之内上津浦村江參着申候、下文在、十四日、

八日辛未

449

寛明日記云、三月八日辰ノ下刻、自鎮西宿次飛脚到来、

一寄手大名、依伊豆守差圖面々引拂於原ノ城飯國スヘシ

ノ由、江戸ヨリ被 仰遣、

一有馬表依平均、伊豆守・左門兩人ハ天草・長崎邊へ打

越、御仕置之沙汰有之、其ヨリ肥前國名護屋并唐津ニ

至リ、筑前國福岡庄ニ掛リ、筑紫ヲ順見シテ、豊前ノ

小倉ニ着、

450 元寛日記云、同八日未ノ下尅、自鎮西宿次来、二月廿七

日・廿八日兩日責城落城、其記録委細有注進、將軍家

御機嫌御快然也、則被遣奉書、鎮西御仕置之次第被仰遣、

寄手之諸將、依伊豆守差圖面々引拂原城、飯國々、有馬

藤掛集書云、

表依平均、伊豆守・左門兩人直ニ打越、天草・長崎ニ致御仕置之沙汰、自其肥前之名護屋赴唐津辺、至筑前国福岡庄、荒増巡見於筑紫、着豊前小倉、

島原寄手の諸將帰陣之夏、附松倉父子流罪之事、

一去程に原の城落去、悉破布平均して、諸將三月中旬に何れも不残帰陣なり、伊豆守信綱・左門氏鐵ハ有馬より天草島へ渡海し、それより長崎へ打越仕置等申付、陸地を肥前之名護屋・同國唐津・筑前の福岡の城・博多表を巡見し、豊前の小倉へ帰着有、然處に江戸より為上使太田備中守、是も小倉へ被参、九州の諸將悉小倉へ召寄、上意之旨を被申渡趣ハ、今度在陣の面々、尽粉骨落城の儀、御満悦に被思召候、松倉儀領分仕置等悪敷に付島原一揆差起り候事、曲事に思召候、依之改易被仰付、森内記へ御預、嫡子右近をハ讃州生駒壹岐守へ被預、弟三弥ハ當分松平長門守請取て、以後會津へ預被遣、寺澤兵庫頭儀天草一揆蜂起に付て、天草

嶋四萬石被召上流罪の儀を被成御赦免之由申渡也、左候て伊豆守信綱、鍋島信州へ被申ハ、今度無下知に城乗被申事被背御軍法の由被申候へ者、信州返答に、私手の檢使榊原飛彈守父子塰の手へ被乗候に付、我等者共檢使にあやまち有てハ鍋島家の恥辱と奉存候、家来共乗込申候由被申候、其時信綱榊原父子へ被尋候處に、飛彈守被申も、いかにも其通にて御座候、私忝若輩者にて無十方一番に乗込申に付て、世忝を討せ候てハ無曲存、續て拙者もの共も乗込申候由被申候、然ハ兎角此儀ハ於江戸御詮儀可有之と被申、各退出也、左候て於江戸御吟味あり、鍋島并榊原父子閉門被仰付候得共、無程御赦免被成候事、

覺

【島原侯】 【勝家】
一松倉長門守 霜月廿四日嶋原居城へ下着、極月八日有

馬表へ出軍、

【右子】 【重利】
一松倉右近 霜月廿八日嶋原江下着、極月六日有馬表へ

出軍、

〔御書院番頭〕 〔貞清〕
一板倉内膳・石谷十蔵、極月四日從神代嶋原表へ打廻被

成、其日者神代江引取、明ル五日嶋原へ御越、同八日

有馬表へ出軍、

〔佐賀侯〕
一鍋島人数、極月五日今村迄押来、明ル六日より山手を

有馬表へ被押、

一有馬中務人数、極月十一日二日有馬表へ参着、

〔柳川侯〕
一立花左近人数、極月十四五日有馬表へ参着、

〔忍侯〕 〔信綱〕
一松平伊豆守・戸田左門、正月四日有馬表へ着陣、

〔大目付〕 〔正重〕
一上使井上筑後守、正月七日有馬表へ着、

一上使兼松弥五右衛門、正月七日有馬江着、同九日江戸

江帰上、

〔正吉・晴吉明トモ〕
一日根野織部、正月八日有馬へ着、

一上使石川弥左衛門・宮木越前守、正月廿八日有馬へ着、

一本郷庄右衛門、正月廿五日着、

一酒井因幡守・駒杵長次郎、二月朔日着、

一高橋三四郎、二月十六日参着、

一水野藤右衛門、二月廿二日着、

〔熊本侯〕 〔忠利〕 〔忠之〕
一細川越中守・黒田右衛門佐人数、正月廿二日有馬へ着、

〔直澄〕
一黒田甲斐守・同市正、正月廿五日着陣、

〔久留米侯〕 〔豊氏〕
一有馬玄蕃頭、二月朔日有馬へ着、

〔福山侯十萬石〕 〔勝成〕
一水野日向守・同美作守、二月廿二日有馬へ着、

〔豊後杵築侯四萬石〕 〔忠知〕
一島原城代小笠原老岐守・来島丹波守、正月十七日嶋原

へ着、

〔祐久〕
一天草城代松平主膳・伊東大和守、御横目杉原四郎兵衛

を被遣事、

一島原御横目下曾根三十郎、二月廿三日嶋原へ着、

〔小倉侯十五萬石〕 〔中津侯八萬石〕 〔康長カ〕
一小笠原右近大夫・同信濃守・松平丹後守、二月日有馬

へ着、

〔此間賣口間教書アリ、前卷ノ〕

旗・馬印之覚

〔重昌〕
一板倉内膳正馬印、白キ絹、切さきの半月、家老池田新

兵衛

〔重矩〕
一板倉主水正馬印、赤キ瓢箪上に小熊を附て、

〔貞清〕
一石谷十蔵指物、浅黄の四半に金の五の字

〔信綱〕 〔ハ〕
一松平伊豆守旗、地白、紋の登り梯子を付、まねき同、

453

馬印角取紙の多つり、大馬印白き吹貫、紋ハ登りと同前、家老和田利兵衛・小澤仁右エ門・篠田九郎右衛門・

石川作右衛門

一黒田甲斐守馬印、二段之羽熊「長興」「白」

一戸田左門旗、地白、紋赤き丸三ツ、まねき同前、番指物、地紺、面くの名苗字白ク書付、家老大高金右衛門・戸田次郎右衛門「治部イ」

一戸田淡路守馬印、スケ笠三階

一同三郎四郎馬印、三段の羽熊「白」

一細川越中守旗、地白、上に紺九曜、下に組この紋有ル、馬印ハ猩々緋の瓜形、下に金紙の切さき付て、番指物、紺の二本、しなひ、紋金にて上に九曜、下に一から九

まで、使番指物、赤き鷹、浅黄も有之、

一同肥後守馬印、黑白段々のばれん「光尚」

一黒田右衛門佐旗、中白上下紺にて組この紋有之、馬印ハ奉書切さきの輪貫、番指物四本、シナイ銘くの出

シ有之、

一鍋島旗、上白下黒筋違に染分、下に組この紋有之、馬

印ハ大羽熊「白」

一甲斐守馬印、鳥毛のミヤウガ「直澄」

一有馬玄蕃頭旗、上白下黒、白キ黒キ釘貫を付、馬印、

十一文字、端に鳥毛付て、番指物、銀の天つき

一同兵部中務事馬印、白き鳥毛ニツダンコ「忠頼」

一立花左近旗、上白下黒、黑白組この紋有之、馬印、シ

テノニツダンコ、大馬印、旗同前の染分、下に金のイ

ラ高、珠數緒紅イ、番指物、三本しない色、旗と同前、

上に鏡の家付て

一小笠原右近太夫旗、赤く白き三階菱、番物赤キ四半

に紋同前

一寺澤兵庫頭旗、地白、石餅附て、馬印、小熊二段のだ

んこ、下に金の切先きのたんこ一ツ、大馬印ハ白き四

半に黒餅、番指物、白き二本しなひに石餅「黒」

一井上筑後守指物、赤地に黒き五の字「正重」

一同清兵衛指物、赤地に金の丸の内に左り二

一榊原飛彈守指物、白き四半に赤き五「職直」

一同左エ門指物、赤き四半に白き餅

一馬場三郎左衛門指物、赤き四半に白き五【利重】

一松平甚三郎指物、赤きのれんに上に鳥毛を付て【直恒】

一牧野傳藏指物、銀の札にいろはにはへと、長サ五尺計

一水野日向守馬印、黒鳥毛唐笠二階、旗黒地白き永樂、【勝成】

一同美濃守馬印、金のたはね熨斗、家中番指物、黒キ四【勝俊】

半に白キ裏錢の紋有る、旗父子同前

一松倉長門守指物、地黒ク、少シ上の方ニ赤キ筋、横に【勝家】

二筋、家中指物なし、猩々緋の羽織、

454 天草覚書云、同八日中田村江御着海上三リ、亦上使御目付ノ

コト也、

455 一昨日有馬ハ陣拂ナレトモ順風心ならず、市來八左衛門

尉宗友等此日有馬を出船し、柳ノ瀬戸に泊れり、

456 『蒲生土有馬氏家藏』

覺

清敷丸船頭

志摩允

野村新兵衛下人岩助 谷口助右衛門尉下人九左衛門 竹之内次郎

兵衛尉下人善兵衛 谷山諸右衛門尉 相良小右衛門尉下人源太

池田助六 同名源左衛門尉下人大左衛門

合十二人

右者清敷丸之乗合

三月八日

九日壬申

457 「天草覚書」

九日ニハ壹町田江御止宿陸ニリ、亦上使御目附衆ノ事ヲ云

ヘリ、

458 市來宗友等風潮随意ナラス、柳ノ瀬戸ニ滞船、

459 「薩本島原軍記」

正月廿六日に天草張番細川越中守殿衆清田石見守上津浦
江被居候ニ、嶋津豊後守・喜入撰津守人数千餘人召列代

合候、其後天草ニ而鬼利支旦那被仰付候、右之帳相認、北郷佐渡守ニ持参らせ、三月九日上津浦出船申、有馬江参、嶋津下野守同心ニ而、松平豆州老・戸田左衛門殿掛御目候、帳者戸田左衛門尉殿へ被召置候間、同十二日ニ佐渡守如上津浦罷帰候、

十日癸酉

460 天草覺書、同十日、志岐之内富岡江御止宿^{陸八}、上文九日ヲ見合ヘシ、

461 十日、市來宗友等蒲生衆を率ひて江津浦に着船、

十一日甲戌

462 「加世田小川監物日記」

とら三月大

一十一日ニ三原左衛門佐様有馬より上津浦へ御渡り候、

三日中ニ上使天草へ御渡り之由候、

463の1 「天草覺書」

同十一日、肥前長崎へ御着^{海上}、茂木村御渡海、夫ヨリ唐津へ御廻り、豊前小倉へ御出會御出船ト承及、此時御上使石谷十藏様小倉へ御出合被成候由、

463の2

右此覺書ハ、宝永七寅年御國廻上使御下向ニ付、天草郡私領御領之初り、其外古来より有來次第、郡中庄官富岡江會合して可遂吟味候処、左ニ記所之天正十七己丑年より、天草郡小西撰津守行長之領地ト為り、夫ヨリ以來御代々御定之品萬覺書ニ記、組々大庄屋本ニ有之云々、

十二日乙亥

464 十二日、北郷佐渡守久加有馬より上津浦に飯れり、

十三日丙子

465 「小川監物日記」

一十三日ニ松平伊豆守様・戸田左門様かうつらへ御渡り、
巢元へ御通り候、晩ニ薩摩衆皆々御暇之由候、

466 「薩本島原軍記」

一天草之番手、入来院石見守・北郷佐渡守請取ニ而候、
佐渡守者富岡ニ而天草退衆改、寺澤兵庫頭殿出船ニ而
同三日ニ富岡江参、四日より六日迄改御座候、松平主
税助殿・伊藤大和守殿・寺澤兵庫頭殿家中衆相合候而
改、三月十三日ニ松平豆州老上津浦へ御着候、御船元
迄北郷佐渡守・三原左衛門佐・入来院石見守・市来八
左衛門尉四人罷出候、直巢元之様ニ御通候間、彼地迄
北郷佐渡守・三原左衛門佐罷越候、伊豆守殿より被仁
聞候者、早々上津浦江罷渡、千束嶋・湯嶋鬼利支且狩
申付候而、上津浦之人数を相返候而、佐渡守事富岡に
て退衆改前々為仕由候間、富岡江参、其首尾申候得と
承候間、上津浦江罷戻り云々、
下文は十五日に採記す、

467 「薩本島原軍記 上文ハ二月廿日ニのす」

二月廿三日之夜、中納言相果候、葬事終而、任遺言、
下野守三月十三日ニ薩摩打立、四月十四日ニ江戸へ参
着申、土井大炊頭殿・酒井讃岐守江遺言之通申入、其
遺物ハ五月十六日ニ土井大炊頭殿江致持参候、

468 「北郷久加世別記 上文在」

一島原出陣鹿兒嶋之惣人数五千七百三十一人
内人躰式千六百十九人、雑兵三千百十式人也、
一嶋津豊後守 喜入撰津守 北郷佐渡守 三原左衛門佐
入来院石見守 山田民部少輔 新納加賀守
一普請奉行伊地知左右衛門尉 村尾源左衛門尉
「薩本軍記畢」
同三月十三日、伊豆頭守殿上津浦江御着船也、三原左衛
門重饒・渋谷伯耆守重國・久加・市来八左衛門御船本迄
罷出矣、直ニ脇本之ことく御通被成候、久加巢本迄可罷
越之由、重饒より承之、重饒同心ニ而巢本へ罷越矣、巢
本ニ而伊豆守殿被仰聞候ハ、久加者早々上津浦へ罷帰、
千束嶋・湯嶋之狩申付、上津浦之人数者相帰シ、久加事

富岡ニ而退來之改為仕之由候間、又々富岡へ參候而、其首尾可申達由被仰付ニ付而、則上津浦へ罷戻、千束嶋・

湯嶋へハ伯耆守重國被差越候筋申談云々、下文在十四日、

十四日丁丑

469 「小川監物日記」

一十四日ニ上津浦出船申候、十六日ノ七ツ時ニ小松原へ

舟着申候、陳中之事小日記別帛ニ有之候、御大將者下

野守殿・豊前守殿也、其餘者喜入摂津守殿・北郷佐渡

守殿・入来院石見守殿・新納加賀守殿・山民部殿・三

原左衛門佐殿也、

470 「蒲生軍來差出」

三月七日ニ御陣拂ニ付、上津浦へ參、同十四日ニ上津浦

罷立、同十七日ニかもふへ罷歸候、

同十四日晚、上津浦致出船云々、下文在十五日、

472 「蒲生書留 上文在七日」

一上津浦村江三日逗留仕、三月十四日ニ出船仕、天草之

内火之嶋と申處ニ掛一夜をあかし、次日出水米津へ參

着申候事、下文在十六日、

十五日戊寅

473 「薩本島原軍記上文ハ十三日」

佐渡守事者云々、三月十五日ニ又富岡江罷渡候而、松平

主税殿・伊東大和守殿・寺澤兵庫頭殿家中衆同前改帳持

參仕、伊豆守殿・(左門カ)左衛門殿江掛御目候、千束嶋・湯嶋狩

者入来院石見守仕候、左候而三月十六日、豆州老・左衛

門殿より御暇被下、何れも首尾能罷歸候、

471 「北郷久加世別記上文在十三日」

474 此日、入来院石見守重國、三角瀬戸を発して歸國、十七

日府宅ニ回れり、其日 世子鹿兒島を発して江戸に行給

ふ、伊勢兵部少輔貞昌・島津豊後守久賀等従ふ、此行久賀改て豊前と稱す、

475 「貞昌与力有川喜左エ門覚書上文ハ二月十四日ニする也」

兵部殿も御供、我等も仕候、伏見にて我等事ハ伊勢寿林と申人へ幕之相傳被成候、急ニ御發足ニて伏見より京へ罷上、十日餘逗留申、江戸へ罷下候、

476 「北郷久加世別記上文在十四日」

同月十五日、富岡へ致着津矣、然而主税介殿・大和守殿・兵庫頭殿内より前々改被仕候衆、同前ニ伊豆守殿・左門殿へ罷出、改帳差出之云々、下文在十六日、

477 史官雜抄云、先是家久奉 高命、遣師警固肥後天草、且行援兵于有馬也、故正月朔日之攻撃、二月二十八日屠城之時、各関其事有功、斬獲殆乎二百級、或被傷殞命者亦有之矣、光久齋書以呈執政、賀賊徒威殲之事、相良主計頼堯舍命价于江城、

478 「肝付兼屋家臣緒方主殿覚書」

一三月十八日ニ上津浦より御帰陣被遊候而、市来之湊へ御入津候、

479の1 「北郷久加世別記上文在十五日」

同十六日御暇被下、三原左衛門重饒(ヤ)同前ニ富岡出船、下文在十七日、

479の2 「全」

同十七日、京泊着津、

479の3 「全」

同十八日、鹿兒府江罷越之處、光久公江戸御参觀付而、於串木野奉参會、拜 尊顔、富岡・天草之次第奉言上之、

480 「蒲生谷口氏 上文在十四日」

一三月十六日ニ出水米津を打立申、同十七日蒲生へ参着申候、

山田右衛門佐口達一

一 今度嶋原天草之鬼利支丹起企申者共ハ、松右衛門・善右衛門・宗意・源左衛門・山善左衛門与申者ニ而候、

彼者六年以前天草之内大矢野千束嶋と申所江数年致山

居罷在候欵、寛永拾四年丑ノ六月中半より彼五人之者

共申廻シ候者、先年天草之内上津浦と申所江住居仕候

半天連、廿六年以前天下様吳國江御拂被成候刻、半天

連書物を以申置候ハ、當年より式拾六年目に當り天よ

り善人童子出すへし、其おさなき子習わさる諸学を極

て可顯天下ニ、木ニ葉重り、山野に白旗立、東西に雲

の焼る事有べし、諸人之栖家皆焼、終野山も草木も黒

焼可申由書置候事、

一天草之内大矢野に罷在候四郎と申者を、右之書物に引

合候而考候得者、彼書物之通ニ少も不違候間、扱ハ彼

者天人ニ而候半、無疑与右五人之者共諸人申廻シ貴ミ

申候、四郎生年拾六歳ニ罷成候事、

一 鬼利支丹起り申候時分ハ、寛永十四年丑十月廿五日比

ニ天地之動程之不思成事有べし、其時皆々驚申間敷由、五人之者共申聞せ候事、

一 彼五人之者共如申、丑ノ十月廿五日之夜半時分ニ、俄

ニ鬼利支丹ニ立帰り、村々ニ頭立者共廿人談合仕、脇

々之者を働人数を催し、嶋原所々之代官并ニ他宗之出

家茂鬼利支丹ニ罷成者共を切捨、在々所々ニ引籠り

罷在候事、

一 右之様子、松倉長門留守居之人數聞付、人数百餘人

深江と申在所江押寄、鬼利支丹之者共四拾人程討捕候

而、松倉人数城に引取候を、鬼利支丹之者共跡をした

ひ、嶋原之城へ押寄、城涯迄責懸候得者、松倉人数城

へ引取、門を立候処を打破り、追籠候得ハ、城中之士

強く防ぎ候故、鬼利支丹引取、町寺を不残焼拂、面々

の在所へ引籠り、其後談合仕候者、四郎を守立宗門之

司ニ可仕之由、皆々談合極め、村々より一人ツ、天草

之四郎所へ使を立申候ハ、先年宗門をころひ後悔ニ存

候間、今度四郎を鬼利支丹之大將ニ仕宗門を取立可申

由、四郎方ニ申遣候事、

一 鬼利支丹起り申候時分ハ、寛永十四年丑十月廿五日比

一四郎与我等大将を仕、方々江押寄、宗門ニ不成者を討殺し、宗旨を取立可申之間、何方江茂我等取掛候ハ、下知ニ随ひ可申与存、人数を書立可有之由、右之使ニ四郎返事仕候刻、四郎大矢野宮津と申所ニ人数七百程かたらひ、宗門を立罷在候、其後嶋原之内大江与申所へ罷越候間、明日之談合ニハ先長崎へ人数老萬弐千程を二手ニ分ケ、樋之峠も木崎へ人数を揃置、長崎江使を立、宗門ニ可成哉又成間鋪哉と申遣シ、宗門ニ不相成候ハ、長崎へ押寄火を掛打亡し、夫より嶋原之城江取掛可然之由、四郎談合極め候処ニ、天草上津浦与申所より嶋原之内大江へ申来候ハ、右之様子を寺澤兵庫頭留守居之人数堅く相聞、天草富岡之城主三宅藤兵衛先とシテ人数を揃へ、上津浦之近所嶋子敷迄人数押寄候間、早々加勢を給り候得与、四郎方江申来候ニ付、長崎江参候儀指置、人数千五百ニ而四郎天草へ参り、上津浦人数を先立、嶋子敷之勢を切崩し、本戸迄押寄、三宅藤兵衛を討取、夫より二日間を置、富岡之城江取懸り、二之丸迄押入候得共乗取儀不罷成候故、則引取

申候間、嶋原之内口之津へ四郎参候事、

一松倉長門守江戸より嶋原江御下之由相聞候、其上鍋嶋先手之人数茂高田与申所江参候由、四郎承驚、左候ハ、原之城江取込ミ可申由談合相極め、丑十二月朔日より村々飯米不残右城江運入、其上口之津江御座候長門守藏之米五千石程右城へ取込候事、

一四郎事、同三日ニ原之城江籠申候、惣人数茂四日・五日両日ニ男女共ニ不残籠城、普請茂五日・六日両日之内に仕廻、城中之木屋七日・八日ニ仕廻、小旗を立申候事、

一同九日ニハ天草より人数二千七百程男女共ニ籠り申候、天草より乗候而参候兵船并ニ大江之舟とも打こほし、屏囲ニ仕、三十丁立之関船老艘残置申候事、

一城中に籠る人数男女共に都合三萬七千御坐候、一村々ノ人数を方々江致手配候事、

一城中物頭、上津浦之助右衛門・惣右衛門・三平、道嶋村之次右衛門・休右衛門、三會村之次兵衛・六右衛門・次右衛門、有馬村之次右衛門・休右衛門・長助、不津

村之休蔵・儀右衛門、串山村之太郎兵衛・惣左衛門、有江村之甚右衛門・久意・清十郎、安徳村之休兵衛・覺右衛門・儀右衛門、石津村之太右衛門、口之津之甚右衛門・神吉・次郎兵衛・長右衛門、大矢野之七左衛門・源兵衛、

一軍奉行之事、松倉長門守家中松嶋半之丞、有江村之久意、大矢野より之牢人、相津村之源宗、石津村之太右衛門、

一十二月廿日之城責之儀ハ、右衛門作事請取之場へ罷在候故、然々不存候、正月朔日之城責之儀ハ、十二月晦日之晩相極候由承届候間、城中其心得仕、相待罷在候処ニ、如案正月朔日ニ押寄被成候を強く防ぎ申候故、城中ニ手負十七人御座候事、

一二月廿一日之夜討之時ハ、大江口より式千人内千四百人ハ黒田右衛門殿仕寄、六百人ハ寺澤兵庫頭殿仕寄ニ掛り申候、出丸より千人鍋嶋信濃守殿仕寄ニ掛り申候、三之丸より五人立花飛彈守殿・松倉長門守殿仕寄掛り申候、細川越中守殿仕寄場ハ要害能御座候故、手當不

仕候、押へ計城中へ置申候、城中ニ手負・死人四百三十人御座候、内百卅人城内へ引取申候事、

一城中ニ鉄炮數五百三拾丁御座候、玉葉正月廿日より切れ申候、乍去少々ツ、嗜候而、二月廿七日之城責ニ打申候事、

一城中に籠り申候牢人四拾人御座候、年来ハ五拾計之者共ニ而候、軍手立敵之諸勢見計掛引仕候、彼者何方より籠候共在所ハ不相知候事、

一城中の飯米二月十日比より切れ申候ゆへ、諸勢殊之外迷惑仕候、乍去少ツ、持候者茂御座候事、

一四郎本丸ニ碁を打罷在候処ニ、鍋嶋信濃守殿勢籠より石火矢參候而左之袖を打切、側へ罷居候男女四五人討殺申候、城中之者是を聞存候ハ、御運之故能有と頼母數存候処ニ、ケ様ニ四郎方へ鉄炮に當り、其上側ニ罷在候者共多亡ひ申事不吉之仕合と、力落之由皆々申候事、

一右衛門佐存候ハ、右之仕合共ニ付心痛罷在候処ニ、有馬左衛門佐殿より度々箭文ニ而被仰様子、普代之者儀

候之間、城中ニハ致手立、野心可仕旨被仰越候間、尤

三月廿九日

御返事申候、我等手前ニ人数七百御座候内、五百人内

々ニ而申合候間、廿一日之夜我等請取場三之丸より寄

四月朔日甲午

手を引入、火を掛させて乗取せ申、我等者四郎方江参、

寄手乗火を掛申候間、城内を御出濱^{「手」}出^{「イ」}ニをり、落船ニ

482 『寫本家藏』

乗候而一先何方へ落させ給へとたすけ行、船乗生捕可

尚以弾正儀 薩州様御帰府迄御番可相勤由承届候、

申与存候、定二月十八日ニ右之通有馬左衛門佐殿より

仍而大坂より爰元へ参候御物之送状、此度差下候、

箭文、廿一日晚ニいさせ被成候を城中之者見出候ゆへ、

火事より以後之分を見合被寄候、乍去此外ニ不見出

我等存分相違仕候、其箭文之趣ハ重而日限を定、又々

送状も可有之与存候、方々尋求候へ共、替合之儀ニ

箭文を射可申由被仰候を、城中之者共不審ニ存、四郎

而、何茂然々有所ヲ不存候、先見出候分を三札ニ仕

へ参候而、右衛門佐ハ心易と相見得候とて、我等ニ繩

進入之由、物奉行被申候、^(衆脱之)

を掛、松山出丸ニ置被申候、二月廿七日ニ本丸へ列寄、

桑畑藤右衛門尉・大脇正右衛門尉、去廿七日未明ニ参

本大手ますかたの内ニ而我等女房子共被切候、我等事

着候、又御方ヲ去月五日ニ罷立飛脚、同日晝過ニ参着

繩を懸罷在候を、小笠原右近殿人数見出可切与被成候

候而、追々御左右承達候、

間、有馬左衛門殿より被下候箭文を取出差上候ニ付、

一御葬送先月十日之御日取ニ相濟、薩州様御事御葬過

御助被成候、右御尋之儘我等存候通無偽致言上候、以

候ハ、近日當地江可有御参府由候哉、就其松平伊豆守

上、

殿ニ為御内談有馬へ兵少老御使之由候、定早々御返事

寛永十五年

山田右衛門佐

相聞得候ハんと存候事、

一為御使野州老近日御方御立ニ而、此方へ御参上之由候、御宿之儀芝之定御宿へ被相誘候様ニと申渡候事、

一有馬一揆之者之城、先月廿七八日ニ落去付、為御祝詞

御使可被差上由候つれ共、仕合相良主計方爰許へ参上

候間、御年寄衆へ被進候御連署、彼人持參可被仕由、

得其意候、未無参着候間、被参次第則持參可被申候、

并御案文具ニ拜見仕、相心得候事、

一有馬表江山民少・新賀州・市八左殿・伊地知左右殿〔田〕〔有榮〕〔忠清〕〔米〕〔宗友〕〔重政〕

と被為居、皆々手ニ被合候、其上諸外城衆手柄候而、

首共及式百被捕候哉、一段之仕合候、此方江者何方よ

りも不相聞得、御書面ニ而令承知候事、

一爰元餘無人ニ付、輕衆可被差上由候へ共、御上洛可為

近日付、被召留之旨承置候事、

一兵少老より承候、爰元御輿方状以可被仰上候へ共、今

朝有馬へ御越候故、無其儀由細々申入候、御宿所江茂

同前ニ申届候事、

一爰許御借銀一圓無之候而御手迫候、京大坂江茂雖申上

せ候、銀子無御座候而御借銀之利拂さへ不罷成候故、

借銀仕此方へ指下儀も難成由候、從御方も急度銀子被
差上儀罷成間敷候哉、何共笑止千萬候事、

一大廻船新納勘解由殿へ仕出、奉行被仰渡候哉、次第ニ

時分能罷成候間、當地へ追々着船候へんと待申候事、

一久志本式部殿庭被為作候付、そてつ之儀被仰候哉、大

廻船ニ可有御乗せ由候、此方へ参次第式少へ進入可申

候、將又此方上下之御屋敷何茂御無事ニ候、世上茂無

相替儀候間可易御心候、尚期後音時候、恐惶謹言、

〔寛永十五年〕

四月朔日

鎌田出雲守

政統〔花押〕

彈正太弼

久慶〔花押〕

三原左衛門佐様〔重勝〕

山田民部少輔様〔有光〕

川上左近將監様〔久國〕

伊勢兵部少輔様〔貞忠〕

下野守様〔島津久元〕

人々御中

〔本文書へ旧記雜録後編五〕二九四号文書下同〔文書ナルベシ〕

483 十四日丁未、久元至江戸、

二十四日丁巳

484 寛明日記云、四月廿四日自御旗本為 上使太田備中守

資宗。至小倉、伊豆守左門ニ申 上意之趣、依テ九

州。大將。等ヲ小倉ヘ招集メテ 上意ノ趣キヲ申、今

度島原・天草両所ノ一揆ノ起ル事ハ、守護ノ政道柔弱

ナル故也、其罪死罪ニ相當ス、雖然忠戦ヲ致スノ由達

上聞、御喜悅候間、死刑一等ヲ有ラレ、松倉長門守ハ

美作ノ國ヘ配シ、森内記長継ニ預給フ、舍弟右近ハ讚

岐ニ配シ、生駒壹岐守高俊ニ預給フ、寺澤兵庫頭モ最

罪科雖為同前、抛身命一戦ニ忠ヲ盡之由達 上聞、故

ニ死刑ヲ有メラレ、領地ヲ没収セラレ、次ニ鍋島信濃

守并一旗同手ノ御目付榊原飛彈守父子、御軍法ヲ相背

キ城責仕段不届ニ被 思召、然トモ各戦功有之ヲ以テ

被免許、逼塞可仕之旨ノ仰ヲ蒙ル、然トモ不経幾程各

御免ヲ蒙ル、残ル諸大名ニハ今度面々粉骨ヲ盡シ、家

陪臣若干 頼ノ者トモ手負死人有幾多ノ由、不便ニ被 思召候、

依之早速之成功御機嫌不斜、各緩々ト。休息仕、参動

ノ。時節御直キニ可被 仰謝之由演説ス、御披露奉頼

之由、諸大名皆御懇。ノ上意難有奉存、此旨可然様ニ

御披露奉頼之由御請申上、皆帰國ス、次ニ

松倉カ高来ノ城ハ、小笠原壹岐守忠知請取之、

一其後松平伊豆守・戸田左門 上使大田備中守立九州赴

江戸、

「右旁注ハ元寛日記ノ文言也」

485の1

寛明日記慶安二年八月ニ云、

一廿五日、去ル六月朝比奈源六・庄田小左エ門方ヨリ伊

達遠江守方ヘ申シテ云、先年公義御普請并役儀等勤タ

ル書付差越候様ニト依申送、豫州宇和島ヨリ書付目錄

兩人方ヘ遣ノ間、兩人方ヨリ老中ヘ披露ス、

485の2

一十八年以前申ノ年以來御役所勤之寛

一寛永十四年霜月ヨリ同十五年四月マテ、肥前國島原一

「揆ニ付、 上使へ舟御用ニ立申覚、

「外ニ九年・十二年ノコトニケ矣、略ス」

船數五十艘・水主千二百十四人、但飯米ハ自公儀被下

候事、

八月廿五日

伊達遠江守判(秀宗)

朝比奈源六殿(正重)

庄田小左エ門殿(安慈)

二十七日庚申

486 「小川監物日記」

卯月小

一廿七日ニ上使より有馬之引陳ニ付、船入由候ニ付、御

分國へ御借之由候、舟追立として宮里老岐守殿坊津へ

御通之宿送り立候、廿八日ニ津留新左衛門尉殿・伊集

院治右衛門尉殿片浦へ被為通候、右同候也、

487 四月二十四日丁巳、世子江戸ニ着せ給ふ、

488 此月松平伊豆守・戸田左門手帖にて、皆吉長右衛門弟声

塚権右衛門与申者、北郷式部殿江居申由、御とらへ可有

御越候、

489 五月十六日戊寅、島津久元(題)閣老土井利勝の第に就きて、

先公の遺物を致せり、

490 「家藏本」

覚

一きりしたん宗之事

一一向宗之事

一うせ衆之事

一不審成旅人之事

一博奕之事

右ハ、鹿嶋上下之横目衆へ見立候而可被申出之由、可

仰渡候、

寛永十五年五月十八日

(表紙)

肥前嶋原天草軍立之事

十九ノ下

地頭

鎌田出雲守政統代

嚙

長野彦右衛門祐豊

右同

高橋権之助家豊

右同

佐土原丹後守祐□

一寛永十四年の冬依□籠城、三原左衛門久大將ニ而早速

人数被差遣候、其後嶋津豊後守久賀・下野守久元人数

召列、御大將ニ而御越候、左衛門殿ハ於敵陳ニ百矢を

被射候、寅正月元日大合戦有之、此方ニも手柄又ハ討

死之衆も有之、板倉殿ニも鉄炮被當候、野本源右衛門
同然、村尾三右衛門手柄被申候、年の夜、鬼利師且よ
り夜討ニ鍋嶋手の陳を討崩候、

一肥前州天草嶋原一揆依令籠城、正月元日及一戦候、大
隅守光久公、從江戸中納言様依御病氣御暇御給、伊勢
兵部少輔貞昌其外諸士御供ニ而、嶋原之様御立寄御見
合就被遊、三ヶ國の諸士被召立候、知行五石以上之士
ハ、寛永十五年戌寅正月十四日發指宿、趣肥前國嶋原
ニ陳ス、五石以下一ヶ所取迄の士ハ、正月末ニ指宿立、
同嶋原ニ陳ス、嚙役として長野彦右衛門尉祐豊・高橋
権之助家豊、彦右衛門疝氣病故先達而被罷帰候、指宿
士以上百三拾人被召立候、地頭鎌田出雲守殿・軍大將
嶋津下野殿久元・島津豊後守殿久賀・三原左衛門殿百
矢ヲ被射候而、弓矢之譽有之、同年三月廿三日攻落故、
薩隅日三州之諸士、不及跡立之士ハ先達而帰宅、先立
士ハ落城以後帰宅ハなり、
一天下軍大將、石谷十蔵殿・板倉内膳殿ニ而候、
一島原城之事、肥前國士ヲ物近國之武士共皆々用心いた

し、天下旗本武士兵糧攻ニ仕、三月廿七日七ツ時より
攻落ス云々、火相掛り、廿九日城焼捨なり、
一此年二月廿三日、中納言家久公依御逝去、諸士長髪ニ
而令帰宅云々、

一島原城之事、近國大名并旗本土より攻落候事、

一指宿古川清右衛門・柳田三郎左衛門喧嘩之次第ハ、別

紙横折ニ書記置候、寛永十五年四月十日之喧嘩ニ而候、

清右衛門親濱崎清左衛門并嫡子善右衛門・清右衛門兄

之下人助八三人討死ニ而、はか源忠寺ニ有之、三郎左

衛門父子手負、切腹被仰付候、高・屋敷被召揚候、は

か市之原城江寺江有之候、三郎左衛門姉妹ハ、加世田・

田布施之様ニ被参候而縁付被申候、伊賀ニハ遠流被仰

付候得共御断申上、寛永十七年切腹被仕候、悪口被申

候岩切太郎左衛門高被召揚、遠方江寺入、鎌田慶右衛

門同然、

一高百九拾壹石五斗

暖役ニ而

長野彦右衛門

一同七拾八石

佐土原帯刀帳(アヤ)

一同四拾五石

吉富次郎左衛門

一同三拾壹石

永田甚右衛門

一同三拾九石

北原万右衛門

一同三拾石

宮内権兵衛

一高四拾九石

海江田少監物

一同三拾壹石五斗

岩切四郎左衛門

一同三拾石

長野六左衛門

一同七拾六石

徳永藏右衛門

一同三拾貳石四斗五舛六合

田中筑後守

一同三拾貳石五斗

常松與右衛門

一同三拾貳石五斗

市采覺兵衛

一同三拾五石五斗四舛

永池七兵衛

一同三拾石

池田將左衛門

一同三拾四石

伊駒和泉守

一高八拾六石

川崎勘助

一同拾貳石三斗

上野與次兵衛

一同貳拾壹石六斗

有馬志摩介

一同貳拾四石八斗

柳田伊賀守

一同貳拾九石

竹内十郎左衛門

- | | | | |
|------------|---|--------------|---------|
| 一同式拾八石 | 高橋權之助 | 一同式拾壹石六斗 | 長田乘左衛門 |
| 一同式拾壹石 | 上山志摩介 | 一同七拾七石三斗五舛四合 | 前田源太左衛門 |
| 一同式拾四石四斗 | 圖師與兵衛 | 一同式拾式石式斗 | 萩原善兵衛 |
| 一同式拾八石 | 脇田勘兵衛 | 一同式拾石八斗 | 小田清太左衛門 |
| 一同式拾九石 | 松山孫左衛門 | 一同式拾石 | 田實嘉兵衛 |
| 一高式拾石壹斗 | 平嶺孫兵衛 | 一同式拾九石五斗 | 鎌田六左衛門 |
| 一同式拾石壹斗 | <small>養子長兵衛立、廿壹才、弥左衛門弟</small>
小田早左衛門 | 一同式拾石 | 高崎宇右衛門 |
| 一同式拾四石式斗 | 前田六左衛門 | 一高式拾石 | 田中主馬進 |
| 一同式拾六石八斗 | 馬場勘兵衛 | 一同拾壹石三斗 | 本田大膳亮 |
| 一同式拾石 | 前田普賢坊 | 一同拾四石 | 四本勘右衛門 |
| 一同式拾石五斗 | 長田志摩介 | 一同拾壹石式斗 | 鎌田膳正 |
| 一同式拾石六舛式合 | 染川右近將勇 | 一同拾七石三斗 | 平賀源七 |
| 一同式拾石 | 山下吉左衛門 | 一同拾石三斗 | 横山十右衛門 |
| 一同式拾壹石七斗 | 坂本萬馬丸 | 一同拾六石式斗 | 山崎藏右衛門 |
| 一同式拾五石壹斗 | 寺田與左衛門 | 一同拾八石 | 湯地利部左衛門 |
| 一高式拾石 | <small>子軍右衛門立</small>
鎌田權右衛門 | 一同拾石壹斗四舛五合 | 田中相右衛門 |
| 一同式拾四石六斗五舛 | 上山大炊兵衛 | 一同拾式石 | 鯨坂五左衛門 |
| 一同式拾式石三斗 | 入部五兵衛 | 一高拾石壹斗 | 有馬權右衛門 |

一同拾石貳斗	池崎次五右衛門	一同拾六石	德永内藏允
一同拾石	石嶺甚兵衛	一高拾貳石四斗	上野武兵衛
一同拾石三斗	山田次郎左衛門	一同拾壹石四斗五舛	永田頼泉坊
一同拾參石	脇田甚左衛門	一同拾壹石貳斗	竹内少左衛門
一同拾石六斗	永池平次郎	一同拾壹石貳斗	池田茂右衛門
一同拾壹石四斗	野村大炊左衛門	一同拾石三斗	寺田掃部介
一同拾石壹斗	長山次郎兵衛	一同拾五石	鎌田九左衛門
一同拾五石四斗	前田大藏允	一同九石七斗	鎌田民部左衛門
一同拾八石七斗六舛	東郷五郎右衛門	一同九石四斗	有馬十右衛門
一高拾四石	湊川正兵衛	一同九石	西牟田太左衛門
一同拾三石壹斗	鯨嶋本左衛門	一同九石貳斗	宮里道乘坊
一同拾壹石貳斗	佐土原休左衛門	一高九石四合八夕	坂本五郎左衛門
一同拾壹石九斗	福嶋少左衛門	一同九石九斗	鎌田主殿介
一同拾三石貳斗	是枝小四郎	一同九石	迫田休兵衛
一同拾壹石	森惣右衛門	一同九石	石嶺藤兵衛
一同拾石五斗	上山清右衛門	一同八石壹斗	前田六郎左衛門
一同拾壹石三斗	有馬善左衛門	一同八石	前田彦兵衛
一同拾石六斗	東條四郎左衛門	一同八石	入部少右衛門

老人ニ而候

一同八石	伊駒志摩介	一同五石	堀内良圓坊
一同七石八斗	伊駒兵左衛門	一同五石	齋藤吉左衛門
一同七石	野村五郎兵衛	一同五石六斗	山口佐左衛門
一高七石七斗	関光順坊	一同五石八斗	有馬千兵衛
一同七石	寺師万右衛門	一同五石	堀内良右衛門
一同七石五斗	海江田與左衛門	一高四石三斗五舛	久本平左衛門
一同七石	辻子大藏允	一同四石八舛	黒木弥右衛門
一同六石五斗	山名三郎兵衛	一同四石九斗四舛九合	上床覚兵衛
一同六石七斗	春田甚左衛門	一同四石七斗	岩本次左衛門
一同六石六斗	平嶺權左衛門	一同四石三斗五舛	山下覚右衛門
一同六石三斗五舛	久永少兵衛	一同四石五斗	鎌田否右衛門
一同六石	長山新兵衛	一同四石七斗	山下主計允
一同五石九斗	山下藏之助	一同四石五斗	日高藤右衛門
一高五石六斗	須賀市右衛門	一同四石	迫田相左衛門
一同五石六斗	岩切太郎左衛門	一同四石式斗九舛四合	坂本休左衛門
一同五石	坂本兵吉郎	一高三石六斗	山下仲左衛門
一同五石	中村大藏丞	一同三石	山下兵七兵衛
一同五石四斗	案村傳左衛門	一同三石	竹内五郎兵衛

一 同三石	鎌田慶右衛門	一 同貳石	池田玄番允
一 同三石	北原作吉	一 同貳石	小田少外記
一 同三石	平原與左衛門	一 同貳石	川俣休助
一 同三石	山本請右衛門	一 同貳石壹斗	丸山休右衛門
一 同三石貳斗	徳永十右衛門	一 同貳石貳斗	折田少兵衛
一 同三石七斗	脇田四郎左衛門	一 同貳石	上野弥兵衛
一 同三石	古川請右衛門	一 同貳石壹斗	玉利伊豆介
一 高三石	山下采女正	一 同貳石	坂本新助
一 同三石五斗	大山吉右衛門	一 同壹石八斗	中村万四郎
一 同三石五斗	寺師市兵衛	一 高壹石八斗	山下兵左衛門
一 同三石	山下主税助	一 同壹石七斗八舛	長井兵左衛門
一 同三石六斗	坂本吉兵衛	一 同壹石七斗	江田仲左衛門
一 同貳石八斗	濱田五兵衛	一 同壹石七斗	長井孫左衛門
一 同貳石七斗	圖師権兵衛	一 同壹石七斗	竹内助七郎
一 同貳石六斗	竹下菊千世	一 同壹石六斗	丸野十兵衛
一 同貳石六斗	柳権兵衛	一 同壹石貳斗	有馬大覚助
一 同貳石壹斗	脇田七兵衛	一 同壹石壹斗	岩本平右衛門
一 高貳石壹斗	柳田兵次郎	一 同壹石	柳田作左衛門

船頭

一同老石

稻留主水祐

瀬戸口本乗坊

横山神吉

鎌田渡兵衛

一高老石六斗

入部助右衛門

生駒和泉守

永池源之丞

入部諸右衛門

一同老石式斗

小田喜左衛門

圖師利兵衛

松田直左衛門

馬場造右衛門

一同老石六斗

岩本喜右衛門

黒木三左衛門

一同老石四斗

園田少内記

以上百三拾人被召立候、

一同九斗

大石助左衛門跡

一高五石以上之士ハ、寛永十五年正月十四日ニ立、三月末ニ帰宅なり、

一同八斗

濱田少右衛門

一高五石以下之士ハ、正月末ニ立、二月始ニ帰宅なり、

一同七斗

木場郷右衛門

一嶋原立以前ニ一向宗改稱敷、指宿衆中徳永四郎左衛門・

一同六斗

丸尾仁右衛門

永池清左衛門・同弥七左衛門・生駒和泉守・坂本對馬・

一同五斛

川俣大藏丞

濱崎清左衛門ニ而候、

一同老石

重山用右衛門

御禁制ニ而仏ヲふませ候而御免被成事候処、弟之四郎

一高三斗

馬場清兵衛

兵衛切腹ニ而兄之名代ニ立、高・屋敷等無御構候、濱

一同三斗

小川七郎兵衛

崎清左衛門等ハ後之妻瀬崎浦より入来候者ニ而、子共

一同老斗

上山藤吉

ニ者無之、下人共佛ヲふみ不申候而、高・屋敷被召揚、

一同拾六石九斗

竹下宗兵衛

士迄被召放候ニ付、嶋原ニも清左衛門・善右衛門立不

一ヶ所取

鎌田次右衛門

申候、然ハ古川清右衛門ハ清左衛門二男ニ而候処、段

染川慶右衛門

鬼塚幸左衛門

海江田七左衛門

々恥辱之訳有之、柳田三郎左衛門所江押掛及喧嘩候、

其御濱崎清左衛門并下人助八・善右衛門ハ討死仕候、

柳田三郎左衛門父之伊賀事ハ手負候、清右衛門御手ヲ

被切命助り、高・屋敷迄御免候、三郎左衛門事ハ高・

屋敷被召揚、三郎左衛門切腹、伊賀者遠嶋ニ而候処、

三年目ニ切腹仕御断申上候、父子ともニ切腹仕候、古

川方者清左衛門父子共ニ討死、并助八被討果候、三人

共ニ本源忠寺ニはか有之候、伊賀父子者市之原城江寺

ニはか有之候、かいしやく人海江田石見・鎌田権右衛

門ニ而候、古川方下人助左衛門・助八にハ、乗船用意

持セ来ル内扨人ハ被討果候、喧嘩討死ニ而候、寛永十

五年四月十日なり、

五月二十七日己丑

492 『村尾源左エ門家藏』

抑去年之冬、筑紫有馬一在所南蛮宗徒之逆黨被籠城、當

春落去之節貴殿被為在合、^(被)披露武功之由承及候、殊ニ鐘

のミニあらず、他國之衆へも證據を取かハさるゝ之旨、

少鐘疵共候、然共逐日御平愈之段無比類候、吾等御同与

ニ而一入大慶ニ存候、猶近日致帰國可申達候、恐惶謹言、

嶋津彈正

『寛永十五年』
五月廿七日

久(花押)

村尾源左衛門尉殿人々御中

493 二十九日辛卯、日高十兵衛正盛、去ル二十八日ノ攻城ニ

蒙レル石疵瘻すして、此日遂ニ死ス、一雄宗勝居士と法

号せり、

494 「盛香集」

落城の時、伊豆守御息松平甲斐守拔掛ニて働きも有之候

得共、拔掛多人数なれハ、あなち知人もなかりし、あ

る時於江戸大久保彦左衛門伊豆守へ御申候ハ、御方にハ

座敷の上ニて理口ハ能の給へ共、軍術に疎き故、於嶋原

たま〜若き子息の抜かけして少ハ働もありつるよしニ、

取計悪敷あたら高名を無にせられけるハ惜事哉との給ひ

ける、伊豆守、されハ如何して高名とハ成ぬるへきと問

給ひけるに、御自分の子として抜駈して上の御軍法を破

る事不届也と、則勘當して追出し、竊に腹心のものに言

ひ含め高野山へ登せなは、流石成取計、無私仕形といは

れて、御自分をも人讀へし、上の御慈愛なとか其儘可被

差置、則可被召返、其時ハ抜駈の働き日本國中誰欵知ら

ざるべしとの給ひけれハ、伊豆守にも、誠に貴所の宣ふ

所の如くせざる事ハ無念の次第とて、閉口し給ひしとそ、

六月朔日癸巳

495 『寫本家藏』

有馬城責當年二月廿七日・八日及兩日、此方御備罷居候

處、落城乱刻、無御下知候得共、手前不届候而本丸へ参

見物仕候、右之旨可然様奉頼候、以上、

寛永十五年

六月朔日

南林寺

伊地知(重政)李右衛門尉

十三日乙巳

496 『在小濱氏手鑑』

新納加賀守

(墨引) 一和老御宿所

『税所氏』

忠清

猶々、是式候へとも、田舎茶送進申候、於有馬落城

之刻城近く参、永々寺領不及是非儀ニ候、如御存知

之刑部太輔戦死之儀、おや弥太右衛門忠堅鑓仕候事、各

々御存知之前ニ候、拙子事適参合むなく帰候ハん

事残多存候処、軍神又者拙齋忠元之守も能候するや、仕

合能所ニ参逢、寺領之躰ニ候へ共、我等一世之本望

達候、早々御面以いにしへの御咄も承度、我等手前

之其場之様子を咄申度存暮候、以上、

久々不得御意御床敷令存候、達者御座候由承大慶存候、

拙子事も于今寺領之躰ニて罷在候、一昨日爰元へ罷越、

懸御目相積儀共咄申度候、恐々謹言、

『寛永十五年』林鐘十三日

忠清(花押)

二十三日乙卯

497 『兒玉四郎兵衛利涉家藏』

始良御地頭

兒玉四郎兵衛殿〔利重〕

右者嶋原へ御立之時相付參人数

中侯主膳殿 石井甚左衛門殿 石田主殿殿

鎌田宮内左衛門殿 田野邊弥十郎殿 安田土佐殿

野添掃部殿 石田与左衛門殿

二番御与頭入来院石見殿御与下ニ入御奉公仕候人数

松山助右衛門殿 海老原七左衛門殿 田鍋佐左衛門殿

前田分右衛門殿 鎌田喜右衛門殿 入部仁左衛門殿

石田采女殿 森田山介殿

六月廿三日

498 〔天草覺書〕

一 寛永十四年丑十一月より切支丹蜂起、翌寅春原城落、依之寅正月富岡江御城番上使松平主税様貳萬斛・伊東大和守様五萬石、二之丸ニ御在番御目附杉原四郎兵衛様千二百石、是ハ出丸ニ御在番ニ而候、右御三人ハ寅六月迄富岡へ御留被遊候、

499 〔全〕

一 寛永十五年寅七月より天草郡山崎甲斐守様御拜領ニ成、三年之間御支配被成、寛永十七年辰四月、讃岐丸亀へ御所替被成候、

500 從町田出羽守殿使者被成進上候間、幸ニ存一書令啓候、

一 昨日以御奉書

薩州様江御承之趣為可申入、即 御奉書之写差下候、可有拜見候、先以有馬へ御下之様子、天草江人数被遣置候儀共、無吳儀被仰出目出度候、

薩州様有馬江御下之儀者、路次無御延引御急候間、尤如此可被 仰出候、天草之儀者御家中之衆色々無行儀

之儀共候而如何敷存候処、左様之儀も無別儀千秋万歳候事、

一 鬼塚源太左衛門尉昨日此地江来着候而、被仰越候趣具

承届候、其内於有馬表御家中衆被破軍方候由被 仰出、

寺家共被仕候、此中者鍋嶋殿・榑原飛騨守殿など被召

寄、稠及御沙汰候間、若諸國江被仰出儀も候へん欵与

存候處、昨日之 御奉書ニ而安堵仕候、就其申事候、

有馬江被罷渡候衆之書物一々見申候、惣別城責之時、

そなへの場を相はつし手ニあはれたる衆などの儀を、

從 公儀さへ曲事と不被 仰出候者、一旦寺家被仕候

間、定可被 召出候、従前方天草江被参候様ニ与被

仰付候衆、天草へハ不参候而如有馬氣任ニ被参候、又

従天草物頭衆江無断氣任ニ有馬江被参候衆、ケ様之衆

者御沙汰を稠被仰出儀ニ候処、其段者此度兎角不相聞

得候、城責之時為被合手衆之書物ニ而御座候、右如申

此段者もはや一旦寺家被仕間、 御前も相済可申与存

候、右申氣任之衆を能く御沙汰候而可被 仰上候、其

旨先日委申遣候間可相達候、将又下野守申候新納加賀

守殿有馬江為被罷越儀者、下野守委存候間、今度書物之趣少も無相違事、

一 御暇之儀兎角未被 仰出候、待遠御座候事、

一 従琉球糸之儀未兎角不申来候哉、承度候事、

一 當年其元風吹不申哉、作々おもては能候様ニ相聞得候、

此元盆前ニ少風之氣色御座候間、如何与申事候、尚期

後音候、恐惶謹言、

伊勢兵部少輔

七月廿六日

貞昌(花押)

下野守

久方(花押)

鎌田出雲守様(政統)

三原左衛門佐様(重勝)

山田民部少輔様(有榮)

川上左近将監様(久國)

彈正大弼様(島津久慶)

人々御中

(本文書ハ「旧記雜録後編五」一三二七号文書ト同一文書ナルベシ)

拵

一在町々におひて、貴理師且宗之者少も不隠居様ニ可入念事、

一従 公儀之仰出ニ、はてれんを尋出為申出ものには、銀子貳百枚可被下之由候事、

一いるまんを尋出たらんものには、銀子百枚可被下之由候事、

一きりしたん宗躰之もの尋出たらんものには、銀子五拾枚又者三拾枚、其様子により可被下之由候事、

一右之者共尋出候ものは、同宗躰ニ而在之共、ころひ申におひては其科をゆるさせられ、御褒美として御書出之ことと銀子可被下之由候事、

右之趣を以入精尋出たらん者者、先 公儀江之忠節と申、其上過分之銀子被下、其身のためニも成儀候間、可入精儀可為肝要候、

若又きりしたん宗躰之もの有之を、其所よりは不尋出、他所より尋出候者、其所之物主ニいたり深々敷可及御

沙汰候間、得其心不可致油断者也、

寛永十五年十月十五日

(鎌田政統)
出雲守判

(山田有榮)
民部少輔判

(三原重勝)
左衛門佐判

(伊勢貞昌)
兵部少輔

(川上久留)
左近将監判

(島津久元)
下野守

(島津久慶)
弾正大弼

十月大

「十六日乙巳」

一十六日、嶋原へ次郎兵衛小松原へ為商賣舟着候、彼者本きりしたんニて候故欵、急出舟可為仕由、御唼衆より被仰付候ニ付、窪田老岐殿・大山与七兵衛殿同心ニて行、即時出船させ申候、當町伊勢千代か父ニて候、彼子共舟へのり見参申候、

掟

一在々所々におひて、きりしたん宗門之ものすこしも不
隠居様ニ可入念事、

一従公儀之仰出ニ、はてれんを尋出為申ものニ者、銀子

貳百枚可被下由候事、

一いるまんを尋出たらん者ニハ、銀子百枚可被下□由候
事、

一きりしたん宗跡之もの尋出たらん者ニハ、銀子五拾枚

又ハ三拾枚、其様子ニより可被下之由候事、

一右之ものとも尋候ものは、同宗跡ニ而有之とも、ころ

ひ申ニおいて者、其科をゆるさせられ、御褒美として

如御書出銀子可被下之由候事、

右之趣ヲ以入精尋出たらんものニは、先公儀江之忠節

と申、其上過分之銀子を被下、其身為ニも成事ニ候間、

可入精儀可為肝要候、若又きりしたん宗跡之もの有之

を、其所よりハ不尋出、他所より尋出候ハ、其所之

物主ニ深く敷可及沙汰候間、得其意不可油断者也、

寛永十五年十月十五日

(三原重勝)
左衛門佐

(鎌田政統)
出雲守

(山田有榮)
民部少輔

(伊勢貞昌)
兵部少輔

(川上久国)
左近将監

(本文書ハ「旧記雑録後編五」一三三二号文書ト同一文書ナルベシ)

十一月十二日辛未

504 『谷山士人有馬氏家藏』

有馬江先船衆

主従三人 江夏五右衛門殿 益山弥兵衛殿 佐藤伊豆守

殿 杉尾千右衛門殿 主従三人 渋江藤七兵

衛殿 同九左衛門殿 主従二人 小倉七介殿

主従二人 牧田半兵衛殿 竹下勘左衛門殿

主従二人 西村右衛門兵衛殿 同二人 富山与介殿

合人数十一人

合夫丸七人

十一月十二日

堀久左衛門尉

六日甲午

西田貞右衛門尉殿

有馬千兵衛殿

507 寛明日記云、十二月六日、高力撰津守忠房轉遠州濱松城

三萬石、肥前島原四万石ヲ賜フ、

十二月五日癸巳

508 元寛日記云、同六日、高力撰津守忠房改遠州濱松城三萬

石、肥前島原賜四萬石云々、

505 寛明日記云、十二月五日、今日松倉長門守ニ切腹被仰付、

于時四十二歳、日頃領内ノ政法悪シク候故、百姓及難儀

不得已企一揆之段、西國之御目付衆委細 上聞ニ達スル

ノ間、様々被遂御僉議及此儀、舍弟右近儀長門守約養子、

然レハ可為同罪之處、島原ノ城ニ於テノ忠戰、奇特ニ被

思召候ニ付、死罪免許有之、

506 元寛日記、十二月五日、此日松倉長門守重次ニ切腹被仰

付、于時四十二歳、日頃仕置悪敷、百姓及難儀不得已企

一揆之段、西國之御目付衆委細達上聞之間、様々被遂御

僉議及此儀、舍弟右近儀長門守約養子、然レハ可為同罪

之處ニ、捨身命度々勳軍功之段被届聞召、死罪有免許、

509 一同十五年、渋谷恕右衛門殿足輕三人召列被罷下候、永

野殿「永俊危ハ皆吉久右エ門權能ノ女ニテ、弟モ段々アリシト見ヘ

俊様御内皆吉長右衛門公義囚人ニ付召捕之為ニ而候、

右之仕合者、長右衛門親今度嶋原へ籠城いたし、生捕

ニ相成糺明之處、悴長右衛門永俊様へ奉公いたし候段

白状ニ付、長右衛門妻子五人召捕、鹿兒島へ被差登候、

此元より茂宰領相付、渋谷氏へ相添差遣候、

510 「加世田小川監物日記」

寛永十六年己卯

正月大

廿日
一御祭禮如常、御名代伊集院宮内少殿、

一御家老中より御掟之條書、御禁断日之事・貴理師且宗之事・耕作人等之事、衆中へ申渡候由候間披如申候、

511の1
『加久藤本』

一此年入来院石見守重國・嶋津豊後守久賀奉行ニ而手札改有之、如久藤江者柳元喜左衛門宗真改衆とシテ被差越、其節之古帳等如左、

511の2
八日町五人与日記

一与主計助□与頭 拾兵衛尉 与三右衛門 善之介 左之介○

一与助左衛門□ 五郎右衛門尉 藤右衛門○ 内藏

右衛門○助左衛門名字 八兵衛尉○

一与李兵衛尉○ 彦右衛門□ 六七兵衛尉□ 善九郎○

一貴理師且宗弥稠御法度之通被聞仰候、具承届候事、
一往来之旅人ニ紛、右之宗躰入来儀茂可有之候間、一夜

泊之旅人も与中より委敷尋究、宿かし可申候、自今以後も不審成者入来候ハ、則披露可申上候事、

一先年札改之已後其所へ入来居付候旅人、亦者他國之醫者・山伏ニ紛、右之宗旨之者自然五人与之内ニ御座候ハ、則可申上候、自然脇々より緩之儀被聞召付候ハ、我々五人与中稠敷科可被仰付候、

寛永十六年正月廿九日

『右同様日記數十冊、虫付多略于此』

512
『家藏』

尚々、其元之文箱今度進入候、以上、

一書申候、仍其元天道宗之儀、今度きりしたん改ニ付被差越候奉行衆へ被成御内談、早速御改尤候、從御老中嚶衆へ被遣候御状、先貴老御拜見候て、其後嚶衆へ可被仰談候ハん哉、巨細柳元喜左衛門殿へ申談候、其元天道宗之師匠ニて候、曾木へ住宅候由、前々被仰越候、必定其申分にて候ハ、曾木も可被相改候条、早々其方より曾木何かし天道宗にて候由、田原主殿殿・関主殿殿迄可被仰

遣候、右兩人札改奉行として曾木へ被越候、此段御老中

女五百七人

より曾木嚙衆へも其元同前ニ御状被遣候、是又為御存知

地頭衆中并又小者

候、恐惶謹言、

出家社人籠

野村大学助

男女千六百六十二人者

二月廿九日

元綱(花押)

伊地知左右様
(重政)
人々御中

内
男七百十二人
女四百四十九人

町在郷座頭

513

加久藤衆中町在郷人数改目録

寛永十六年卯三月四日

寛永十二年ノ改之高
一男女式千三百廿六人者

同
加久藤嚙
白坂大炊左衛門尉
谷口次郎左衛門尉

内百四拾二人者

他方へ出候者

右者、鹿兒嶋より柳田喜左衛門尉殿御越被成候而、
〔本ノ誤也〕

百七拾五人者

死走之者

引残テ

男女式千九人者

入人但寛永十二年改已後

外ニ

男女二百八十九人者

生子右同

514

覚

男女百廿七人者

加久藤之内

三口寛永十六年改之高
惣合男女式千四百廿五人

内男千四百六十九人

粟下村
榎田村(龜園ノ)

女九百五十六人

一とか人 對馬介

一五人与

助四郎

一樋ノ口ノ早介

内

男女千二百六十三人者 男七百五十六人

一同 弥兵衛尉

右科人之事、寛永十二年御改之時、八十歳餘之もうもく之者ヲかくし置候科ニ而御からめ被成、五人与ニ御あつけニ而候、其後御噉不相濟候付、長々擽者ニ而格護難成候故、五人与共以談合つなをとき候而、今にあつかり置申候、但五人与へ者老人ニ付二貫文ツ、科物被仰付、上納仕候、右御改之時御奉行野村監介殿・後醍院喜兵衛殿ニ而、子細御存事ニ而候、以上、

加久藤之内

中福良村

一科人 川北村長谷之 与左衛門

一右同 同村之 筑後 寛永十四年ノ三月 相はて候

一五人与 源藤 一同 与左衛門尉 駒崎之

右科人之事、寛永十二年之御改之時、合男女四人かくし置候科ニ而御からめ被成、五人与ニ御あつけニ而候、其後御噉不相濟候付、五人与共以談合つなをとき候而、今にあつかり置申候、但彼之五人与ハ其時人をかくし置候事を申出たるニ付、科物無之候、右之御改之御奉行野村監介殿・後醍院喜兵衛尉殿ニ而候、子細御存事ニ而候、以上、

中福良

一科人 炭塚村邊之内ノ 對馬介 はしたノ 一五人与次郎三郎 下ノやしき 一五人与与七兵衛 下ノやしき

一五人与大蔵 同村ノ 一五人与千左衛門

右科人之事、寛永十二年之御改之時、卅七歳之孫七と申病人をかくし置候科ニ而御からめ被成、五人与ニ御あつけニ而候、長々覚悟難成ニ付、五人与共談合ニ而つなをとき、今にあつかり申候、但五人之者老人ニ付二貫文ツ、科物上納仕候、右御改之御奉行野村監介殿・後醍院喜兵衛尉殿ニ而候、子細御存事ニ而候、然處右之科人御ゆるし被成候由、寛永十五年ノ二月、右御奉行衆より噉衆江御状被遣候、
寛永十六年 粟下村庄屋 瀬戸山種左衛門尉
卯三月十五日 中福良庄ヤ 赤川次兵衛尉
御改奉行 柳元喜左衛門尉殿

515

書物

先年御改之刻、我等女房之妹加治木又八郎様御前様へ御奉公仕候、御内方ハ手札不被下ニ付、于今札持不申候、

寛永拾三年之八月、御暇被下候而我等所へ参候、其後加久藤衆中小原織部佑殿所へ遣申候間、今度御改奉行へ御申候て手札可被下候、以上、

大膳亮内

寛永十六年三月十六日 上田三左衛門尉判

加久藤御暖衆

谷口次郎左衛門尉殿

白坂大炊左衛門尉殿

返々申入候、其元へ罷居候はしりものハ、我等召遣候時分八介と申候、于今承候へハ、名ヲかへ申候而、此中かくれ居候由承候間、其心得可被成候、少もまかい申事ニ而無之候間、口能有間敷候、乍重言申入候、我等も近日中ニ在江戸ヲ被仰付罷上申候間、其内ニ罷済不申候而不罷成候間、必々三日中ニ御遣可被成候、於御延引者迷惑千万ニ御坐候する間、夜白をきらわす御遣待入候、此元柳喜左衛門殿へも申理

候、則可被召寄由候、是又為御存知候、其外間耆人罷居候、右兩人共ニ可被遣候、万事為御心得候、以上、

一書令啓入候、仍此度之札改ニ、我等之内者先年はしり候物、貴老御暖内加久藤へ罷居由、柳本喜左衛門尉殿より承候、早々鹿兒嶋へ可被遣候、若参間敷と申候ハ、打しはり候而三月中ニ御遣可辱候、如御存之走物之儀、此度之札改ニ皆々改出被成、本々被返付候事無口能候間、早々可被遣事待入候、我等も近日中ニ上洛ヲ被仰付罷登候間、一刻も御急可被遣候、是又為御心得候、恐惶謹言、

伊勢美濃守

三月廿四日

貞長判

伊地知左右衛門尉殿

人々御中

寛

一今度之御改帳無呉儀相納候事、

一切札之事、御沙汰之上を以、八拾人之札之内五十三ハ科物相添被召上候、残而廿七人之札返被下候事、

一 黒札三ツ御替候て被下候事、

一 おろし札四人分之科物、礎ニ上納仕候事、

一 牛馬死札卅一帳相添、有馬主馬首殿へ堅相渡申候事、

一 付内老疋ノ札、桑引ノ清右衛門尉馬札年違・駒駄ノ

違有之候て、科物銀式匁

一 先年御改之時、搦者之儀、庄屋衆書物を以細々御奉行

衆石見守殿・豊後守殿へ申入候へ共、庄屋衆書物にて

ハ御披露難被成由候条、我等申候も、其時之改衆野村

監介殿・後醍院喜兵衛尉殿巨細之段首尾為被成儀候間、

右之兩人へ御尋可有之由申候へ共、當分野監介殿在江

戸由候、後喜兵衛尉殿櫛良へ才木奉行として越被成、

今程帰宅にて無之候条、御尋も難成由被仰付候間、右

之書物にてハ相濟不申候事、

一 竹木改之儀、一畚かいね御用不立竹木ハ改間敷通承候、

乍去杉・檜木ハ一尺廻より被付出候、落木ノ事同前ニ

付出可有候事、

一 所之井手川除ニ付、柴竹入用之時ハ如前々可有之候事、

一 天道宗之事一方ニ不相究儀候条、先々其儘ニ可召置之

由候事、

寛永十六年三月廿五日

柳元喜左衛門判

加久藤

「ツキメナシ」

518 『蒲生本』

覚

一 上様御為ニ可惡儀下々取沙汰候ハ、小事之儀ニても

早々我等へ可承事、

一 貴理師且・一向宗之儀、向後被精入可被聞立事、

一 於所ニ不寄老若氣任之人可被聞立事、

一 御立狩倉江自然行司衆之外立入人候ハ、承へき事、

一 物毎ニ噯衆三人ニ能々可有相談事、

一 我等身上之儀も不寄善悪可有注進事、

一 此外ニ茂不寄何色各等承候て、可然儀無用捨可承事、

右七ヶ条之儀、今度噯衆以三人申渡候、御奉公之事

候間、無油断可有其覚語候、以上、

寛永十六年四月六日

市来八左衛門

野村新兵衛殿

519 昨日態以使札令申候、彼片浦源之丞一類宗躰改之事、日

夜令急候て、其様子然々衆を以三日中必々此方へ可被申上候、江戸へ御使衆近日立にて候故、御急之儀候、少も油断有ましく候、彼者とも被差越候、慥可被相渡候、恐々謹言、

五月二日

かせた

噯衆中御宿所

右、喜入忠政自筆ノ案文也、年間不詳、姑ク此ニ載セテ重テ

小川日記ヲ考ヘシ、

520 ▽ ⑩光久公御家督以後初而御下國之節△

被仰出條々

今度帰國以前、於 御城 公方様御直被 仰聞候之趣者、國中不奢、萬花麗之儀無之様可申付之旨御詫候之間、各可得其意事、

一 國中諸沙汰之儀、 黃門様御時ニ不相替様ニ可申付事、

一 諸士諸事氣任之儀於有之者、曲事之段可申付事、
(御脱カ)

一 其理節旦宗之儀、當家代々禁制候之處、近年者天下之
「黄ナルヘシ」

御法度稠被 仰出候ニ付、弥々其沙汰候之間、此宗躰
(御令)

之儀、片時(不羞麗)茂不忘置不可有緩事、

一 於江戸被 仰出御法度之趣、不相背様ニ連々心懸念を入へき事、

一 自然於 天下御弓箭共於有之者、別而可致御奉公候之間、

諸士連々武具馬鞍等嗜、軍役可相動心懸可為肝要

事、

一 酒女之儀能々可相嗜事、

一 黃門様被 仰置儀不相違可申付候、自然其旨相背之輩

於有之者、少も無用捨其科可申付候、能々可承置事、

一 諸士知行ニ相懸出物、未進無之様可相調儀肝要候、然

者連々不入儀ニ費米錢、花麗かましき儀一切令停止、

出物・軍役等可相動心懸不可致油断事、

一 刀の尺式尺八寸より上、脇指之尺卷尺八寸より上、同

朱鞘大かくつのはの事、

一下々の者、下ひげ・つりつげ(⑩つり髭)并ひたひ大なてつげ・大
そりさけの事、

一 小者共、袖へり・上下之帯、絹之事、

一 結徒黨致荷擔、或者妨をなし、或ハ落書・張文・博奕・

不行儀之好色、其外不似合事業仕へからざる事、

一 大身小身共に自分用所之外、買置商買利潤のかまへ致

へからざる事、

一 かち若黨衣類、さや・ちりめん・平嶋・羽二重・絹・

細布・木綿之外停止之事、付弓鉄炮之者、絹・細布・

木綿之外不可着之、小者・中間衣類、萬ニ可用候事、

一 物頭・諸役人、萬事ニ付而不可致依怙并諸役者、其外

品ニ常ニ致吟味不可油断事、

一 上意之趣、縦如何様之者申渡といふとも不可違背事、

右条々無緩疎可相守者也、

己卯

七月朔日

(本文書ハ「旧記雜録後編六」三〇号文書ト同一文書ナルベシ)

521の1 寬明日記云、寛永十六年己卯七月五日被仰出、

521の2 条々

一 日本國被成御制禁之吉利支丹宗門之儀、乍存其趣彼法

弘者、今ニ蜜々相渡候夏、

一 宗門之族結徒黨企邪義、則御誅罰之夏、

一 伴天連同宗旨ノ者隠居所へ從彼國續物送り與ル夏、

右依之自今已後彼此渡海之儀被停止畢、此上若於指渡

候者、其船ヲ破却、并乘來者悉可罰斬刑所被仰出、依

執達如件、

寛永十六年

七月五日

(阿部重次)
對馬守

(阿部忠秋)
豊後守

(松平信綱)
伊豆守

(堀田正盛)
加賀守

(酒井忠勝)
讚岐守

(土井利勝)
大炊頭

(井伊直孝)
掃部頭

(本文書ハ「旧記雜録後編六」三四号文書ト同一文書ナルベシ)

条々

一 吉利支丹宗門雖為御制禁、今以從彼國蜜々伴天連ヲ差

渡ニ付而、今度カレウタ〔歌流陀イ〕船着岸ノ儀停止之夏、〔御イ〕

一 領内浦々ニ常々艦ナル者ヲ付置、不審有之船来ニ於テ

ハ、念入可相改之、自然異國船着岸ノ時者、從先年如

御定早船中ノ人數ヲ改、陸地へ不上シテ早速長崎へ可

送遣候夏、

一 自然不審成者船ニ乘来、又ハ蜜々ニ其船中ノ物ヲ陸地

へ上候輩有之ハ可申出之、随訴人之高下急度御褒美可

被下之、若屬詫ヲ以テ頼ニ於テハ、其約束ノ一倍可被

下之夏、

右ノ條々所被 仰出候、依執達如件、

〔也イ〕
〔阿部重次〕
對馬守

寛永十六年七月五日

〔阿部忠秋〕
豊後守

▽ 伊豆守 △

〔本文書へ「旧記雜錄後編六」三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

右之趣、今度為上使大田備中守殿長崎へ被召下、諸國

江江戸從御年寄衆被仰渡之旨、堅固ニ可相守者也、

八月廿三日

〔島津光久〕
薩摩守

右、高札ニ相納、御家中諸所へ立置申候、但肥後國中

ケ様ニ為被成由候、

〔本文書へ「旧記雜錄後編六」五一号文書ト同一文書ナルベシ〕

『十四日

一天下よりきりしたん法度之高札并ニ當家老衆より高札、

新納次郎四郎殿・阿蘇主殿助殿御持せ被成、於弓場御

披被成候、左候而町へ被立候、

右之通加世田小川監物日記、此年九月に見得候』

〔本文書へ五二一の3号文書ノ行間ニアリ〕

524 「正本在」

御物出候儀ヲ專御沙汰候テ、諸人述懐ニ罷成儀不

被思召かと存候夏、

一出銀未進利銀二割

一 黃門様御納戸銀借用之衆、返上之利三割

一 押並銀之利二割

右者、銀子之御沙汰儀者致道理至極候間、如何様ニ茂被仰付候而茂御無理非道とは申間敷候、殊押前出銀未進遣候衆、黃門様御存生之時より之御沙汰候得共、終ニ依無首尾今度急ニ被仰出候、是茂御道理至極トハ乍申、御當代急ニ被仰出候とて、殊之外述懐がり可申候、押前出銀未進托者其儘ニて被召置候得者、御借銀之煩ニ罷成候間、不及是非候、ケ様之儀今分ニ重候事、一薩州様御不祥ニ罷成候かと存候、然處ニ先年別而御奉公共被仕候衆ニ茂、米ニて手付共被成置候、其米知行ニ被召成被下候衆、皆如本之知行ヲ被召放へきよし、急ニ被仰出候、此儀ヲ先々御延引被成、今程御談合茂可入候哉、黃門様御時辱キ御意ニて如斯ニ候処ニ、御當代ニ知行被召離、迷惑之由可被存候、若人之痛候儀重申候間、御心得入可申候哉之事、

一諸人心揃候様ニ於無之者、自然世上ニ六ツ敷儀出来候時、御國あやうく御座候夏、

一御弓箭など出来候時、令心揃候而御下知御法度ニ茂隨候様ニ連々被成置可為肝要候哉、必世上ニ事起候時分、

少々之間ニて氣任ニ罷成と相見得申候、去年有馬立之時分、少々之間ニてさへ以之外氣任為仕由候、ケ様之儀ヲ俄ニ御法度ケ間敷被仰出候而茂不罷成物ニて候間、諸人心持ヲ平生好聞召、其上ニて御心得可入候哉之事、

一天下何も泰平ニ可有与思召候而者、可為御油断事、

一昔より天下ヲ五代三代と被治たるハ、無御座候、將軍家茂頼朝三代ニて相絶候、其後者王子杯ニて御継候得共、或二代・三代・四代杯ニて、其後足利家と新田家と將軍争ニ罷成、終ニハ足利家理運ニ成り、天下を十三代被治候、十三代目を光源院殿と申候、此公方様殊之外たじやくニ御座候而、古法ヲ御破古士共皆退キ、官領杯茂為御立退、後ニ三好家より御腹めさせて公方相絶候を、信長御出京候而、天下公方無之候而不叶と被仰、光源院どの御舍弟之奈良一乘院御門跡ニ而御座候を還俗させ御申候而、公方ニ御借候つれ共、是も還て信長へ被成敵、都を御落候而中國へ御下、毛利家を御頼被成候、其儘終ニ公方相絶候、其後太閤是茂不及二代、從夫當公方御三代ニて御座候、子孫無

之ニ付天下氣遣ニテ御座候、若如何様之儀扨出来候時、殿様御在國之時分ニ而御座候得ハ目出度候、御在江戸之時なと天下六ツ敷儀茂候ハ、世上之并次第ニ被成候て、江戸へ成共又何所江成共被成御座候而こそ可有候、其御國へ御入候儀ハ中へ成間敷候、然時ハ御國無矣儀候而諸人御歸國ヲ奉待候様ニ御座有度儀ニ候、私事申出まちへ成行候得者、何事を思召候而茂成間敷候、ケ様の氣遣者奉始忠直公、霜臺老・野州老扨より外ニ者何を存候而茂、或ハ小身ニテ罷成間敷候、明日茂御氣遣ニ及へき儀、常ニ思召候而、無御氣遣人之心揃不申候て者あやうき事ニ御座候事、

一 天下におひて自然御弓箭出来候時、御一手ニ而可被成御奉公由、今般酒井讚岐守殿へ御直談被成候、然時ハ明日如何様之儀出来候半茂知不申候間、左様時御人数可被出御格護肝要ニ御座候亘、

一 乗馬衆如何程可被出候哉、天下之御法様ニ候得者、一萬石ニ廿騎ニ而候間、七拾萬斛ニ者千四百騎之賦ニテ御座候、中々左様ニハ罷成間敷候、責而五百騎茂御出

候而、其上者陸武者いか程と御定被成置、其人々遠方へ可罷出仕立、人夫之出様等兼而談合候而不被召置候ハ、俄ニハ中々罷成間敷之事、

一 軍衆兵糧之事、

一 弓鉄炮衆賦之事、

一 右人数夫賦之事、

一 矢種子・鉄炮玉葉之事、

一 石火矢之事、去年有馬立之時ニ見申候、日々ニ仕寄鉄

炮・石火矢日夜殊々敷儀ニテ御座候つる、ケ様之儀人

ニ御後候而者、江戸ニテ被仰上候儀、無首尾ニ可罷成

候亘、

一 境目を大方ニ思召かと存候事、

一 境目之地頭ニ者被付御心、所之衆中茂必相附候様ニ被

召懸候へてハ、御用被立間敷候、江戸ニテ之被成様、

又他國之様をも見聞仕候に、萬事其心持にて無餘儀所

被召遣候衆ニ者、過分ニ御心付候事、

一 堺目ニ被召置候衆、又内場之様ニ被召寄ニ付、最前之

移加増返上被申候を被召上候時、三分一か半分被下候

か、又被仰聞様茂可有之候哉、兎角御沙汰なしニ被召上候而者、其衆の心持如何ニ御座候、是茂 黄門様御時被入御念候間、其御心付入可申候哉之事、

一 鎌田源左衛門者下大隅へ被召移候、又仁禮主計助加治木之儀可承由被仰付候、定而是茂可召移候や、此兩人杯者専被召仕衆ニて御座候処ニ、他國へ被召移候て御用ニ立申間敷事、右兩人、加治木・下大隅へ被召移候ハ、心持茂如何候はんや、鹿兒嶋へ被召置乍兩所之儀承候而、時々加治木・下大隅へ茂罷越候様ニ被仰付可然候半欵、無餘儀御奉公為仕衆大方ニ罷成候得者、御為ニ罷成間敷候事、

一 近頃推參之儀ニ候得共、殿様被遊御学文候得かしと歎息仕候事、

一 世上を見申候ニ、長久なる家者すくなく御座候、昔者古家多御座候つれ共、當世ニ成、不恐天道我心の行儘ニ被行候故、不長久と見得申候、信長・太閤杯者飛鳥も落程の威勢之人も、學文之道無之、任利根ニ我心次第ニ被行、長久すへき心持無之候故、不至二代ニ候矣、

525 『家藏』

「接目キレナシ」

屋敷主へ深々敷罪科可被仰付事、

一 右宗旨之者、或醫者・山伏・出家ニ紛、或牢人、居付

一 御當家之御事、御代々御信心被成、專學文之道を以被

治御國候、遠き事をハ不被存候、近キハ從 日新様以來之儀承及候、 龍伯様 惟新様へ者仕申候而、学文之道ニてはつれたる儀少茂無御座候つる、 日新様な

とハ朝之御膳參候而必六韜を御讀候而為聞召由承及候、御存之ことく當家ハ、 日新様中興ニ而御座候事、

右之條々、我等罷立候刻、式部様・中書頭殿江者委敷我等之存分之儀申達度候而如斯候、被御覽置事之序而などニ者、自然被仰上候儀茂御座候半哉、御分

別次第ニ候、以上、

寛永十六年八月六日 伊勢兵部少輔 貞昌

右、松田七郎殿本を以、文政己卯二月十一日寫載之、霜臺様まいる

候旅人・商人之由申掠、又者邊途寺門前・人遠村并明

家などへも可隠居候条、念を入可有礼明候、此節計之

儀ニ而も無之候、永々可被入精候、天下之御法度者不

輕儀候、まゝ(未カ)一大事ニ被存堅固ニ可被申付候、他國稱

法度候間、治定色々姿を替、やつれ候而當國へ可參候

条、端々迄無油断入念可被相改儀肝要候、若緩之所於

有之者、各曲事之段可及御沙汰候、恐々謹言、

十月十五日

三左衛門佐

重庸(花押)

鎌出雲守

正統(花押)

山民部少輔

有榮(花押)

河左近將監

久國(花押)

彈正大弼

久慶

加久藤嘜衆中

伊地知(重政)右衛門尉殿

526

覚

一きりしたんの宗門雖御禁候、数年弘彼法候付而、かれ

うた船渡海御停止之處ニ、今度長崎へ差渡之間、乗来

輩死罪被仰付候、然者去年者領内浦津江彼船就令着岸

者、湊へ入番を付置、訴詔於申上者、其子細可致言上

之旨、以条数被仰出候へとも、以来之儀者、右之船来

候者悉可行斬罪之旨候事、

一面々領分之内、海上見渡し候所ニ常々番之者を付置、

かれうた船来候ニおみてハ早見出候様ニ可申付候、領

内之浦へ彼船来候を他領より見出候者、其領主可為油

断事、

一かれうた来候を見出候者、高力撰津守長崎奉行中へ早

速可注進之、并大坂へ可申越事、付隣國之面々へもし

らせをくへき事、

一かれうた船たとひ雖見来、沖ニかけ有之時、卒尔ニ取

懸儀堅可為無用、いつれの湊ニ而申付といふとも、高

527

力撰津守長崎奉行入可致差圖之由被仰付之旨、可存其旨、但差當儀有之時者各別之事、

一かれうたの外唐船并吳國舟着岸之時者、此以前御仕置之ことく、はやく船中之人数を改、陸地へあけず、長崎へ可送遣之事、以上、

寛永十七年六月三日

右、於嶋原被仰出候条書写、

(本文書ハ「旧記雜録後編六」一三四号文書ト同一文書ナルベシ)

寛明日記云、寛永庚辰十七年六月

七日、天川人六十餘人於長崎梟首ス、去月被風放長崎表へ漂着ス、皆是耶蘇宗門、殊ニ彼ハ盜賊ノ由、依有其聞被誅、

一今年筑紫ニ有虫、其形如牛頭ニ有劔、大サ如蕘、世説ニ曰、耶蘇亡靈欵ト云々、

528

「加世田小川監物日記、此年六月」
十九日
一同日長崎へあま川舟着濟候、去年參候時、自今以後渡

海無用ニ候、若又来候ハ、可被召果之由堅被仰候処ニ

来候間、即刻めし被果候、御奉行兩人江戸より御下候、

并幸力撰津守殿も長崎へ御渡り之由、右之使衆被仰候、

其後聞得候ハ、右之舟ノ客衆・中乗衆ハ皆被召果、舟

衆計被召残、舟ニ乗候而御帰候、南蛮へ參、右之御嘍

ニて候間於永代往来停止之通堅可申通、堅被仰聞之由

申候、それより長崎も當國も番手稠數候、江戸より御

奉行衆ハ加賀詰民部殿・野之宮新兵殿也、就其當國よ

り三原左衛門佐殿御上り候ニ付、當所衆中廿人可被召

列由、廿日之曉被仰越候、則□觸渡、廿一日ニ皆被打

立候、右之衆より嘍衆へ使被頼仕候様子ハ、昨□三十

人御賦之内分限之御人数ハ被召留、無足衆計被遣候事、

無心元候と被申候、然共急之事ニて返事なき内ニ被打

立、小松原より出舟ニ而候、嶋原迄ニて則廿七日ニ皆

帰帆ニて候、彼方何事も無之由候、

同日

一求麻へ弓箭可有之と聞得候、左候ハ、つゞき可有之間、

諸人内々用意可被仕由、御地頭より被仰越候、「案」
内膳殿・「鹿」ヨリ帰候人ナリ
六郎左衛門尉殿使ニ聞得候、其後聞得候ハ、一戦候つ

れ共事済候、相良半兵衛殿大將ニて城ニ御こたへ候、はけしきたゝかひニて、其後城へ放火候時、諸人乱入候時、半兵衛殿廿人程召列、臥草にて被相待候、よせ手衆乱入候時、臥起候而餘多打死候と聞得候、

「正文在島津左エ門久道」

「上文略」

一相良、沓岐守殿と同清兵衛かと公事御座候、様子者、清兵衛尉相良家中を我まかせニいたし、沓岐守殿をよせ付不申候、清兵衛尉親類又氣ニ入候もの共へハよき知行をくれ、沓岐守殿つかへれ候ものへハ悪所をくれなといたし候儀、沓岐守殿より御年寄衆へ被成披露、其穿鑿ニ而科可被仰付由相聞得候、ケ様之儀承ニ付、自然清兵衛尉参間敷なと申候而罷居候ハ、薩摩より人数共可相越儀も可有之候、其心得にて由断有ましく候、若人数於参者、新納加賀守ニ勝目助左衛門尉を相付、人数をつれ可参候、それニ喜入久右衛門尉・猿渡新介・弟子丸五右衛門尉・佐良羅善介と一兩人もかるき功之入候衆可相付候、其外鹿兒嶋□一人も若き衆入

ましく候、若参候ハ、其沙汰あり、曲事と可被申付候、若又此人数ニて難成仕合共候ハ、近邊之地頭衆あまた可被申付候事、

一右之人衆被参候儀、少も他言有ましく候、内々此意得いたし、注進次第可被申聞候也、謹言、

「寛永十七年」

六月十九日

光久御花押

鎌田治部少輔殿

下野守殿

彈正大弼殿

（本文書ハ「旧記雜錄後編六」一三八号文書ト同一文書ナルベシ）

530 「入来家臣入来院直治藏本」

態令申候、

一求摩相良殿家老清兵衛之「頼兄」女房之子犬童半兵衛と申人、

清兵衛之留守番被仕処ニ、一昨七日之未明ニ沓岐守殿之

御留守居衆方より取圍たるとも申候、内より切テ出候

とも申候、半兵衛息ハ一手にて切出候を討果、半兵衛

人数四百程にて楯籠之由候、清兵宿所ハ焼拂之由ニ候、

内々自江戸聞得申ハ兩説ニ而候、「摺ハカッ字不知」一ニハいにしへ奈須

しゐは山之口事再發候而、公儀「權業」相手之方より訴沼申、

清兵被召寄と申候、一ニハ清兵一類黨類驕候ニ付而可

致成敗と御披露候へハ、権現様已来御存之者之儀候

間、於江戸被遂御穿鑿而之上誅罰あるべき由被 仰出、

清兵を呼ニ参与申候キ、然処ニ清兵ハ去月廿二日早疾

肥後内左敷より出船候留守ニ起たる事ニ候、堺ニ誰も

無之ニ付而、「權左工門久益養子」長門守殿飯野へ今日被為越候、皿良善助

相付被参候、「權山忠重也 實入米院伯耆守重高三男」俄之儀にて候、供衆も無之候、先懸付而

御越候へ与申事御座候、功者之儀五人も三人も早速其

方より可被遣候、飯野之番手ニ被為越候伯州老御留守

之儀ニ候条、各被入御精候ハて、「重高孫石見守重頼 養母も 御若輩与申、 時年十二」衆ニ而候、

心遣存「候」間、其方御家老之内より一人被為見廻候而も

苦問敷候、其外物之差引をも可申功者早々可被遣候事、

一爰許山奉行兩人、我等へ之内證にて候趣ハ、御分國中

山之儀、別而當 御代ニ堅固ニ改候処ニ、入来ハ行司

二人分之知行を数年被下置候が、一人分ハ曾不相知候、

是を及御沙汰ニ者、所之地頭代之儀ハ不及申、御地頭

之御油断ニも可罷成候一大事ニ存候間、我等迄申入と

の儀ニ候条、當座ニ申候ハ初而承候、それハ如何様之

儀ニ候哉と尋申處ニ、何処も行司二人ツ、知行二石と

哉ら三石ツ、と哉ら被下候、一人分ハ一人にて持来候、

一人分多年有所不知候、餘々無正躰事ニ而候由、至吾

等被申候間、承たる分ハ笑止ニ存候、伯耆守留守之儀

候、「重高二男大膳忠榮養子」△我我方より△美作殿・長門殿へも可申候へと

も、立入候而迷惑ニ可被存候、先我等承届可申入候間、

其内御沙汰被為待候へ与申置候、地頭代之衆へ内談候

て、然々物を申わけ候人を近日被差越、様承度候、

一志岐小左衛門殿へ内々にて可被仰候、求摩急ニ不事濟

候者、上使大口・加久藤邊迄可有御下向か与存候、

於其儀ハ御馳走士衆可被相付候、小左殿御事も其内た

るべく候と、出合申候由可被仰候、以別書可申候へと

も、三日咳病氣ニ而、是さへ漸調申候、恐々謹言、
「島津」 弾正大弼

『寛永十七年
庚辰』七月九日辰刻

久慶（花押）

入来院左兵衛殿
〔重借〕

東郷吉兵衛殿

種子田久左衛門殿
御宿所

（本文書ハ「旧記雜録後編六」一四八号文書ト同一文書ナルベシ）

起候而餘多打死候と聞得候、
々々々々々

寛永十七年

人衆賦帳

七月九日

須木口一與

一人躰百人

一同百十人

一同七拾六人

一同百廿五人

一同四拾人

一同五拾人

合人躰五百式人

須木衆中

小林衆中

野尻衆中

高原衆中

高岡衆中

鹿兒嶋衆中

高四百四十
一主従十六人

高千三百八拾四石
一同五十六人

高八百石半役
一同四十二人

高千六十七石
一同十六人

高三百石
一同十二人

高七百十二石
一同廿八人

高六百五十五石
一同廿六人

高五百十五石
一同廿人

（ハリ紙）

「高八百石半役
一同十六人

「高六百卅石半役
一同十二人

「高千二百四十一石半役
一同廿五人

「高千六十七石
一同四十二人

「高五百七十三石
一同廿三人

「高五百石
一同廿人

「高式百貳石
一同八人

「高二百八十壹石
一同九人

村尾源左衛門殿

鎌田源左衛門殿

井上勘解由殿

諏訪李右衛門殿

田尻嘉兵衛殿

平田豊前守殿

東郷肥前守殿

川上彦左衛門殿

諏訪李右衛門尉殿

平田狩野介殿

顯娃娃主膳正殿

井上勘解由殿

鎌田盛次郎殿

北条甚四郎殿

丸田與右衛門殿

山口内藏助殿

高百六十三石 一同五人
 高百四十五石 一同六人
 高百廿九石 一同五人
 高百十五石 一同四人
 高百八十五石 一同七人
 高百三十一石 一同十三人
 高百二十二石 一同十二人
 高三百石 一同十二人
 高貳百四十九石 一主従十人
 高貳百六十五石 一同十人
 高九十八石 一同四人
 高九十壹石 一同四人
 高七十八石 一同三人
 高七十七石 一同三人
 高七十六石 一同三人
 高百廿九石 一主従五人
 高百三十六石 一同五人

大田筑前守右衛門殿
 津留新左衛門殿
 家村源左衛門殿
 高陽仲三郎殿
 尾上二左衛門殿
 江川弥左衛門殿
 市来五兵衛殿
 鎌田掃部助殿
 高城喜左衛門殿
 伊東肥前守殿
 伊地知平三郎殿
 山元利助殿
 山本長右衛門殿
 伊地知喜左衛門殿
 葛西茂右衛門殿
 宮里老岐守殿
 肥後次右衛門殿

高百九石 一同四人
 大口 うしほ口一与
 一人躰九拾人
 一同三拾五人
 一同七十五人
 一同廿人
 一同廿人
 一同三十人
 一同五人
 一同十人
 一同三十人
 一人躰十人
 一同十人
 一同十人
 一同七十人
 一同三十人
 一同十人
 一同四十五人

竹之内與七郎殿
 羽月衆中
 曾木衆中
 本城衆中
 鶴田衆中
 大村衆中
 阿久根衆中
 山崎衆中
 中郷衆中
 隈城衆中
 百次衆中
 山田衆中
 吉田衆中
 蒲生衆中
 帖佐衆中
 山田衆中
 鹿兒嶋衆中

合人躰五百人

高式千廿三石
一主從八十卷人

高五百廿四石
一同廿卷人

高式百五十石
一同十人

高四百五十石
一同拾八人

高八百式石
一同三十式人

高千七七石
一同四拾三人

高四百三十卷石
一同十七人

高五百六十四石
一同廿二人

高八百三十九石
一同卅三人

高三百卷石
一同十二人

高五百八十六石
一同貳拾三人

高五百三十四石
一同廿一人

(ハッ紙)

高千九百七十八石半役

一同卅九人

高二百四十三石

一同十人

中務少輔殿

伊勢美濃守殿

川上右京亮殿

大野内記殿

菱刈半右衛門殿

渋谷四郎左衛門殿

岩切六右衛門殿

平田監物殿

町田勘解由次官殿

伊地知治十郎殿

東郷喜右衛門殿

枕山権左衛門殿

高式百廿七石
一主從九人

高式百八十卷石
一同十一人

高式百三石
一同八人

高式百廿六石
一同九人

高式百卷石
一同八人

高二百四十式石
一同十人

高百八十八石
一同七人

高百六十七石
一同六人

高百石
一同四人

高百四十四石
一同六人

高九十一石
一主從四人

高九十四石
一同四人

高八十六石
一同三人

高八十五石
一同三人

高八十一石
一同三人

高八十一石
一同三人

高八十三石
一同三人

長谷場兵右衛門殿

敷根三右衛門殿

新納大藏助殿

城井三郎兵衛殿

肥後主膳正殿

徳尾藤左衛門殿

肥後与左衛門殿

平田少左衛門殿

勝目与左衛門殿

門司安右衛門殿

和田甚兵衛殿

和田主馬首殿

谷山九兵衛殿

鎌田宇兵衛殿

奈良原帯刀長殿

日高関右衛門殿

相良監助殿

鬼塚彌太右衛門殿

右近将監殿

土持左馬権頭殿

右式人、枕山・長谷場之間ニ消有、

大口之一与

一人躰二百三十人
 一同四十人
 一同十五人
 一同四十八人
 一同五十人
 一同三十人 五十人
 一同貳拾五人
 一同拾五人
 一同十人
 一同四拾五人

合五百人
 高千六百八十七石半役
 一主從三拾四人
 高四百五十石
 一主從拾六人
 高七百廿石九
 一同貳拾六人
 高四百五十石
 一同十八人
 高貳千六百五十石
 一同百六人

高千五百石
 一同六十人
 東市正殿。

大口衆中
 山野衆中
 湯尾衆中
 馬越衆中
 出水衆中
 高尾野衆中
 高城衆中
 阿多衆中
 高江衆中
 鹿兒嶋衆中

新納加賀守殿
 児玉四郎兵衛殿
 本田弥五郎殿
 比志嶋監物殿
 敷根筑前守殿

高三百四十三石
 一同拾人
 高四百六十四石
 一同十八人
 高四百三十一石
 一同拾七人
 高五百四十五石
 一同廿二人
 高四百十九石
 一同十六人
 高四百十石
 一同十六人
 高貳百廿九石
 一同九人
 高貳百石
 一同八人
 高二百六十五石
 一同拾人
 高二百七十三石
 一同十人
 高二百老石
 一同八人
 高二百四十三石
 一同拾人
 高二百五十五石
 一同十人
 高二百石
 一同八人
 高九十六石
 一同四人
 高九十三石
 一同四人
 高九十九石
 一同四人

土持左馬権頭殿
 國分帶刀長殿
 川上七郎次郎殿
 本田久左衛門殿
 川南清兵衛殿
 鹿嶋傳左衛門殿
 有馬仲兵衛殿
 後醍院喜兵衛殿
 花田作兵衛殿
 岩元清左衛門殿
 藤崎六郎右衛門殿
 野津安右衛門殿
 北条善左衛門殿
 有馬勘左衛門殿
 伊集院彦左衛門殿
 中嶋二郎助殿
 ○湯地
 △竹井惣左衛門殿
 □八木助右衛門殿

高九十四石
一同四人〇
高九十七石
一同四人〇
高八十八石
一同三人
高八十三石
一同三人
高八十石
一同三人
高七十七石
一同三人
高七十七石
一同三人
高七十七石
一同三人

加久藤口一与

一人躰百五人
一同三拾式人
一同三拾五人
一同廿五人
一同廿五人
一同三拾人
一同四拾人
一同廿五人
一同廿人

〇徳永源兵衛殿

八木戸左衛門殿
野村平左衛門殿
久留半五左衛門殿
日置吉兵衛殿
桑幡藤右衛門殿
伊勢弥市殿

加久藤衆中
吉田衆中
横川衆中
曾於郡衆中
大崎衆中
串良衆中
小根占衆中
指宿衆中
田布施衆中

郡山衆中

一同六十五人

末吉衆中

一同廿八人

水引衆中

「イ三十人」
一同拾五人

恒吉衆中

一同三十八人
高四百五石
一主従十六人

鹿兒嶋衆中
弟子丸五右衛門殿

合人躰五百人
高六百廿四石
一同廿五人
千二百七十一石半役
高八百四十六石

伊勢六郎左衛門殿

高五百七十七石
一同廿三人

町田駿河守殿

一同三拾五人

新納弥七郎殿

高八百四十六石
一同三拾四人

鎌田左京亮殿

高貳千二百廿石
一同八拾九人

喜入撰津守殿

高五百七十七石
一同廿三人

河田彦四郎殿

高六百廿五石
一同廿五人

蒲地新介殿

高四百七石
一同十六人

國分平吉殿
上井五郎左衛門殿

高四百五十五石
一同十八人
高二百廿七石
一同九人

伊地知十左衛門殿
大嶋長二郎殿

高二百九石
一同八人

清水監物殿

高二百十石
一同八人

税所小兵衛殿

高三百卅石
一主従九人

白濱文左衛門殿
町田五右衛門殿

高二百十九石
一同八人
高六百六十四石
一同六人

本田七右衛門殿
野村但馬守殿

高三百六十五石
一同十人

遠矢金兵衛殿

高八百八十四石
一同七人

四元六左衛門殿

高百八十三石
一同七人

鈴木喜左衛門殿

高百廿九石
一同五人

宮之原長介殿

高百廿石
一同五人

河野為右衛門殿

高百廿五石
一同五人

阿多源左衛門殿

高八十七石
一同三人

長谷場少右衛門殿

高八十五石
一同三人

伊地知大炊左衛門殿

高八十一石
一同三人

梶原主水正殿

高七拾五石
一同三人

川上彦三郎殿

高七十五石
一同三人

坂本与左衛門殿

(ハリ紙)

「高千六十五石

>>> 一同四十二人

>>> 高千二百七十一石半役

>>> 一同廿五人

>>> 高八百卅四石半役

>>> 一同十六人

>>> 高四千六百三十石半役

>>> 一主従九十二人

此間、鎌田・喜入

>>> 高一萬五百五十三石

>>> 一同四百廿一人

>>> 高千六百六石

>>> 一同六十四人

>>> 高五百十二石半役

>>> 一同十人

右通、史本ニ有リ、

>>> 諏訪神左衛門尉殿
>>> 新納弥七郎殿
>>> 市来掃部助殿
>>> 鎌田治部少輔殿
>>> 彈正大弼殿
>>> 根占七郎殿
>>> 相良彦七郎殿

加久藤口一組

一人 躰四拾人 馬関田衆中

一同六十人

吉松衆中

一同廿五人 福山衆中

一同十人

牛根衆中

一同廿三人 向之嶋衆中

一同五拾三人

谷山衆中

一同三十二人 川邊衆中

一同五十人

清敷衆中

一同三拾五人 伊集院衆中

一同四十人

市来衆中

一同十二人

鋪根衆中

一同四十五人

財部衆中

一同十人

百引衆中

一同二十五人

串木野衆中

一人駄四拾人

鹿兒嶋衆中

合五百人

本田伊与守殿

高六百九十八石

新納仲二郎殿

高九百卅七石

仁礼藏人殿

一主從廿八人

阿多勘解由殿

一同三拾七人

本田伊与守殿

高三百石

相良新右衛門殿

高千八百八十八石半役

野村右衛門佐殿

一同十二人

相良新右衛門殿

一同三拾五人

最上善次郎殿

高八百石

本田作左衛門殿

一主從三拾人

村上善次郎殿

高四百五十三石

猪俣為右衛門殿

高三百九拾六石

村田藤左衛門殿

一主從十八人

町田掃部介殿

一同拾人

田原主殿助殿

高三百七十七石

鮫嶋二郎左衛門殿

一同十五人

吐師孫兵衛殿

一同十五人

野村清左衛門殿

高二百石

市来平兵衛殿

一同十七人

野村清左衛門殿

一同八人

善慶坊

高百廿八石

安藤織部正殿

一同五人

貴嶋傳左衛門殿

一同五人

相良舍人佐殿

一同五人

川上撰津介殿

高百三十石

永谷采女正殿

一同四人

川上撰津介殿

一同五人

小野甚右衛門殿

高七十六石

川上撰津介殿

高七十二石

押川六左衛門殿

一同三人

川上撰津介殿

高七十五石
一同三人

山田慶兵衛殿

高七十壹石
一同三人

井尻左近兵衛殿

高七十七石
一同三人

岩切仲左衛門殿

高七十七石
一同三人

肥後久右衛門殿

高四千貳百六石半役
一同八拾四人

御主殿
川上因幡守殿

(ハリ紙)

高五百七十七石半役
一主從十一人

土持平左衛門尉殿

新納・本田式人

高
一同

越前守殿

阿多・仁禮・相良・野村四人

高三千八百四十七石半役

一同七十六人

伊勢兵部少殿

高七百六十五石半役

一同十五人

高崎伊豆守殿

高貳千〇百石半役

一同八十八人

渋谷伯耆守殿

高七千六百九十二石半役

一同百五十三人

北郷佐渡守殿

本田作左衛門云々、

加久藤口一与

一人躰百二拾人 飯野衆中

一人躰六十二人 栗野衆中

一同十四人 踊衆中

一同十人 日當山衆中

一同五拾人 國分衆中

一同七人 始良衆中

- | | | | |
|-----------|--------------------|---------|----------|
| 一同十二人 | 大始良衆中 | 一同十人 | 田代衆中 |
| 一同五人 | 佐多衆中 | 一同廿人 | 穎娃衆中 |
| 一同五人 | 知覽衆中 | 一同五十人 | 加世田衆中 |
| 一同四拾五人 | ^{庄内} 高城衆中 | 一同五十人 | 伊作衆中 |
| 一同四拾人 | 鹿兒嶋衆中 | 合人隼五百人 | |
| 高四千四百四十三石 | | 高八百五十卷石 | 伊東二右衛門殿 |
| 一主從百六拾五人 | 三原左衛門佐殿 | 一同三拾四人 | 村田藤兵衛殿 |
| 高七百七十六石 | 川上助六殿 | 高九百十三石 | 寺山四郎左衛門殿 |
| 一同三拾卷人 | 喜入久右衛門殿 | 一同三拾六人 | 町田久右衛門殿 |
| 高七百十五石 | 村田九郎左衛門殿 | 高二百一十石 | 川上上野介殿 |
| 一同廿九人 | 二階堂阿波守殿 | 一同八人 | 米良縫殿助殿 |
| 高六百二石 | 三原次郎左衛門殿 | 高三百七十四石 | 真蓮坊 |
| 一主從廿四人 | 相良満右衛門殿 | 一同十四人 | 大寺喜左衛門殿 |
| 高四百三石 | 伊十院左近殿 | 高八百三十五石 | |
| 一同十六人 | 別府長次郎殿 | 一同三拾三人 | 三原舎人佐殿 |
| 高七百廿石半役 | 肥後十右衛門殿 | 高三百三十石 | 川越三右衛門殿 |
| 一同十四人 | 有馬治右衛門殿 | 一同十四人 | 川崎次左衛門殿 |
| 高二百九十五石 | 有川弥蔵殿 | 高式百卷石 | 諸留千左衛門殿 |
| 一同十人 | 宅萬弥十郎殿 | 一主從八人 | |
| 高二百廿九石 | | 一同十人 | |
| 一同九人 | | 高九十七石 | |
| 高三百四十石 | | 一同四人 | |
| 高百八十石 | | 高三百二石 | |
| 一同七人 | | 一同十二人 | |
| 高九十石 | | 高三百四拾八石 | |
| 一同五人 | | 一同十四人 | |
| 高三百一十一石 | | 高八十七石 | |
| 一主從十二人 | | 一同三人 | |
| 高三百石 | | | |
| 一同十二人 | | | |

高百石
一同四人
高七十五石
一同三人
高七十八石
一同三人

川上五次右衛門殿

加治屋新左衛門殿

法元宇左衛門殿

高七十五石
一同三人
高七十五石
一同三人

青山権之介殿

西之原孫右衛門殿

(ハリ紙)
高三千百九十五石
一同百廿八人

町田出羽守殿

右、三原・米良之間ニ如此也、

此衆盛帳、寛永十七年七月九日と御座候を以考申候ニ、同年七月上旬ニ、求摩之相良、沓岐守殿御家来相良清兵衛と申人、江戸江被召寄候ニ付、犬童半兵衛と申人三百餘人之人数ニ而、清兵衛屋敷ニ引籠候を、沓岐守殿家老衆打果被申候ニ付、求摩中以外騒動為仕之由候、就夫御隣國故為御念境目最寄ニ手當被仰付候、出来為申帳ニ而ハ有御座間敷哉と被存候、

但此張紙蓋紙ニ押付有之、大場庄太左衛門殿本書ニ而田中清右衛門殿被寫置候本を以、天保二卯十二月廿日大雪降ニ寫之のせ候也、右之年間加久藤移地頭者伊地知空右衛門尉重政ニ而、第一御賦ニ可被入筈候得共、寛永十六年より同十八年まで相良権兵衛尉頼員与兩人、京・大坂御藏奉行とシテ相詰候ゆへ、加久藤口へ名前無之と被考候也、

寛永十七年

人衆賦帳

七月九日

532 「正文在文庫」

追而伊地知弥右衛門尉殿迄、去八日ニ爰元之様子御

注進申入候、各様へ直ニ可申入候へとも、手前取紛

申ニ付て、乍御六ツ敷御注進被成候て可被下之由申

入候、如何相居申候哉、無御心元奉頼候、以上、

被入御念御使札忝致拜見候、然者清兵衛江戸へ召登せ候

へとの御錠候由、老岐守申越候付て、去月廿日ニ爰許罷

立候、然所ニ清兵衛留主居之者又犬童半兵衛致同心全逆

心、種々氣任申ニ付て打はたし申候、もはや無殘所相濟

申候間可易御心候、各様被掛御心、御懇之御使之通老岐

守へ具ニ可申聞候、必老岐守より御禮可被申入候、猶老岐

使者へ口上ニ申達候条不能詳候、恐惶謹言、

菱刈美濃守

重信（花押）

米良三左衛門尉

「寛永十七年
辰」七月十一日

頼貞（花押）

三原左衛門佐様

鎌田治部少輔様

嶋津下野守様

嶋津彈正忠様

（重唐）
（政統）
（久應）
（久應）
貴報
（本文書へ「旧記雜錄後編六」一五二号文書下同）文書ナルベシ

533 「兄玉四郎兵衛家藏」

一 求摩相良清兵衛殿切腹ニ付、継子犬童伴兵衛殿被相果

候日記、

籠衆

犬童伴兵衛殿親子三人・同内膳正殿親子・同孫太郎殿

親子・田之浦仲五郎殿親子・犬童飛彈守殿・宮之原九

七郎殿・立山与左衛門殿・山伏四人・出家老入・犬童

源介殿・豊永五兵衛殿・同藏人殿親子・内之者式拾人

餘・女五拾式人欵、

右之衆、相良清兵衛殿宿を取構相果候、

寄手之衆戦死

犬童土佐守殿・田代左太夫殿・米良三右衛門殿・子息
米良茂兵衛殿・右同^(符カ)長門守殿・加賀平八殿・東次郎
兵衛殿・長門守殿内衆拾人

手負衆

菱刈清介殿・犬童仲右衛門殿・同勘兵衛殿・川邊早左
衛門殿・山本源介殿・出田助十郎殿・犬童軍十郎殿・
犬童孫四郎殿・窪山無右衛門殿・馬場園賀兵衛殿・金
林房

右之外ニも下ニ少ク有之由申候、

江戸より今月五日ニ使ニ被罷下候人

犬童外記殿・深美早左衛門殿

右兩人之内、外記殿事ハ半兵衛殿所ニよひ寄候て搦、
則打果、後之川へ入候由候、

合百式拾老人

内死人百拾人

手負拾老人

辰七月十二日

一松平石見守殿家中二成口事御座候而切腹人数、七月廿
五日ニ切腹、

沓岐伊織 菅友泊 小川四郎右衛門 牛尾四

郎左衛門 山脇久左衛門 鈴木平右衛門 杉

谷多左衛門 丸山仲兵衛 田邊三郎右衛門

石丸六左衛門 小川二郎兵衛 小寺八郎左衛門

別所六左衛門 大原久左衛門

切腹之奉行ニ天下より長井監物殿御出候由候、惣別

ニ百人程死人御座候由ニ而候、

一生駒沓岐守殿右同口事切腹衆

石崎若狹守 前野次太夫 生駒左門 生駒帯

刀長 生駒河内 立野四郎左衛門 多賀源介

森出雲

生駒殿ハ知行一萬石ニ而、出羽ニ申遣候大炊殿御預ニ
而候、松平石見守殿沓萬石ニ而松平相模守殿へ御預被
成候、右両家中口事ニて悉切腹ニて候、妻子等迄、此

外之切腹衆多御座候由、

一隈へ御座候衆 二神半兵衛殿 野瀬小十郎殿

一隠岐國仕置衆 小出大隅守殿 蒔田数馬介殿

新庄右近殿 下嶋市兵へ殿

一相良殿口事之事未知不申由候、右両家中理非共ニ切腹之由候、

七月廿七日之日付ニ而参候、

534 諸家大概云、相良源五左衛門養祖父相良清兵衛者、求麻

相良殿家老ニ而候処ニ、家中より清兵衛を疏し、家中さ

たち申候故、公義へ被聞召上、清兵衛父子御預ニ被罷成

候時、清兵衛子内蔵助其子内蔵允ニ而候、内蔵介内室者

中務家久息女ニ而候、右之由緒故、御家ニ御抱被成候而、

高式千石拜領候、是より先ニ内蔵介ハ京都ニて死去之由

候、清兵衛父ハ犬童美作入道休意と為申出之由候、

同年九月十一日御奉書有之、富岡在番之儀、細川越中守様へ被仰付候也、

536 「北郷久加世別記」

一寛永十八年十月五日、國老御尋之砌、以書物申出置之、

535 「天草覚書」

一寛永十八年より御代官鈴木三郎九郎様御支配ニ罷成候、

(表紙)

十八年辛巳九月二十八日

辛丑至明曆三年丁酉

十一月七日己巳

寛永軍徴

卷之二十
餘響の巻

稿

合式拾巻冊

537 『在雜抄』

差出

都合人数五千七百三十拾巻人者

内 人躰二千六百拾九人

寛永軍徴卷之二十此末にハ寛永後の事もまじれど、皆その餘響にて、輔翼する事ども多けれハ、附おきぬ、

雜兵三千百拾式人

右者、寛永十五年正月晦日迄ニ、天草迄ニ罷渡候人
数如此候、已上、

寛永十八年九月廿八日

山田民部少輔(有榮)

新納加賀守(忠清)

入来院石見守(重周)

北郷佐渡守(久加)

喜入摂津守(忠政)

豊前守(島津久寛)

538 一寛永十八年巳二月十二日、加久藤嚙谷口次郎左衛門尉・

伊地知弥右衛門より地頭伊地知李右衛門主従卅二人有

馬陣立差出、屯通、

一右同加久藤衆中人躰・被官・夫丸九拾五人同断差出、

屯通、

一右同検地寺領衆自力立一向宗寺領衆自力立差出、屯通、

右三通ハ、同十五年正月十六日に載置ゆへ略之、

差出

都合人数五千七百三拾老人者

内人駄二千六百拾九人

雜兵三千百拾式人

右者、寛永十五年正月朔日迄ニ天草へ罷渡候人数如此

候、以上、

寛永十八年九月廿八日

山田民部少輔(有榮)

新納加賀守(忠清)

入来院石見守(重國)

北郷佐渡守(久加)

喜入摂津守(忠政)

豊前守(島津久賀)

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」二二二号文書ト同一文書ナルベシ)

覺

一有馬・天草のぎりしたん一起仕ニ付、若御人数可入儀

茂可有御座候、内場よりハ程遠候間、先以肥後境迄罷

出、御下知をも可承合之由被仰付、新納加賀守殿・平

田狩野介殿・仁禮左近將監殿・澁谷四郎左衛門殿人数

三百にて、丑ノ十一月十五日ニ獅子島江罷渡候事、

一境目之人数如内場可引取由御下知にて、新納加賀守殿・

澁谷四郎左衛門殿・仁禮左近將監殿・平田狩野介殿、

同十二月四日ニ獅子島より帰宅候事、

一板倉内膳殿・石ヶ谷十藏殿へ御使被仰付、諫早可参覺

語にて、十二月四日獅子島出船仕、松橋へ参候処、如

有馬御兩所御越之由承、其より如三角船を乗申、於彼

地松平甚三郎殿・林丹波守殿・牧野傳藏殿へ懸御目、

有馬へ罷渡、内膳殿・十藏殿江御意趣申入、御返事相

濟候得者、則如船本罷帰候、十二月十日有馬之城江御

取懸候事、

一其後有馬江御人数可被差渡由候哉、御觸共御座候得共、

其儀相替天草へ薩摩之御人数御番手之由候て、寅ノ正

月十四日豊前守殿・喜入摂津守殿・北郷佐渡守殿・入

来院伯耆守殿、其外鹿兒嶋衆歴々天草へ罷渡候事、

一我等事松平伊豆守殿・戸田左門殿へ御使被仰付、正月

十七日天草之内久玉出船仕、有馬へ罷渡相詰候、其時

分者野州老・三原左衛門佐殿被成在番候事、

一薩州様有馬江被成 御着、御上使へ御見廻、則御出船

にて 御帰國候、野州老御供之故、我等相詰申候事、

一有馬之城二月廿八日落去仕候、薩摩衆於城中被致粉骨

候、我等儀、伊豆守殿より御暇被下、三月八日有馬出

船仕帰宅申候事、

巳九月廿八日

山田民部少輔(有榮)(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」二二三号文書ト同一文書ナルベシ)

541

『此帳、平田民部宗直御船奉行ニテ、彼家ニ傳來アリシヲ、子孫平右エ門貞陣老号直道ノマタ御船奉行セラシ時、後年御見合ニモ成ナント、

合セテ九冊御船手ニ差出オカレ候テ、平瀬武方ノ竊ニ抜写セラレシ本

ニテ、此ニ載セオク也』

使者船取仕立入目

長崎 肥前 肥後
天草 嶋原

御船手

「右帳ノ外題也」

嶋原天草一上下船取仕立入目

一銀貳拾四匁

三枚帆耆艘

一但耆人ニ六匁ツ、水手四人ノ賃銀

一銀三拾六匁

三枚帆耆艘

但耆人ニ六匁ツ、水手六人ちん

外耆人耆日ニ赤米七合五夕ツ、飯米相渡候へ共、往

来之應日数相渡儀候故、員数難究候、

外數十行同案故畧、

御船手

野村三右衛門

巳六月廿四日

蒲生庄左衛門

村田与左衛門

542

「續長崎鑑」

一阿蘭人平戸より長崎江御移シ被成候儀者、寛永十八年

巳ノ年也、其砌より出嶋江被召置候、御奉行山崎権八

様・馬場三郎左衛門様御代也、當貞享四年迄四拾七年

ニ成也、

一出嶋築出申候者、寛永十三年子年御奉行榊原飛驒守様・

馬場三郎左衛門様御代ニテ候、

先年有馬・天草江軍衆被罷立候、其刻御賦銀不被給衆、鹿兒嶋・諸外城衆皆同ニ御侘被申上候、就夫其刻より我々至四人御侘言被申上候、前ニ御陳立之時分御賦可給由、諸外城江茂被仰觸候哉、殊ニ有馬表へ被罷立候衆之内ニ、御賦銀給之衆茂有之事ニ候間、其并ニ被仰付可被下由度々被申候付而、於江戸御老中御談合之上、出物方ニ御指引可被下之由被仰出候、其段當所衆外城衆被承置候由被申候、然處ニ未其首尾無之候付而、弥此節可被下由達而被申上候、於江戸以差引可被給之旨、御使御両所被成候間、此刻是非共御申達尤ニ候、最早数年不被下故相應ニ候、手前不續之由候、萬々以御校量御申調可目出候、已上、

壬午正月廿三日

渋谷伯耆守(重國)

北郷佐渡守(久加)

喜入撰津守(忠致)

豊後守(島津久賀)

野村大学殿(元綱)

仁禮(頼充)主計殿

右、寛永十九年壬午正月廿三日之事与相見得候、写置之、

544

『寛永十九年七月十六日、嶋原之明地百姓五三人も出候而、田地不明郷村様被仰付候由御奉書有之由、依之如本文移百姓為被仰付と見得申候、此本書へ御給手ニ有之由候』

天草江移百姓人数并馬道具帳

「右帳ノ外題」

日州深歳村之

相良舍人殿
猿渡喜之介殿

九郎左衛門尉

一男女四人

一馬老疋

一鋤老丁 一まんか老ッ

一なた老丁 一よき老丁

一老束 一桶大小三ッ

一子式儀

一右同人噺

一男女五人

八代南俣村ノ

善右衛門

一馬式疋

外諸道具数行畧

大田丹後守殿
宇都長兵衛殿

一馬式疋

外諸道具数行畧

右同人嘜
一男女四人

一馬式疋

外同断

右同人嘜
一男女五人

一馬式疋

外同断

右同人嘜
一男女四人

一馬式疋

外同断

右同人嘜
一男女四人

小根占瀬戸下之

三郎五郎

小根占(符之)占西元之

甚四郎

小根占山之

弥右衛門

小根占川南村之

藤作

小根占川南村之

与作

一馬式疋

外同断

右同人嘜
一男女四人

一馬式疋

外同断 此者農具・家具・布はた・木綿ばた・
鍋釜・雑壺類數十行有之、

平田主殿助殿嘜
一男女七人

一馬式疋

外同断

平田主殿助殿嘜
一男女五人

一馬式疋

外同断

右同人嘜
一男女五人

一馬式疋

外同断

新城御懐
一男女七人

一駒馬式疋

上之原之

三郎五郎

串良細山田村之

宗兵衛

大根占

源十郎

大根占之内神之河之

大藏介

鹿屋中之村之内
馬庭やしき名頭

孫左衛門

外同断

嶋津玄蕃頭殿
一男女九人

一駒馬三疋

外同断

右同
一男女五人

一駒馬三疋

外同断

此者諸道具多し

嶋津兵庫頭殿
一男女五人

一駒耆疋

外同断

右同
一男女四人

一駒耆疋

外同断

北郷式部殿
一男女五人

一馬貳疋

外同断

中俣村之内駿河野門
名頭

六右衛門

海瀉村之内川畑門
名頭

七郎左衛門

加治木竹子村之内馬場門之
名頭

甚右衛門

加治木段土村之内
吉原門之名頭

甚右衛門

庄内高木村清水門之

孫兵衛尉

右同人
一男女七人

一馬貳疋

外同断

一男女九人

一馬貳疋

外同断

大迫喜兵衛殿
一男女四人

一馬耆疋

外同断

真連坊

田上利兵衛殿
一男女六人

一馬耆疋

外同断

右同人
一男女五人

種子嶋左近太夫殿
一男女五人

一馬耆疋

右同人
一男女七人

一馬耆疋

庄内木の前村
久右衛門

對馬允

牛根之内境村之

源兵衛尉

志ふしの

源四郎

志ふしの

四郎兵衛

嶋岡村嶺之門

八郎五郎

中村之内前日之門

与三左衛門

右同人喫 一馬壹疋 西村之内中脇ノ門
外同断 弥次右衛門

種子嶋左近太夫殿 西村中脇ノ門ノ内
一男女四人 一馬壹疋 外同断 次郎迫

宇都長兵衛殿 佐多之内邊塚村之
大田丹波守殿 一馬壹疋 外同断 李右衛門
一男女四人

右同人喫 佐多之内郡村川口やしき
一男女四人 一馬壹疋 外同断 六左衛門

真連坊 かのや下間坂本屋敷之
田上利兵衛殿 一馬壹疋 外同断 四郎兵衛
一男女六人

右同人喫 柏原之内川東濱方ノ
一男女五人 一馬壹疋 外同断 善左衛門

寛永拾九年十二月三日
相良(願員)権兵衛(印)
嶋津中務少輔(久茂)(印)

545の1 【御役元基組頭之下注】

一 寛永十九年壬午十二月、初而御城下土を十組に被相分、

一番組・二番組と次第ニ相唱、毎組ニ組頭二人被仰付候、一番組頭者嶋津安藝久雄・新納四郎久辰、二番組

頭者嶋津市正忠弘・佐多又四郎久孝、三番組頭者桂又十郎忠心・吉利下総忠張、四番組頭者嶋津左近久守・

樺山又九郎久尚、五番與頭者町田出羽忠尚・種子嶋左

近忠時、六番與頭者伊集院源助久立・嶋津美作久基、

七番組頭者伊集院右衛門久國・川上上野運久、八番組

頭者祢寝七郎重永・川上將監久將、九番組頭者鎌田又

七郎政由・入来院伯耆重高、十番與頭者伊勢兵部貞昭・

嶋津中務久茂ニ而候、別ニ御家老組之一与被相建、御

家老嶋津弾正久慶・嶋津圖書久通を與頭ニ被仰付、与

下之士者右十與ニ相替候儀無御座候(此外寺社家組・諸役座組と申を、十六組被相

分、合而式拾六組被置候由也、

(本文書ハ「旧記雜錄後編六〇二八九号文書ト同一文書ナルベシ)

與頭衆江被仰出條々

一 與中江野心不忠者可有之時者、早々可被致言上候、若

與頭由断ニ而於不申上者、與頭并談合衆同意之心底た

るへき事、

一 與中江喧嘩口事出合候者、早速寄合致談合可相濟事、

一 御奉公方之儀、談合ニ而與頭より可申付事、付出物首

尾之事、

545の2

545の3

一作病其外御奉公方ニ難波申、氣任之輩於有之者、以談合致言上、曲事ニ可被申付事、

一与中江鬼利志端宗并一向宗於有之者、致糺明言上可申事、

一与中於緩者、與頭・談合衆越度たるへく候事、

一訴詔其外申分之儀、與頭江尋不申候而、氣任公義江雖為申出、請付有間敷候間、可有其心得候事、

以上

寛永十九年十二月十三日

(本文書へ、「旧記雜錄後編」六二九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

與之衆江被仰出條々

一一與之衆、與頭之下知を背間敷事、

一從與頭可被申付儀可有之時、氣任之輩於有之者、曲事

ニ可被仰付事、

一御出陣、或者在江戸、或者狩等之儀可被仰付時、吳儀

申間敷事、付出物首尾之事、

一喧嘩口論口事等出合候はん時、與頭へ可申入、遅々い

たし間敷事、

一訴詔其外申分之儀、与頭江尋候而 公儀江可申出事、
寛永十九年十二月十三日

右通ニ而与頭より被申渡儀共致取次候之、小組頭とシテ被立置候、

(本文書へ、「旧記雜錄後編」六二九一号文書ト同一文書ナルベシ)

546 「兒玉四郎兵衛利政家藏」

急度令申候、

一今度江戸御奉行所より以御奉書被仰渡候様子ハ、於奥

州筋きりしたん宗門之族数多被搦捕候、強御穿撃之儀

ニ候間、きりしたん宗之同類共逃散事共候はん、諸

國在々所々可入念之旨被仰出候間、御分國中在々所々

江自然不審成者共於有之者、早々可被申出候、若行衛

もなき旅人共罷通候ハ、一刻も宿をかすましく候、

勿論其所中早速可被追出候、萬一緩之儀共有之候而、

脇よりきりしたん宗旨之者相知候ハ、其所之噯衆并

五人組へ稠可及御沙汰候事、付先年ころひきりしたん

心中ニハ宗旨を不替、于今隠くきりしたんの作法仕

ものも可有之候間、其所中より横見を被申付可被聞立

候、其外不審成者入念承たて可有披露事、

一於諸國在る所々新錢鑄事御法度ニ候、若相隠し鑄出輩

あらハ可申出候、縦雖為同類、其科をゆるし御褒美可

被下候、自然訴人於有之者、本人ハ不及申、五人組を

も可行同罪ニ、其所之もの迄可為曲事由、右同前ニ以

御奉書被仰出候条、御分國中ニ而も新錢鑄者於有之者、

見立聞立早速可被致披露候、天下御置目のことく賞罪

之御沙汰たるへき事、

一此中金山へ罷居候他國之者、自然當國諸外城田舎へ隠

居事も候半間、念を入、其所中可被追出事、付他國之

行脚徘徊人之類召置間敷候、右之旨聊緩有間布候、恐

(寛永)

廿年三月朔日

(山田有榮)
民部少

(頭桂久政)
左馬頭

(島津久元)
下野守

地頭

噯衆

(本文書へ「旧記雜錄後編六」三〇二号文書ト同一文書ナルベシ)

547 高七千六百九拾弍石三人軍役之事

一道具之者弓 鐵炮 鑓 六拾六人内六人ハ手廻

一馬しるし持但吹ぬき 沓人

一小さし持 沓人

一かふと持 沓人

一しやうり取 沓人

一馬取 四人

一かちの者 三拾人道具可持候

一夫丸 弍十弍人

一乗馬十五騎 百五人但老騎ニ付 主從七人宛

何かし 何かし 何かし

乗馬十五人 名 名字有

合人数弍百三拾老人

一船大小 五艘ハ自船

右、今度被仰出候軍役、我等知行之高之分如右賦ニ

548 『加久藤噺案文萬留』

而候間、御出陣之刻不相關可動軍役候、依様子過上可仕者也、

寛永廿年

七月廿日

北郷(久加)佐渡守

急度申越候、

- 一 江戸御年寄衆為御意、從嶋津圖書頭殿・新納右衛門佐殿被仰下候様子者、頃も吳國船見得候由、方々より江戸江申来候、浦濱相拘候衆者、弥以無油断可入念候、萬事之儀者執念深き者ニ而候間、如何様之致才覚、ばてれんなんと陸へおろし可置候間、以其旨堅番を可付之由為被 仰出由候、別而念を入可被申付事、
- 一 去夏筑前之内大嶋へ参候南蛮人搦捕、江戸へ被差上候、其白状之書物被召下候間相廻候、寫置、右之心得を以念を入可被申付事、
- 一 右之書物ニ、日本ばてれん来年可相渡由候、南蛮人之なりをいたし候へ、紛有間敷候、自然日本之商買人之

躰にて、日本舟ニ乗候而参候欵、又唐人之なりにて参候欵、何とそやつれ候へ、可難相知候、能く被入念尤候、去年福嶋表へ吳國舟参候處、所之役人緩故、船を懸出候、就其役人衆仕合惡由候、一大事之儀ニ候、自然船より海邊遠き所へ忍居、山などに隠候事も可在之候之間、萬事被入念可為肝要候、しゆんれいはかせ行脚往来題目他國之のき衆、其外不審成もの、境目より内場江曾以被通間敷候、恐々謹言、

『寛永二十年』
山田有榮
山民部少輔御印判
(頭姓久政)

十一月七日

額左馬頭

北郷(久加)佐渡守

川上(久國)因幡守御印判

溝邊 横川 栗野 吉松 吉田

馬関田 加久藤 飯野 須木 小林 高原 野尻

綾 高岡 穆佐 倉岡

噺衆中

伴天連の申分の書物別帑可写置候、「此別帑へ左ノ同案ナラン」

(本文書へ「旧記雜録後編六」三三五号文書ト同一文書ナルベシ)

【鎌田政昭日記】

今度筑前國大嶋ニ而捕候南蛮伴天連・「同人満イ」いるまん・同宿
白状之覚

一 いたりやの國「ちうイ」らうまと云所に、きりしたん宗門之頭ば
つばといふものあり、國々へ伴天連をつかハし、宗門
をひろめ、其國ばつばにしたがひ候へハ、漸くニ奉
行をつかハし、仕置いたし候、のひすかん「はんや」といふ・ごわ・呂
宋、其外國おほくむさふり取申候、日本「とく」といふ之いくさにて
ハ猶「ハイ」成かたき候ゆへ、後生之ために宗門を廣るとて、
伴天連をわたす、宗門大形ひろまりたる時分ハなかま
にて軍をいたし、日本の他宗を討たいらけて、ばつば
にしたケゑんと「むイ」のたくミにて候事、

一 鬼利死「鬼利死且」宗門にこんはにやと申候派・さん「イナシ」ふらんし
きりしたん「年来日本ハ多渡シカ」宗門派ノへ申つかハし、ばつ
すこと申派の伴天連共、門派ノへ申つかハし、ばつ
ば前にて日本國をうはひ公事をいたし候處ヲ、ばつば
批判には、日本六十六ヶ國を武ツにわけ、あふ坂より
東はさん「イナシ」ふらんしすこ、西ハこんはにや法をひろむべ
し、日本ばつばにしたかひ候ハ、右之通連乱有まし

「候一」
き由申渡候と、吳國にて専此沙汰仕事、

一 伴天連を日本へ渡候事数年、此入目門派ノに帳を付
置候、數百年過ても日本ばつばにしたかふとき、右之
入目、面々の派のたん「擅那」なより取申へきための儀ニ候、
世界之有内者伴天連を渡し、宗門をひろめ申覚悟ニ而
候事、
申

一 呂宋「江イ」に日本人の伴天連四人有之候、老人ハ豊前國加賀
山隼人親類なり、隼人ハ先年火罪にあひ候、右之親類
の伴天連日本へ渡し可申との儀ニ候、一人ハ黒川寿庵
と申候、来年日本へ渡し可申由、呂宋にて我等共ニ物
かたり仕候、南蛮伴天連れいもんど申ものも来年わ
たるべき由、是も我々「等共」ハなし申候、其外日本人の子
「五六人ろそんニ只今学文教させ申候、天川ニ而も日本人之子を」
。十二人学文をいたさせ、何れも伴天連ニ取立、日本
江渡し可申ためのよし候承候、伴天連おほく方々の國
「イナシ」にて仕立置申候、此者共連々日本へ渡し可申由、専取
沙汰仕候事、

一 先年日本にてきりしたん宗門ひろまり候、日本「申時分ニ」の出家
に金銀を出し、きりしたんの宗門いたし、其外日本の

550

「正文在川邊土中條市兵衛」

いるまん・同宿之諸寺諸山へつかハシ、学文「を」いたさせ、
佛法・神道之極「意」をならいとり、ばつば方へつかハシ、
南蛮口「板イ」に引なをし、はんにおこし、國との伴天連共に
つかハシ、学文をいたさせ申候、いつれの道にも日本
ニ法をひろめ、したかゑんと「むイ」のたくみニ而候事、
以上

「寛永廿年」未九月八日

(本文書へ「旧記雜録後編六〇三三〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

天草へ罷立候人数指出留 川邊

一主従百六人内夫九廿八人

右者、寛永十五年正月拾日ニ打立申候、

内主従卅四人者二月拾九日ニ三ヶ一被召婦ニ付、同廿

二日ニ在所江婦宅申候、一人ニ付日数四十三日ツ、

残而
一主従七拾二人者

内主従三人ハ二月廿八日在江戸被仰付ニ付、二月廿八

日御奉行衆へ御暇申上、二月廿八日之晚上津浦を出

551の1

「蒲生有馬氏藏本」

舟申、三月二日ニ在所へ参着申候、一人ニ付日数五
十□日ツ、

残而
一主従六拾九人者

三月十四日ニ御開陳ニ付、上津浦出船申、同十七日

ニ在所江参着申候、一人ニ付日数六十七日宛、

右者、任御廻文差出仕、進上申候、以上、

已ノ
十月廿一日

中條市兵衛

黒田三左衛門尉殿

土持左馬権頭殿

差出

一人躰百四拾人

蒲生衆中

一悴者百廿五人

合人数百六拾五人ハ

四口
「關文アリ」

合人躰百四十一人

内耆人ハ市来ハ左衛門殿与力とシテ、貴嶋小左衛

門殿寅ノ正月廿三日ニ出水米ノ津へ上着ニて候、

四口
合下人百廿七人

内二人ハ貴嶋小左衛門殿下人

メ真米十一石四斗九升五合

十一石九斗八升五合
メ赤米十式石七升五合

真米三石八升者

右者、市来八左衛門殿嶋原へ御番手ニ御渡ニ付、式番

立被仰付、人躰廿二人寅ノ二月十六日ニ蒲生打立、同

十七日ニ出水米之津ニ参着申候て、同廿日ニ米ノ津出

船ニて、同廿一日ニ嶋原へ着船申候、三月七日ニ御陣

拂ニ付、上津浦へ参、同十四日ニ上津浦罷立、同十七

日ニ蒲生へ罷帰候、但日数廿八日分之飯米、出水平松

御蔵・嶋原ニて新納佐左衛門尉殿より受取申候、外二

日分飯米取不足

「キレナシ」

一赤(米カ)

右、下人廿三人日数右同飯米、外二日分飯米取不足

ニて候、

一真米八石五斗

右、同御番手ニ付人躰六十八人、刁ノ二月十九日ニ

蒲生を打立、同廿日ニ出水米之津へ参着候而、同廿

一日ニ米之津出船申、同廿二日ニ嶋原へ参着申候て、

三月七日ニ御陣拂ニ付、上津浦へ参、同十四日ニ上

津浦罷立、同十七日ニかもふへ罷帰候、但日数廿五

日之飯米とシテ、出水平松御蔵・嶋原ニて新納佐左

衛門尉殿より受取申候、外二日分飯米取不足也、

一赤米四石八斗七升五合

右、同下人卅九人、右同日数飯米、外ニ二日分飯米

取不足也、

メ人躰三百三十人

内百四十人 式番立

壹人ハ市来八左衛門尉殿与力貴嶋小左衛門尉

九十人 式番立

メ下人百八十九人

内百廿五人ハ壹番立衆下人

式人ハ市来八左衛門殿与力貴嶋小左衛門尉下人

六十人 式番立衆下人

551の2

合真米廿三石七升五合

合赤米廿石八升

右者、嶋原立軍衆飯米さん用帳可差出由候、其時分米請取拂之證文、市来八左衛門尉殿御手前ニ有之候へ共、火事ニ被為相候刻焼捨候而無之由候、軍衆之儀者無別儀候間、極如此候、以上、

申正月廿日 主取 松下源五左衛門尉

極所

御奉行衆中

右者、嶋原立軍衆へ御賦銀被下之由、申ノ正月十七日ニ吉田二郎兵衛尉殿・黒田三左衛門殿・土持左馬権頭殿より被仰越^(候カ)手本之様ニ相極候、併其刻米之請取拂諸證文、市来八左衛門尉殿御手前ニ有之候而、焼捨候而于今無之候、就其功者衆三日被相揃、詰日数軍衆員数吟味ニて算用如斯ニ相極候、但鹿兒嶋江之使帖佐濱右衛門殿にて候事、

極衆 赤塚源多左衛門尉

寛永貳拾壹年正月廿一日

花牟禮傳右衛門尉

池田源左衛門尉

福岡新兵衛尉

桑幡六右衛門尉

黒木甚左衛門尉

松下源七左衛門尉

谷口助右衛門

谷山民部左衛門尉

552 【草案在阿久根】

差出

一真米廿七石八斗四升貳合先かき 阿久根御蔵方より受

取申候、

一同貳石六斗先かき 天草ニ而受取申候、

合三十石四斗四升貳合

内拾石九斗五升九合

阿久根御蔵方下代衆田上九郎兵衛殿・小幡主膳

正殿返上申候、

残テ

真米十九石四斗八升三合先かき 請取方

右拂方

真米拾六石六斗三升五合

右者、人躰八拾九人、日数三千三百廿七日、獅子嶋・

有馬・天草方と相詰申候日数、老日一人ニ付五合飯

米、

一同式石九升

右者、小者夫丸十六人にて、日数四百十八日、飯米

老人ニ付一日ニ五合ツ、

一真米四斗六升

右者、大石小監物主従式人、獅子嶋・有馬江相詰被

申候日数九拾二日之飯米、彼監物遠嶋仕候故、前日

数差出帳ニ書載不申候、

一真米三斗

右者、丑ノ霜月有馬・肥後表・獅子嶋、渋谷四郎左

衛門尉御使ニ被參候ニ付、勝目郷左衛門尉与力仕參

候、主従三人にて日数六十日飯米、

真米十九石四斗八升五合

右者、阿久根衆中有馬立ニ付御奉公申候、前帳相調、

寛永十八年十月帳相納申候、以上、

申正月廿四日

右、寛永廿一年申草案帳ニ在之と也、

兩人

553 【見于雜抄】

天草立軍衆覺

一人數拾萬四千四百廿五人

内九千四拾九人ハ 人躰

九万五千三百七十六人ハ披官并夫

一人數拾五萬六千八十三人ハ

内拾老萬貳千七百六十六人ハ 人躰

四萬三千三百十七人ハ 被官并夫

惣合人數貳拾六万五百八人

内拾貳万四千四百廿五人ハ 人躰

拾三万九千八十三人ハ 被官并夫

鹿兒嶋衆

外城衆

人躰

被官并夫

554の1

右者、天草立軍衆被相詰候以日員、一日之賦ニシテ
如斯ニ候、已上、

寛永廿一年

申二月三日

黒田三左衛門尉
土持左馬権頭

一嶋原天草軍衆人数究帳御文庫ニ在之由、他日世に洩出候はん時、
寫のすべし、

『鎌田政昭日記』

有馬・天草兩陣軍衆人数究一紙

鹿兒嶋衆

一人數十六万式千百六十六人

内卷萬式千七百五十四人ハ

人躰

十四万九千四百十式人ハ

披官并夫

外城衆
一人數廿六万七千式百九十六人

内十八万八百三十五人ハ

人躰

八万五千四百六十卷人ハ

披官并夫

出水・阿久根・高尾野衆
一人數卷万五千九百六十五人

内卷萬千五百九十九人ハ

人躰

四千三百六十六人ハ

内之者并夫

右三ヶ所衆、師子嶋・長嶋ニ寛永十四年十一月より
同十五年二月迄番手衆、

出水・長嶋衆
一人數三千五百八拾式人ハ

人躰

右者、長嶋浦中はり番ニ而候へ共、長嶋地下衆之故、
自飯米之由候、

惣合人数四拾四万九千九人

内廿万九千七百七人ハ

人躰

廿三万九千二百三十九人ハ披官并夫

外ニ
一人數式萬五千式百拾七人ハ

右者、前之賦方被給候衆也、

都合人数四拾七万四千式百廿六人

一銀子四貫四百五十五匁

卷人ニ付卷ヶ月ニ五匁三分ツ、但京都三ヶ一之賦

利銀拾貫式百八十三匁三分五リ

右者、寛永十四年十二月より慶喜二年二月迄月數七

十七ヶ月、(題) 壬月籠、但卷ヶ月ニ百目ニ式分ツ、之利、

本利
合十四貫七百三拾八匁三分五厘卷毛

右者、有馬・天草立軍衆并長嶋・師子嶋番手衆、寛永

十四年之十一月より同十五年三月迄被相詰候以日数、
一日之賦ニシテ究如此候、

寛永廿一年二月五日

『全』

鹿兒嶋衆 覺

合人数五万七千七百四十壹人

内三千七百五人ハ

人躰

外城衆 五万四千三十六人ハ

小者夫

合人数拾壹万千貳百拾三人

内六万九千六十九人ハ

人躰

獅子嶋・長嶋はり番外城衆

四万貳千四百四十四人ハ

小者夫

合人数壹万五千九百六十五人

内壹万五千五百九十九人ハ

人躰

長嶋・西目・大瀧・小瀧はり番地下之故自飯米衆

四千三百六十六人ハ

小者夫

合人数三千五百八十八人

惣合拾八万八千五百壹人

内八万七千九百五十五人ハ

人躰

拾万五百四拾六人ハ

内衆

右者、有馬立軍衆被相詰候日数を以、一日之賦ニシ
テ如此候、

寛永廿一年二月五日

吉田次郎兵衛

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三七四号文書ト同一文書ナルベシ)

覺

かこしま衆

合人数五萬七千七百四拾壹人

内三千七百五人ハ

人躰

外城衆 五万四千三拾六人ハ

小者夫

合人数拾壹万二千二百拾壹人

三

内六万九千六拾九人ハ

人躰

獅子嶋・長嶋はり番外城衆

四万二千四百四拾四人ハ

小者夫

内一万五千五百九十九人ハ

人躰

長嶋・西目・大瀧・小瀧はり番地下之故自飯米衆

四千三百六十六人ハ

合人数三千五百八拾二人

小者夫

惣合拾八万八千五百壹人

内八万七千九百五十五人ハ
内拾万五百四拾六人ハ

人躰
内衆
小者夫

右者、有馬立軍衆被相詰候日数を以、一日之賦ニシテ

如斯ニ候、

寛永廿一年二月五日

吉田次郎兵衛

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三七四号文書ト同一文書ナルベシ)

556

天草立軍衆覺

一人数拾万四千四百廿五人

鹿兒嶋衆

内九千四拾九人ハ 人躰

九万五千三百七十人ハ 披官并夫

一人数拾五萬六千八十三人ハ 外城衆

内拾一万貳千七百六十人ハ 人躰

四万三千三百十七人ハ 披官并夫

惣合人数貳拾六万五百八人

内拾貳万四千四百廿五人ハ 人躰

拾三万九千八十三人ハ 披官并夫

右者、天草立軍衆被相詰候以日員、一日之賦ニシテ如

斯ニ候、已上、

申 二月三日

黒田三左衛門
土持左馬權頭

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三七七号文書ト同一文書ナルベシ)

557

有馬・天草兩陣軍衆人数極一紙

鹿兒嶋衆

一人数拾六萬貳千百六拾六人

一万二千七百五十四人ハ 人躰

内拾四万九千四百十二人ハ 披官并夫

外城衆
一人数廿六万七千二百九拾六人

十八万八百三拾五人ハ 人躰

内 八万五千四百六拾壹人ハ 披官并夫

出水・阿久根・高尾野衆

一人数壹万五千四百六拾壹人

壹万五千五百九十九人ハ 人躰

内 四千三百六拾六人ハ 内之者并夫

右者、三ヶ所衆獅子嶋・長嶋ニ寛永十四年十一月より
同十五年二月迄番手衆、

出水・長嶋衆
一人數三千五百八拾二人 人躰

右者、長嶋浦中より番衆ニ而候へとも、長嶋地下衆之
故自飯米之由候、

惣合人數四拾四万九千九人

内 廿万九千七百七人ハ 人躰

廿三万九千二百三拾九人ハ披官并夫

外

一人數二万五千二百拾七人ハ

右者、前々賦方被始候衆也、

都合人數四拾七万四千二百廿六人

右者、有馬・天草立軍衆并長嶋・獅子嶋番手衆、寛永

拾四年之十二月より同拾五年三月迄被相詰候以日數、

一日之賦ニシテ極如斯ニ候、以上、

寛永廿一年二月五日

吉田次郎兵衛

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三七七号文書ト同一文書ナルベシ)

558

銀子四貫四百五拾五匁 一人ニ付卷ケ月ニ五匁三分

利銀拾貫二百八拾三匁三分五厘 ツ、但京都三ヶ所賦

右者、寛永十四年十二月より慶喜二年二月迄月數

七拾一ヶ月、潤月籠、但一ヶ月ニ百目ニ二匁ツ、

之利、

本利
合十四貫七百三十八匁三分五厘八毛

(本文書ハ「旧記雜錄後編六」三七七号文書ト同一文書ナルベシ)

559の1

右書付之内ニ慶喜二年と有之者偽説之由、加久藤古帳ニ
見當為考左ニ注置也、正保改元之前と被考候、

559の2

態申越候、然者當春諸所札改之時分、年号相替候由候
而、改札ニ何茂慶喜と被書付候、然處慶喜年号風説之
由候間、寛永ニ被書直候様ニ我々前より可申渡由、御
家老衆より被為仰聞候間、如此候、定者改之時分被罷
出候筆者へ被仰渡、聊尔無之様ニ年号計削被書直候而
尤ニ候、乍不申喫衆可被入念候、此方へ被差出候帳ハ、
爰元ニ而年号可書直候、此状被見届、所次ニ可被相廻

候、恐々謹言、

「正保元年」
申ノ

五月十日

種子嶋左近丞

伊集院右衛門祐

横川ヲ始倉岡迄十五外城

噯衆中

猶々、以新札年号被書直候ニ付、隙入之内之飯米ハ、
所役たるへく候、其心得可有候、以上、

560の1

「鹿籠御建文留」

猶々、水取ニ陸へおろし候儀も可為無用候、若水へ
かつゑ申舟にて候ハ、陸より水取候て舟へ可被入
候、返々唐人陸へおろされましく候、以上、

當年長崎へ参候唐船ニ唐人之きりしたん宗御座候由、訴
人有之ニ付、拷問被成候處、於天川唐人を南蛮宗ニすゝ
め入、大明へも日本へも可相渡たくミを深く敷仕候、先
今度之者共ハ日本之御法度之様子を為可承遣候、其外あ
ま川ニ罷居候日本人之子共ニ、唐之学文又南蠻宗門之学
文をさせ、日本へ可渡用意を仕由申候間、自今以後者唐

船にても陸地へ不着、海上ニ而船中を相改、宰領を付長

崎へ可送届旨、
「之イ」

今度被 仰下候間、唐舟相懸候者、番衆

を付置、不移時日鹿兒嶋へ可申越候、勿論直ニ如長崎走

通唐船にて候ハ、可為其分候、右之趣聊油断有間敷者也、

寛永廿一年

九月晦日

「山田有榮」
山民部少輔印

「顯姓久政」
顯左馬頭印

「川上久國」
川因幡守印

「島津久通」
嶋圖書頭印

「イナシ」
鹿籠役人中

〔本文書ハ、旧記録後編六三三九号文書ト同、文書ナルベシ〕

560の2

「同案イ」

右之趣各噯中之浦々へ申渡候、此表被見届地頭前よりも
「イ」
慥ニ可被申渡候、為其如此候、以上、

嶋津安藝守殿

嶋津弾正大弼殿

嶋津東市正殿

嶋津中務少輔殿

根占七郎殿

河上上野介殿

【全】

猶々、此書物被見届、乍不申写置、不移時日次第ニ

(本文書ハ「旧記雜録後編六」三五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

佐多又四郎殿

喜入撰津守殿

仁禮藏人殿

野村大学助殿

相良権兵衛尉殿

敷根筑前守殿

渋谷四郎左衛門殿

鎌田左京亮殿

新納弥七郎殿

是枝喜右衛門尉殿

河上十左衛門尉殿

伊東肥前守殿

諏方神左衛門尉殿

東郷肥前守殿

大寺喜左衛門尉殿

二階堂阿波守殿

相良主税助殿

仁禮右近将監殿

土持左馬権頭殿

申十月三日

(山田有榮)
山民部少輔

(頭住久政)
額左馬頭

(川上久國)
川因幡守

(島津久通)
嶋圖書頭

可被次渡候、何月幾日ニ其所へ請取致披見、次之所

へ相渡候日限、慥ニあて所之下ニ書付、噯衆判被仕

尤ニ候、然者惣別一通相濟候ハん刻、秋日より鹿兒

嶋へ被差上可有首尾候、緩有間敷候、浦々格護之所

ハ唐船之儀可被入念候、其外之諸所者、鬼利死丹宗

之名を替候儀被承置、不審成能々被相改尤ニ候、将

又先日他國人御國へ不居付様ニとの廻文被遣候、何

方ニ障候哉、于今此方へ從秋目無首尾候、如何無心

許候、早々相糺可有首尾候、次者かんだり出之船ニ

相極候者、追付かちを引おろし、其唐船かけ出候ハ

ん様ニ可有校量候、已上、

急度申候、然者於日本鬼利死短宗旨を稱就御法度候、弥

隠々為弘宗旨、きりしたんと云名を天子主教、又耶穌會

と此比相替、日本江差渡之由、今度長崎へ参候鬼利死短

宗之唐人申候由、長崎從御奉行衆被仰越候間、以其心得

先書如申候、唐船着岸候ハ、唐人一人も陸へおろさず、

於船中可被相改候、就中唐船之内ニ廣東出之船ニ不審成

様子有之由、長崎より申来候間、廣東出之舟と申候ハ、

561の1

別而入念番を付置、不移時日鹿兒嶋へ可被申上者也、

寛永廿一

十月廿六日

(山田有栄)
山民部少輔

(顯姓久政)
顯左馬頭

(川上久國)
川因權守

(島津久通)
嶋圖書頭

谷山 喜入 指宿 山川 顯娃 知覧 河邊

鹿籠 坊津 泊津 久志 秋目

噯衆中

同案溝邊より倉岡迄十六ヶ所御廻文ニハ、上文不相替候得共、
長崎之御奉行衆より被仰越候間、右之通被承届、若左様成者
參候ハ、搦捕、鹿兒嶋へ可有披露候、聊緩有間布者也と下文
有之計候、

(本文書ハ「旧記雜録後編」六三五一号文書ト同一文書ナルベシ)

『兒玉四郎兵衛藏』

覺

一 御鎧 御旗 御馬驗 御昇 小指等之事

平田藤十右衛門『宗則』

561の3

『全』

覺 『疑正保二乙』
酉正月七日

写差下申候也、

故、今度須田十郎兵衛下向ニ申下候事、但此組分町田勸
解由殿・平田狩野介殿より御意之由候而請取申候、則書
『久則』 『宗弘』

意ニ而候間、御添状可有候、御國元へ可申下之由被仰候
仰出候、右之通新刑部少殿にて 御家老中迄申上候 御
『納』 『忠秀』

懸 御目申候也、早々御道具衆四百人ニ可相達之旨被
具衆惣書立可有御覽之由被仰付、日記相調、六月十三日
五月十八日夜、東喜右衛門・拙者 御前へ被召出、御道
足輕也

561の2

『疑正保元』六月廿一日

以上

一 御鎧方之事 并御太刀御長刀
一 御弓方之事
一 御鉄炮方之事
一 玉薬方之事

平山七兵衛尉『忠昭』
三原傳左衛門尉『重隆』
東郷喜右衛門尉
兒玉四郎兵衛尉『利實』

一 御道具衆四百人 内三百六十人者前代より被召仕衆
四拾人者近年被仰付衆

一 御細工人之御扶持方 一 御馬屋方

一 御船手定水衆貳百人 内百人近年被仰付候由候、

一方々御作事方 一 御犬并付衆

一 歴々衆御扶持方銀 一 貳拾人衆御取立

一 小姓衆多人入目 一 近年御抱之男女

右之書立、權兵衛殿・豊前殿座へ出候、受取奈五左

衛門殿、

『全』

覺

一 合塩焔杓萬四千七百五拾四斤

右貫目ニシテ貳千三百六拾貫六百四拾目

石ニシテ五拾九石壹舛六合

右五匁圭(五)ニシテ九十四萬四千貳百五拾六放

人衆壹萬人ニ引薬ニシテ壹人ニ付九拾四放ツ、ニ當

一 玉大小三拾五萬七千六百九拾四

右之薬ニ放合玉五拾八萬六千五百六拾貳不足

一 白塩焔貳萬貳千五百三拾斤百め

貫目ニシテ三千六百貫四匁八分

石ニシテ九十石壹斗貳升

一 玉薬六萬貳千貳百五拾放

右玉薬并當へ仕合有之分

561の5

右ノ書留ハ兒玉四郎兵衛利實ニ玉薬方ノ事ヲバ、御兵具奉行ノ内ヨリ分ケテ、前文組分ノ通りニ仰付ラレケル故

ニ、如此調ヘオカレシニヤ、子孫ニ家藏セリ、利實ハ筑

後守利昌ノ子ニテ、島原立ニモ参陣セシ人ナリ、

562の1

以上

態令啓入候、

一來ル四月 若君様御元服之由候、左様候ハ、此方も御

奉行衆御振廻可有之候、就其中西弥左衛門能可仕候之

条、伊尻寛兵衛尉・玉利佐渡守・上村九郎兵衛尉・舟

木惣次郎可召寄之由御意ニ而候、早々被仰渡、急度罷

上候様可被仰付候事、

一 先日渋谷如兵衛尉にて被仰上候秋目地頭之儀、和田讃

岐守物跡被申候通具申上候、秋目之儀者肝要之津ニ而

候処、大寺喜左衛門尉手前堪忍不罷成ニ付、田舎へ引

入、地頭所之下知も不仕之由候間、先喜左衛門地頭被

指置、海江田仲左衛門へ秋目之地頭被仰付へく候間、

萬事念を入致下知御奉公申候様可被申付候旨、御意

ニ而候事、

一 此中者高三百石より上之衆、乘馬ニて御奉公被仕候へ

とも、自今以後者貳百石より可為乘馬候、百石より上

者小荷駄たるへく由被仰出候、其段早々被仰渡尤候、

恐惶謹言、

『正保二年』

酉正月十八日

新納右衛門佐

久詮（花押）

北郷佐渡守

久加（花押）

嶋津圖書頭様

（久通）
人々御中

（本文書ハ「旧記雜録追録」二二号文書ト同一文書ナルベシ）

562の2
右之仰出無之以前之御作法、左之通相見得候、併知へき

ものゆへ、爰に拔書置也、

562の3
殘高三拾四石を以、数十年自他國迄之御奉公仕候、江戸

江茂数度參、役儀等色々被仰付、主從三人より四人六人

八人迄之御賦被下候、其砌ハ今時ニ相替、高貳百石より

貳百九拾九石迄之衆者主從四人、三百石より者騎馬ニ被

仰付候御作法ニ而候、乍去訴共被申候衆も有之候得共、

曾而御取上無御座時節ニ御座候処、手前儀役ニ付御賦高

不相應ニ被下候、此儀も先祖之光も有之と内意ニ存申候

云々、上下文略ス、

同姓権左衛門

延寶六年つちのへ午四月廿八日 重昶

伊地知周八郎殿

川上因幡守様

（久國）

山田民部少輔様

（有榮）

頼娃左馬頭様

（久政）

（久國）

右権左衛門、寛永十五寅年 光久公江戸御供式拾二才より相勤、同十七年年頭御使ニ罷下、同十九年壬午三月上御屋敷御普請奉行などニ而被罷登候事有之、正保二年正月より右之次第ニ被仰出候得共、三拾四石ニ而百石・忒百石・三百石以上之衆次ニ御賦被下候事、先祖之光も有之哉と申□意ならん、然者其時分ハ、専高役ニ被召仕才□御賦等被重候事ハ相少キ事と被考候なり、

563 「御役元基」

一正保二年乙酉二月、光久公より右久慶江被成下候御書之内、弥天下鬼利支端衆今度我等江茂被仰聞候間、其元無油断様ニ分國中_ニ之者共ニ茂、右之衆可有之儀茂候半哉、可有聞立候、此由上り前ニ其方江申置候間、由断有間敷候云々、吳國船之儀鬼利志端之儀ハ彈正江申渡候間、其方頭取ニ而餘之老中江相談候而、船參候ハ、十人衆江其方前より被申付、右之様子細々申含被遣候而、少茂無油断調儀專要候、我等茂定御暇可被下候間、令帰國期面候、先餘之儀者構なく、此儀を題目

ニ被心掛可然候云々、又吳國船之儀今度別而被仰付候間、如連々大形被存緩々_ニ与候而者、事延成立筈ニ合

間敷候、吳國船之儀、其方一人之役たるべく候間、自然手筈ニ違儀候ハ、手前之越度ニ可成候、能々心懸可被申付候、巨細者別紙書載候云々、

一寛永十九年午十二月、御城下士十組に被分置候処、正保三年丙戌六組ニ被省改候、外ニ御家老組之儀茂如本被建置、與下之士同前ニ而、多くハ御城最寄之士を被入置、當分御家老組とハ格別之由候、「其時之組頭名前重而可書入なり」

564 「鹿籠御廻文留」

猶々、右之儀ニ付、長崎表へ被罷越候衆飯米彼是之儀ハ、追而算用次第可被遣候間、可有其心得候、將又此状參候ハ、其所之吳國舟之番衆被罷居候方へ、委此旨被申入尤ニ候、乍不申此状其所へ被写置、不移時日可被相廻候、以上、

一書令申候、然者唐船湊へ入候て、於相懸者、最前より申候様ニ番堅相付、不嫌夜白注進可被申候、若唐人衆氣

565

『加久藤□文留』
(案カ)

態飛札を以申入候、仍長崎表江鬼理師且宗之もの寺町御座候而、其衆相はつし候由候、就夫從御方茂御使者為被指越様ニ風説ニ承候、いかゞ御座候哉、為可承一人進入

〔本文書ハ「旧記雜録追録」一四号文書ト同一文書ナルベシ〕

日置より山川迄

暖衆中

西三月十七日

『正保二年』

〔頭姓久政〕
頼左馬頭

〔川上久國〕
川因幡守

〔島津久通〕
嶋圖書頭

任於掛出者、其所より功者衆兩人直ニ長崎へ可被罷越候、左候て彼地にて可被申入者、何方之津へ唐舟入津申候間、番相付鹿兒嶋へ注進申候得共、其返事無御座内ニ氣任ニ掛出候、若ケ様ニかけ出候ハ、其所之可為越度之由、稠敷被申付候故、迷惑ニ存、我々追候而為参由、長崎之荒木加左衛門尉迄可被申入候、少も右之儀油断有間敷候、恐々謹言、

566
『全』

申候、巨細之様子御報ニ可示給儀所仰候、尚期後音候、恐惶、

『正保二年』

壬五月五日

四人

〔求麻大畑役人〕
窪田新兵殿

番衆奥甚介にて遣候、口上ニも
巨細申候、

参

猶々申上候、風説ニ而も可有御座候得共、求广よりも飛脚使ヲ為可承被差遣たる由候間、御注進申上候、町之ものゝ申候こと、窪田新兵殿被申候とちと相違ニ而御座候へ共、右之通ニ而候、猶相違儀御座候ハ、又々可申上候、

態飛札を以申上候、仍當所町之千介と申もの、求摩へ商賣ニ罷越承候ハ、長崎表へ鬼利師且宗之者寺町御座候而、相はつし候ニ付、求广よりも為可承使者為被指越由申候、就夫今朝即刻大畑役人窪田新兵殿迄一人差遣様子相尋申候、實儀ハ不相知候得共、前々鬼利師且宗之者方々逃散候もの共、此頃五人三人ツ、走戻申由申候候、是も実正者不知候、乍去為可承、求摩よりも求广よりも飛脚使ヲ

『企』

態飛〔札カ〕を以申上候、

一頃者 殿様御下向之御左右共御座候哉、爰許者田舎之

儀ニ而、御左右共一圓不承付候、四月廿六日之日付ニ

而、伊〔地知〕李〔重政〕右衛門尉より書状被指下候、其書面ニも急度

御暇出可申様子ニ候間、御供仕下向可申之通被申下候、

其後終ニ書中不參候、

一吳國船參之由申候而、色々下々雜説共申候へ共、取し

めたる事ハ無御座候、〔地頭〕李〔地頭〕右衛門尉留主之儀ニ候間、新

敷共御座候ハ、可被仰聞せ儀奉頼候、

一三日前ニ求麻へ一人聞取ニ遣申候へ共、為何新敷儀茂

無御座候間、則刻ハ不申上候、乍去何方トハ不知候、

一左右次第打立可申之由候而、鉄炮之もの三百人仰付

為被召置由候、玉葉相調待居由候、大畑町江茂鉄炮之

もの兩人當り候由申候、別ニハ為何事も不承付候、静

ニ御座候由候、為御心得如此候、尚期後音候、恐惶、

『正保二年』
壬五月廿七日

四人

新『納』刑部様〔忠秀〕
参 八日町飛脚ニ持せ候、568の1
『政昭自記』

今度薩摩國いつミ村へ吳國船老艘なかつくといへとも、

乗渡もの者無之由注進有、若はてれん・いるまん其外き

りしたん宗門之族かの舟ニ乗来、陸地へあかりたる事あ

るへき間、かくし置輩有之者、其宿主ハ申ニ不及、御穿

鑿之上、其一類又ハ隣家一在所之者迄も可為曲事、縦き

りしたん宗門たるといふとも、右之訴人いたすニおいて

者其科をゆるし、其上急度御ほうひ可被下候、此外自今

以後も如此の訴人於仕者、是又同前たるへき者也、

正保三年四月廿日

奉行

當國出水針原之儀へ、□月十一日吳國之釣舟流来といへとも、舟人者無之、舟之内外ニ生具取付、^(書)□むしたる跡ニ見得候、因茲分國中此中者先竊ニ横見を申付、江戸へ申上候処ニ、彼近邊之在々木隠等迄可駈之旨被仰出、近郷并至嶋々不残さかし候得共、不審成もの未見出、然處ニ今度從公儀被指下御高札之間、堅守此旨、きりしたん宗門之もの付行衛不知者於申出者可被加褒美、若見遁し聞のかし候輩者、御高札のおもてのことく可被處敵科者也、仍下知如件、

正保三年五月七日

^(山田有榮)民部少輔

^(頭姓久政)左馬頭

^(北郷久加)佐渡守

^(島津久慶)彈正大弼

猶々、御軍役道具數之儀者、兼而被仰出候間不及申候、以上、

一書令申候、仍御軍役之与分候処ニ、此中ニ相替候而、川上上野守殿・渋谷岩見守殿・我等一與之與頭ニ而、一

与之中觸方を三ツニ相分、くし取申候、各事我等觸方ニ

而候、然者弓・鉄炮・玉薬・鎗・馬鞍・具足・さし物等

之儀、与中へ念を入改申由候、次第ニさし出を以可承候

題目、去年式両八分出銀皆濟之儀、此節可承究通候間、

此返書ニ細々可被仰聞候、恐々謹言、

『正保三年款』

^(重藤)三原左衛門佐(花押)

卯月十六日

門司安右衛門殿

^(頭姓)

『寛永十九年、七番与頭伊集院右衛門・川上上野、九番与頭鎌田又七郎・

入来院伯耆と有之、此にハ三人ツ、一与組頭と被替候筋ニ候得者、六

与ニ被改候時款』

『伊東次郎右エ門祐充持高應スル人数賦』

當高七百四拾八石九斗式合式才

但百石ニ付三人役ニシテ

一馬廻り二十人但人跡共ニ廿一人

一鉄炮一挺足輕二人

一手道具二本足輕四人

一小姓四人

一草履取一人

一 中間二人 一 鎧箱二人

一 弁當箱二人 一 狹箱二人

一 小荷付小姓一人

一 九人重ミ 但内四人手之者足輕役

五人 衆中 右同

一 衆中廿人 持道具五人 鉄炮

五人 弓

十人 手明

右合テ惣人数五拾人

正保二丁亥年

いノ七月小

一 朔日、なんはん船二艘長崎へ着之由聞得候、就其一左
右次第ニ皆つゝきの由候、鹿より追々ニ御状参候、来
五日ニ川内之衆揃之由、加世田より人躰百三十人之賦、
高百石より下卅石迄ハ自夫、一人夫ハ自飯米、廿石よ
り下之衆へハ、四人間ニ夫一人、御蔵入より出候、一

ケ所計之無足衆へハ、兵丈道具を持せ被成由候、然共
談合之上ニて、知行少々ニ而茂持候衆被立候て可然と
出合候間、高ニかさ衆より被賦候、御地頭様留主ニ而
候間、村田藤兵衛殿へ加世田衆可相付由候、彼是御尋
申として、大山三郎左殿・小磯清右殿・小方弥五左殿
鹿へ参上候、當所衆主取ハ市伴介殿・本民部右衛門殿・
仁礼右京殿と鹿より聞得候、来ル四日ニ打立候由ニて、
諸人いさなミふためき候処ニ、三日ノ九ツ時ニ、先此
節ハ長崎へハ人衆不入由、留状参候、左候而御分國中
嶋く津々番衆被召置候、片浦へ佐多又四郎殿・嶋左
近殿御大將ニて、諸外城衆被相揃候、加世田衆人躰五
十人之賦、九日ニ御立候、善六罷立候次第ニ替り被成
候、善六替りニ善之丞遣候、某事も普請方奉行として
可参由候間、父子共ニ罷越話候、右なんはん船去三日・
四日ニ御出させ被成候由、追くニ状参候、長崎ニて
彼船焼ハリ、又ハきりしつめ可被成、御たくミ種く
さまくの談合数日被へ候へ共、手ニ不及、去六日ニ
御出させ被成候由廻文参候、吾々事替り衆被来候間、

572の1

右南蛮船渡来之節、出水地頭山田昌岩江諸所御手當被仰

甫也、
季安按、右之時分御賦ニ茂候哉、左之通在之、本ハ田尻種

一正保四年丁亥六月廿四日、肥州長崎へ南蛮船式艘入津、
自江戸為上使山崎權八殿・井上筑後守殿・松平讃岐守
殿御下向、其外九州之御大名衆よりも兵船を催雖有之、
同年八月六日ニ無事ニ而帰帆仕也云々、

571

「加治木吉祥寺四代住僧春良覚書」

八月九日ニ帰候、然處ニおきへくろ舟見得もかせんと
て、皆ふもと衆小松原濱邊へ被相揃候、左候而夜入候
へハ、磯邊・濱邊間一町ツ、ニかゝり火たかせ、番被
召置候、若南蛮人かくれ候ておりもか可仕との御用心
と聞得候、八月十四日ニ番衆皆被召上候、番衆飯米一
人ニ舂舂三合被下候、真米石ニ付廿目ツ、商場也、其
後番衆名前名乗銘々ニ可書出之由候て、名乗不知衆な
と被行當候、

572の2

渡候、問合書等出水地頭飯屋へ本書有之、如左、

覚

出水衆、今度長崎立之衆飯米先々倉戸ニ而可相渡由申候
得共、福之江ニ米御座候条、彼方ニ而可相渡候間、其心
得を以可被仰渡候、以上、

亥
六月一日
市来五兵衛印
(家昌)

面高主馬殿

573

「鹿籠御題文留」

外城名略ス

右浦々江前々吳国之流船共参、不致披露為召置事共ハ無
之候哉、江戸從御奉行衆被聞召度由、新納右衛門佐殿へ
被承候、就其浦々嶋々相尋可申上由被仰下候間、早々被
為聞合御申上候、以上、

正保四年

六月廿八日

(山田有榮)
民部少輔印
(北郷久加)
佐渡守同

覚

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一四七号文書ト同一文書ナルベシ)

(川上久國)
因幡守同
(島津久慶)
弾正同

一 今度長崎江黒船就来着、當國之浦々嶋々迄警固衆丈夫
ニ可差置之旨、從長崎御奉行依被 仰出、人数御催促
候之事、

一 黒船之一着者江戸被相待 御下知候、万一其以前ニ氣
任ニ企帰帆、從長崎洩参候者可成程可押留旨被 仰出
候、於其儀可及防戦候之事、

一 戦場之勝利者、軍衆一同ニ随下知儀可為專一候事、
一 右之下知、其物頭より可被申渡候之間、萬事可被守其
意事、

一 其主取之手を離れ他之手ニ付、縦雖致分捕高名候、曲

事ニ可被仰付、自前代之御法度相定候事、

右條々無緩疎可被相守者也、

正保四年七月三日

(本文書ハ「旧記雜錄追録」一五〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(山田有榮)
民部少輔
(北郷久加)
佐渡守
(川上久國)
因幡守
(島津久慶)
弾正大弼

575 出水瀬之浦隼人之迫川口迄、山田民部少殿被越候間、彼
方より人数入由申来候ハ、不嫌夜白可被走参者也、仍
如件、

七月四日

(久加)
北郷佐渡守

(久國)
川上因幡守

出水 高尾野同日戌ノ刻

(久慶)
嶋津弾正判

阿久根右同酉ノ下刻

噯衆中

576 急度令申候、只今嶋津弾正大弼殿より被仰渡候、山民部

様瀬之浦へ御越候御乗船、二艘程可遣之由承候、人数い

かほと被召烈^(列)候儀候哉、其心得を以二艘船賦仕度候、早

船可相廻候へ共、此表五里方之水手皆相立、長崎ニ

正保四年七月四日

何かし判

参候而不在合候、遠方ニ申遣候へ共未参候、出水之諸浦

御使二階堂右衛門兵衛殿

水主先日差出候ことく、不残久見崎御船手ニ早ニ御揃可

山田吉左衛門殿

給候、又御乗船者米之津之様ニ廻可申候哉、又何方たる

ニ民部様可為御越候間、被聞召合可承候、恐惶謹言、

578 急度令啓入候、然ハげず沖へ大キ船相見得候由、只今

七月四日

多田崎遠見番衆被申来候、殊之外遠く御座候故、細ニ見

相良土佐守

得不申候由候、乍去帆ニツハ見得為申由候、相替候ハ、

頼元判

追ニ可申入候、舟先ハ南へ向候様ニ見為申由被申候、為

川越新左衛門

御存候、恐惶謹言、

重昌判

七月五日戌ノ初刻

中馬兵部左衛門

出水 御變衆中

重辰(花押)

577 証文

前ニ吳國之流船共為参を不致披露儀ハ無御座哉之由、被

山田主計助殿

成御尋候、彼様子連ニ稠被仰付候間、節ニ浦中之者共ハ

野村市郎右衛門殿

申聞候、津浦之儀ハ不及申、海上ニ而も見合為申儀曾無

伊藤彦岐入道殿

御座候、若相違之儀於申上ハ、其科可被仰付候、為後證

579 一主従四人指宿内蔵助殿、同三人種子田喜右衛門殿、同

如此ニ候、以上、

式人荒田助左衛門殿、同式人種子田八右衛門殿・岩田
藤七兵衛殿・吉田喜之助殿・有村少左衛門殿・田島甚

右衛門殿・脇岡助兵衛殿

右之人数、一左右次第ニ可申渡候間被打立、如瀬之浦被差越、彼方ニ而飯米被受取、山田主計助殿下知次第乗船可有之候、引取之外ハ四人相中ニ夫賦付、

人躰拾弐人 外持夫三人

右人数、一左右次第貝ヲ吹せ可申候間、則被打立、

名護浦可為乗船、三枚帆三艘賦付可申候、壹艘ニ而

茂人躰四人宛可被乗候、四人間ニ相中夫壹人ツ、賦

付可申候、飯米茂福之江より相渡儀候得者、被取籠

候而、若無御用時返上成兼可申候条、三日飯米手前

より用意ニ而茂可然候、難成衆之儀ニ茂可被受取候

哉、御談合有度候、長崎迄被差越儀ニ而者無御座候、

以上、

七月六日

賦所

指宿内蔵助殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」九八号文書ト同一文書ナルベシ)

580 『蒲生谷口氏藏』

覚

一 今度長崎へ黒舟着岸ニ付、蒲生衆士百六十人被打立候、被罷立候、主取として谷口助右衛門殿・土持少外記殿・

野村半右衛門殿・竹内兵右衛門殿・谷口宮内左衛門殿

被差越候、此衆へ何篇御相談之上を以、今度之御軍役

等無異儀可被為調事、

一 雖不及申候、右五人より諸事被仰渡候刻、難決之人於

有之者日記ニ留置、御地頭御下向之折節可被仰上事、

一 各宿成程一所ニ可被仕候、村々ニ有之候得者御急用之

刻遅々有之事ニ候間、其御心得尤ニ候付、人躰之儀者

不及申、被召列候もの共狼藉成躰無之様ニ、主人より

連々かたく被仰付候而可然存候事、

右之趣不似合儀ニ候得共、御地頭御留守之儀候条、

我々として如此候、以上、

正保四ノ七月七日

野村利兵衛判

谷山民部左衛門判

覚

一夫丸三拾貳人武元与

一夫丸九人 六月田与

内三十人ハ六月衆

内七人ハ 六月衆

十人ハ 今釜衆

一人ハ 米津衆

一人ハ 福之江衆

一人ハ 平松衆

一夫丸九人 野田与

一夫丸貳人 庄村与

内八人ハ 野田衆

但庄衆

一人ハ 庄衆

583 『蒲生谷口氏藏』

差出

一身躰百六拾老人

蒲生衆中

内一人ハ 高百石より上

十六人ハ 高三拾石より上

百四十四人ハ 高三拾石より下

一下人十八人四人間ニ被下候賄夫御蔵入相渡候、

一夫丸三十六人

山元勘左衛門殿江渡

合人数貳百拾五人

右道具之事

一鉄炮百五十二挺

一鍵七本

候ハ、向田ニ而市来五兵衛殿ニ相談可有之候、以上、

亥七月八日

鎌田大炊助押判

平田清右衛門押判

堀弥右衛門尉

福之江
出物蔵衆中

覚

右相中夫、兼而引渡召置、到来次第不移時相渡候様ニ
可被賦付通、下代衆へ手形遣申候、前以夫丸可被請取
置、立衆江茂可被仰渡候、到時ハ遅く可有之条申事
候、以上、

七月七日

出水代官印

御唆衆中

其表山田民部少輔殿御下知、諸所軍衆飯米之儀民部老御
下知次第可被相渡候、本手形ハ重而可遣候、其元米拂底

一弓^(張カ)耆帳

一長刀耆振

正保四年亥七月八日

与頭

谷口宮内左衛門

同

野村半右衛門

同

竹内兵右衛門

同

土持外記

嘜

谷口助右衛門

御奉行衆中

猶々申入候、寺領衆之儀申入候、鈴木殿出合之衆、

未揃進由被申候、吐師殿儀者白鳥德現寺・後兩寺よ

りも鹿府之様子承候、是ハ、公儀ニて為相濟儀ニて

候間、可得御意存候処、今度吳國船之儀ニ付、御取

揃ニ而如此方罷越候、重而、公儀を可申上由被申候、

此段寺々へも可被仰達候、以上、

急度令啓候、仍京泊より御船昨夕相廻、舟数四艘参候、

内耆艘者高尾野へ相渡候、耆艘ハ地頭御乗船ニ罷成候、

残而拾耆端帆・九端帆式艘乗船ニ相渡候へ共、多人数ニ

て不應舟ニ候間、今釜之十式端帆被召寄由候、是ニ而も

帆耆枚ニ付五人ツ、之賦ニて候、中ノ罷成間敷候得共、

次第ニ御船も可被相廻哉之由候間、先以如此候、就夫何

れも^(答カ)管地くわう等無御座候、俄ニ可被成様無御座候間、

御内之管不殘御遣可給候、何方ニ御座候哉、此方へ本帳

無御座候間、此方迄申遣候、是ハ急用之儀候条、一刻も

早々御遣可被成候、御延引有間敷候、恐惶謹言、

山田主計助

七月九日

有真(花押)

野村一郎右衛門殿

伊藤耆岐入道殿

人々中

池袋九左衛門殿を以被遣候一ツ書、細々得其意候、

一今釜之祇園丸被相廻候付、米之津ニて角材木御遣候由

尤存候、定明日ハ可相届哉ニ存候、

一釘・かすかい・地かね御方へ無御座候由承届候、則其

段地頭へ申上候、久見崎方へ可被仰越由候事、

一鍛冶炭之儀、於此元御代官衆へ御談合茂可有御座哉ニ

『蒲生谷口氏』

存候、

一 先書ニ今度乗合之船水桶・(箱カ)箆樽之類御船手より不被遣、
 事關ニ御座候条、米之津客屋・水夫屋へ御座候水桶・
 箆樽不残御前道具之外ハ可被遣由申候処、字之書違ニ
 て苦御用之様ニ御返事ニ相見得候、此元も御注進候ハ、
 則刻御出船可有御座候間、早々御遣可給候、乗合之船
 茂五六艘之御賦ニて候、多人數之儀ニて水桶無御座候
 而ハ調間敷候条、御遣可給候、

一 今度舟數ニ竹はし御用意候而御乗せ可被成由候、船老
 艘ニ付はし五けたッ、可被召乗由候、就夫はしけた用
 として、御城山よりはしけた之竹七拾五本、明日此元
 へ相届候様ニ可被仰渡候、延引有間敷候、恐惶謹言、

山田主計助

七月十日

有真(花押)

野村一郎右衛門殿

伊藤老岐入道殿

寛

一弓・鉄炮、用ニ立候様ニ可被放候、黒船楫木厚サ四尺
 餘有之由候、南はん人矢比ニ見得候刻被放候て能候ハ
 んと、出合候各へ談合候事、

一 若舟に石火矢當候て、人數海ニはまられ候刻者、類舟
 に轉間并本舟を指寄、けかなきやうに可被乗候事、

一 小舟ニて焼草仕損談合候事、付かね可被措事、

一 無氣任様ニ可申渡由、從鹿兒嶋可為仰越候、猥ニ於有
 之ハ嘸衆主取可為越度候、舟造作出來候衆者、早々可
 被乗候、若陸ニ被居候ハ、可有其沙汰事、

一 其前ニ嘸衆之外下知可被任人書記可被出候事、

亥七月十三日

(本文書ハ六一六号文書ト同一文書ナルベシ)

587

急度令啓候、仍たての板式百枚可被召寄由、民少老被仰
 候、下知識・六月田海邊近き御蔵へ召置候たて式百枚早
 々御遣可被成候、不足分ハ麓方角ニも可有御座候、御談
 合尤ニ候、恐々謹言、

七月十三日

山田主計助(有真)野村(直綱)一郎右衛門殿伊藤(祐昌)孝岐入道殿

人々御中

此状御急にて出水へ遣申候、次第ニ早々御遣可被成候、

七月十三日

野田 高尾野

御覽衆中

猶々申入候、此状相調候而已後、番衆之儀ニ付直

ニ可被仰由候間、誰ニ使可申渡段承候間、大井七

兵衛へ申候所、調之儀ハ御使可為口達候、以上、

昨日川村新右衛門殿へ被差越候八重尾殿より之書状、

慥ニ相届候、

一則其書状高牟礼左衛門殿を以差出申候、被仰候ハ、

常々無御座馬を被乘来候付、休兵衛殿為可被尋、番衆

平松迄為被参由候、それハ左も可有御座候、休兵衛殿

より早々可被為通由被申候而、麓江も其段被申遣候、

又番衆も一度ニ休兵衛殿在所を被罷立候処、麓之使行廻被罷帰候刻、於高柳隈元飛脚ニ為行合由、殊之外相違候付、多分城山殿ハ平松衆にて候間、宿元ニ被立寄

候ハん哉と被思召由候、重而御穿鑿被成可被仰越由候、

一長崎表之儀、折々御左右御座候へ共、事多候而不申通候、彼方事諸國人数被相揃、兵船之(勝)諸軍衆支度等

をひた々しき由候、もはや漢口杯も鍋嶋殿より材木を

以引きられ候間、黒船可出様無御座由候、彼舟之名も

がりやんと申由候、黒田殿より小早式艘ツ、黒船之左

右方々番手之様ニ相賦り罷居候へ共、少もかもい不申

由候、南蛮人もかんはん之上ニ上り、自由罷居と相聞

得候、於被召懸者黒田殿一手ニ而口能有間敷由申候、

一隠岐守様松山今月三日ニ御立にて候、一兩日以前平渡

迄御乗船之由候、昨日御到来御座候、定而此頃ハ長崎

へ可為御入津と申事候、

一長崎へ此元より御使衆餘多御座被成候、彼方も諸國よ

り人数被差寄儀候条被聞合候へハ、人数被差寄事、御

奉行衆御手前も御出合可然様ニ相聞得候間、當國より

589
〔季安注〕
「後」『蒲生谷口氏本』

覚

蒲生衆八人

右者、石火矢うち見合を以可被申渡候、勿論石ひや船ニ可被乗候、但三原大藏殿・伊東早馬介殿久見崎江被罷答

も少々人数中途迄差懸り罷居候、領内之津浦可相堅由上意候へ共、為差寄人数ハ〔加長崎カ〕可被下由被為申候得共、此方より俄ニ人数不相渡、先使者衆人数忝百程長崎へ被相詰候、

一右之至候条、彼首尾無御座候而ハ如何之由候而、市来備後守殿・藁丸半左衛門殿人数百五十程同心候而、もぎ迄急度被差渡由候、然時ニハ弥以此方人数被罷渡間敷哉と存候、此元より番なか／＼敷可有御座と笑止存候、又長崎より絵圖参候間、為可御目懸もたせ申候、

七月十三日

〔有〕
山田主計助

〔直稱〕
野村一郎右衛門殿

〔祐目〕
伊藤老岐入道殿人々御中

候間、相談可有候、以上、

亥七月廿二日

〔忠傳〕
新納加賀守判

〔久國〕
川上左近将監印

〔久惠〕
嶋津大膳正印

蒲生

噯衆中

590
〔季安注〕
「前」『鹿筆本』

一諸所浦濱町加子、此中從船奉行賦付以相立候、外浦濱町在郷御藏入不寄給地、船を乗程之者十五歳より七十歳迄被相糺、不移時刻書状相付、久見崎船奉行へ可被差越候而、此段札帳ニ可被引合候、若一人も隠置、又者延引候ハ、可及沙汰事、

一加子賃銀常より茂相重候而被仰付候間、可有其心得事、一今度者天下事ニ付、國中之船不残被仰付候処、此中賦付之加子にて過分ニ不足候故、如此候、何れも此度之御奉公之条〔ミカ〕入精儀肝要候、加子相重ニ罷立候付、後日之念遣入間敷候、以来加子可被仰付時者、此中之可

為御定候、今度之人数者相懸ル間敷候、

右條々、於緩者其所之地頭代・庄屋・浦役人稱其科
可被仰付候、少も延引有間敷候、以時付可相廻者也、

七月十四日

(北郷久加)
佐渡守印

(川上久國)
因幡守印

(島津久慶)
彈正大弼

谷山 喜入「諸所署ス」

長崎江南蛮船參候ニ付軍衆之賦

出水

地頭

(有榮)
山田民部少輔殿

一人躰五拾人

高卅石より九拾九石迄主従式人

百石より百九拾九石迄主従三人

式百石より式百九拾九石迄主従四人

三百石より上之衆ハ主従拾人

若廿九石より下衆於有之者、四人間ニ

御蔵入より夫丸可出也、

一人躰五拾老人但高廿九石より下一ヶ所迄之衆、四人間

ニ御蔵入より夫丸可出也、

鉄炮三十二丁 弓拾丁 鑓十本 御兵具被仰付候、

合人躰百老人

右打立之日限ハ、御家老衆より可被仰渡候条、可有其
心得候、今度被罷立候人数、高付名ニ書記、於向田

市来五兵衛殿へ被相渡、賦飯米可被請取候、御兵具道

具(之)儀ハ向田ニ而東郷(十九)左衛門殿より可被請取候事、

七月朔日

高所

覺

今度長崎へ南蛮船之儀ニ付人数被差遣候、就其入用之諸
物何篇手迫無之様可被相調候、此方へ被尋候へハ時刻推
移儀候間、各合点次第たるへく候、後日之儀ハ我々可承
候、御奉公此時候間、少も仕まハしつかへ不申様ニ肝要
可被成候、以上、

亥七月朔日

(頼貞)
相良權兵衛押判

喜入吉兵衛同

弟子丸市左衛門殿(宗方)

593の1

二宮全右衛門殿

御囃衆中

覺

出水衆中百三拾八人ニ而候間、衆中四人間ニ夫丸耆人宛之賦可被相渡候、以上、

亥
七月朔日

喜入吉兵衛押判

相良權兵衛
(願員)

二宮全右衛門尉殿

弟子丸市左衛門尉殿
(余方)

593の2

右ニ張紙

七人内 三人 一番衆

耆人 二番 主計助殿与 竹元
『山田』『有真』

三人 二番 三郎右衛門殿与
『井尻』『祐永』

十二人内六人 一番衆

三人 二番 内藏助殿与
『指宿』『忠易』

三人 二番 加兵衛殿与 上知識

六人 一番衆

十三人内耆人 二番 福之江衆

耆人 二番 今釜衆

二人 二番 主計助殿与
『山田』

三人 二番 大炊助殿与

右同 二人 庄衆

右同 五人 野田衆

四人内 三人 野田衆

一人 庄衆

右同 八人内 三人 一番衆

三人 二番 玄宅老与
『伊東』 六月田

一人 二番 米津衆

一人 川村殿 川俣殿 黒木殿 相中夫

一人 平松衆 鯖洑

594 高奉行衆より之廻文髓ニ拜見申候、事之外御急用之米ニ

て候間、船耆艘ツ、ニて成共如向田可相廻之由候間、昨日之船之儀又々耆艘ツ、成共被仰付可被下候、左候ハ、

少ミツ、成共向田へ相廻可申候、恐惶謹言、

七月朔日

実弘（花押）

（墨引）御噺衆中

大井十右衛門実弘

出水

主従三十五人（有榮）

山田民部少輔殿

一人躰五拾人但高三拾石より九拾九石迄ハ主従三人

百石より百九拾九石迄ハ主従三人

式百石より式百九拾九石迄ハ主従四人

三百石上衆ハ主従十人

右ニ張紙

此五拾人之衆ハ高百石持ならハ主従三人ニ而も可

罷立候、（間カ）□〳〵百石ニ三人役ニ而候、然共三人之

内主従ハ御賦出候、忝人分ハ飯米計ニ而候、三人

之外ニ相烈事不相成候、

一人躰五十一人但高廿九石より下一ヶ所迄衆、四人間ニ

御蔵入より夫丸可出之、

但鉄炮三十一丁 弓拾丁 鐘十本 御兵具被仰付候、

亥七月二日

右ニ張紙

此五十一人ハ御物御兵具可被持候間、無足衆可然

候、

今朝人数賦之書物遣候へとも相替候、此書物を以可

被仰付候、

596 今度長崎立衆飯米并衆中被召連夫丸之出所、書物式通調

進上申候、御地頭者明日三日ニ此方可為御立之由候、巨

細ハ直ニ被仰候間、不能細筆候、恐惶謹言、

七月二日

野村一郎右衛門様

伊藤老岐入道様

山田主計助様

参人ニ御中

597 急度申越候、今度南蛮船之儀ニ付、長崎よりかこしまへ

御用ニ而、荒木嘉左衛門など又ハ誰人ニ而も可罷通時者、

宿次を以無吳儀可被送届候、少も延引有間敷候、恐々謹

言、

亥七月朔日

喜入吉兵衛（花押）

598

伊集院同日丑未印

相良権兵衛

頼貞

市来同日ヲノ未印

串木野 同日辰之刻印

向田 同日巳ノ刻印

水引 同日午ノ刻印

阿久根 同酉ノ刻印

出水

噯衆中

參 御宿所

猶々、高所より人数賦書立被遣候間、銘々見分候て

可為請取候、以上、

長崎江黒船參候、然者自然人数入候ハ、隠岐様・馬場

三郎左衛門様・高力撰津守様・日根野織部様より御左右

次第可差出旨、兼而御承候、今晚可申来も不相知候、御

左右御座候而よりハ程も遠候間、来ル五日ニ南瀉之衆ハ

向田ニ可被揃候間、其元ハ民部少輔殿出水へ被相越候条、

可被得其意候、賦等之儀者高奉行より可被申候間、不能

詳候、恐惶謹言、

七月朔日

北郷(久加)佐渡守

川上(久國)因幡守

600

猶々、有船之さし出、不嫌夜白久見崎御船手之様可

被遣候、

469

599

嶋津(久磨)彈正大弼

阿久根 高尾野 出水 大口

噯衆中

返すく、片時も延引有間敷候、所付之下ニ判被成、

如鹿兒嶋可被返遣候、以上、

態廻文を以申入候、長崎へ吳國船參候ニ付、加子過分ニ

入事候、就夫賦付之書物加子追立衆可被持越候間、早々

如賦可被相立候、左候而一刻も早々久見崎舟手之様ニ可

被遣候、少も御油断有間敷候、若於御延引者後日稠其沙

汰可有候間、其心得可被成候、以上、

亥七月朔日

御船手 相良土佐守(頼元)

伊集院 市来 串木野 隈之城

平佐 高城 阿久根 出水

右御噯衆中

急度宿次ニ申越候、諸所御噯之内ニ、三枚帆より八端迄之有船差出、早々久見崎如御船手之可被指遣候、御急用之儀候間、御油断被成間敷候、右之状御覽被届、諸所之下へ時付被成、此地之様ニ可被為持候、恐惶謹言、

河越新左衛門

七月朔日

重昌(花押)

東郷肥前守

重方(花押)

京泊 西方 阿久根

出水

右諸所
御噯衆中

601 『鹿籠本』

猶々、自然相替儀候ハ、との御用意のため、近日もよりニ被仰付外城も可有御座候へ共、惣而ことくしくさわりさるやう可被心得候、

急度申候、長船(輪カ)二艘着岸候、從隣國人数御寄せ被成候へ共、御領内之儀ハ浦々嶋々番手被仰付候、もより

602

ニ不慮之儀も候ハん時之ため、人数ハ不被召寄之旨、高力撰津守様・日根野織部正様・馬場三郎左衛門様より、去廿九日之日付ニて御状被下候間、甕嶋へ鉄炮衆少々被致警固、若又重而替儀もや候ハん、京泊を初もよりの浦之舟を揃被置被仰付、外城ハ其分候条、其外別条無之候、ケ様之時分者色々風説多候て、無心許可被存候間企一書候、不騒やうに可被申付候、仍如件、

七月二日

(山田有榮)
民部少輔

(川上久國)
因幡守

(北郷久加)
佐渡守

(島津久慶)
彈正大弼印

谷山・喜入より秋目迄

噯衆中

覺

態次飛脚を以申越候、仍此度長崎表へ御舟餘多參候間、水手過分入儀候、御噯之内雇水手御改被成、何拾人御座候通差出、早々久見崎御船手之如く可被遣候、殊之外御

急用之儀候間、御延引被成間鋪候、恐惶謹言、

七月二日

河越新左衛門尉

重昌判

東郷肥前守

重方判

出水

御喫衆中

603

猶々、人数之儀、長崎より急ニ申来候ハ、五日六日之うちに可被相立候、少も油断有間敷候、

急度申候、然者長崎へくろふね参候付、其許衆中之内百三拾八人可被罷立御賦ニ候、誰々可被罷渡衆、早々被相賦可被仰渡候、立衆四人間ニ夫老人ツ、其許御蔵入方へ被仰渡候間、證文遣候、飯米ハ福之江より蔵衆可被相渡由候而、高所より引付被遣候間、無延引可被相調候、右物主ハ山田主計助可被参由候、其御心得尤候、其許を来ル五日六日之間被相立、かせだうにて舟ニ可無乗候、少も無延引様ニ可被仰付候、恐惶謹言、

山民部少輔

七月二日

有栄(花押)

山田主計助殿

〔有真〕

野村一郎右衛門殿

〔直綱〕

伊藤老岐入道殿

〔祐昌〕

〔玄宅〕
参御宿所

604

猶々、相替儀共追而可申入候、以上、

一書令啓上候、切通番衆より到来候水俣へ被仰付候水主昨日酉ノ刻ニ相立、松橋之如く被相揃由にて、船奉行被差越、加子七十人被召烈候、佐鋪よりも七十人参候由承候、是又為御納得候、恐惶謹言、

七月二日

老岐舎人佑

秀晴

(墨引) 御喫衆中

まいる

605の1

急度申越候、仍長崎表へ舟数罷上儀候ニ付、水手過分ニ入義候間、櫓取仕候もの、不依老若、即今日不移時久見崎御船手江相揃申候様可被仰付候、殊之外御急用之事情間、若於延引者各可為越度候、将又先書如申遣候、三枚

606の1

只今長崎御奉行より御當國之人數可被召寄と思召候へとも、嶋々浦々若不慮之儀も可有之候間、不能其儀候条、其もよりの浦をかため可申由被仰越候間、此節被罷立候儀無用候、為其如此候、恐々謹言、

七月二日

(山田有榮)印
民部少輔

(北郷久加)
佐渡守

(川上久國)
因幡守

(島津久慶)
彈正大弼

出水

高尾野 同三日亥ノ下刻印

阿久根 同三日戌ノ刻印

噯衆中

継飛脚

鹿兒嶋西ノ刻印 (印) 伊集院 市来 串木野 隈之城

水引

606の2

此状阿久根へ急用ニ而遣候間、所次以時付早々可持届者也、

605の2

帆より上之舟相改被成、長崎迄可渡様之舟ハ取誘有へく候、左候而何艘と書立、即可被遣候、此状為被御覽通、諸所下ニ時付被成、走飛脚を以可被相廻候、聊か延引被成間敷候、恐惶謹言、

七月二日

川越新左衛門
重昌判

東郷肥前守
重方判

京泊四ツ未印 西方 阿久根

出水 御噯衆中

次飛脚

人々御中

此状急用ニて右之諸所へ遣候間、走飛脚を以不移時刻相届候様ニ可被仰付候、勿論諸所下ニ時付可被成候、以上、

亥七月二日昼四ツ時

川越真左衛門
(マシ)

東郷肥前守
(重方)

京泊 網津 ゆた 西方

大河 阿久根 野田 高尾野

いづミ 御噯衆中

亥
七月二日

民部少輔

佐渡守

弾正大弼判

607 我等事も只今瀬之浦へ参着申候、此度長崎へ南蛮船参候

付、御急ニて罷越候、明晩方参候而彼是可致御談合候、

奉行所より條書参候付掛御目候、被御覽届、又此方江返

可被下候、恐惶謹言、

七月三日

弟子丸市左衛門(花押)

宗方

山田主計助殿

(有裏)

伊藤老岐入道殿

上

人々御中

已上

猶々申上候、長崎町濱人糧物等山へ持登罷居之由候、
此等之通商人申越候間、大形之儀ニ而も候へとも申
上候、定而尊所江者直左右御座可有と存事候、以上、

一書令啓上候、昨日三舟浦人長崎之商賣船潮掛り申候、

浦見廻之衆被罷合、長崎之様子被相尋、長崎ヲハ朔日之

晩ニ出船仕之由候、南蛮船式ともニ番船ニ而取巻被召置

候、即刻江戸へ御申上被成候へとも、上意未相下候間、

何様とも相知不申由候、御政所衆兩人共ニかりうた舟ニ

御乗被成御覽之由候、老艘ニ石火矢六十丁構、忝丁ニ三

人宛付届候、積荷ハ玉くすり計之由候、上意無之内ニ於

致出船者可被召様無之由候物沙汰承候由候、其外隣國よ

り大勢被為相續候事者有馬御陳立之様ニ御座候由申候、

此等之趣承候間、即刻申上候、恐惶謹言、

七月三日

坂元源太左衛門

豊田右近将

重時

山田土佐守殿

参人々御中

608の2

此状長崎之様子承候間、所次ニ遣申候、山田土佐守殿所
へ御届可被成候、以上、

七月三日

坂元源太左衛門

中馬兵部左衛門殿

清田右京亮殿

木原兵左衛門殿

覺

其元出水出物米之内、真米貳拾石・赤米貳拾石早々瀬之浦之下代衆へ相届可被相渡候、瀬之浦御番手之衆飯米ニ罷成候間、御急用ニ而候間無延引相届可被成候、廻船之儀ハ出水嚙衆へ被仰断候而、早々可被相廻候、本手形ハ後日請取次第ニ可遣候、猶も下代衆より被申候而入用次第可被相渡候、乍不申受取ハ慥ニ可被取置候、急用之儀候間可被入精候、以上、

亥七月三日

福之江

出物藏衆中

豊田(重時)右近将

鎌田大炊助

平田監物

猶々、爰「新納」元加賀守「忠清」之儀も鹿へ参上被申、留守之儀候条、為我々得御意候事ニ候、以上、

態捧一書候、仍永崎(長)行之儀今朝寅之刻被仰聞せ候、定而民部少輔様御帰宅被成候半与存候、彼是之儀民部少輔様へ可得御意候通、御廻文ニ被仰聞せ候条、為可得御意若輩差下申候、細々御報ニ可被仰聞事奉頼候、恐惶謹言、

七月三日

宮原狩野介

乘泰判

今村右京亮

重年判

寺師半右衛門

宗俊判

山田主計(有寛)助殿

野村市郎(直徳)右衛門殿

伊藤老(祐昌)岐入道殿

人々御中

611 急度次飛脚を以申越候、先書へ如申候、水手不依老若昨

日久見崎御船手へ可被相揃之由申候処、于今御延引被成

候儀、無心元存候、則不依老若櫓取仕候者追立ニ而可被
遣候、長崎へ被為越候御人衆、最早向田へ被着候通承候、
若水手油断仕不参合候へ、可為御事關候条、各越度ニ可
罷成候、為後日堅申届置候、恐惶謹言、

七月三日

河越新左衛門

重昌判

東郷肥前守

重方判

西方酉ノ刻 阿久根 出水

御囃衆中

612の1

宿次ニ申渡候、鹿兒嶋より只今被仰越候へ、長崎へ之人
数船、先此節者被召置候由承候、就其各御囃中之船并加
子之者共可被差留候、是又為御存候、恐惶謹言、

七月三日

河越新左衛門

東郷肥前守

京泊 西方同日戌之頭刻

阿久根 出水

612の2

右諸所 御囃衆中
次飛脚

此状卷ツ宿次を以早々可被相届候、聊御延引有間敷候、

亥七月三日昼九ツ時

東郷肥前守

河越新左衛門

京泊 西方酉ノ刻 網津申ノ頭

大川 湯田 阿久根戌ノ頭

野田亥之刻 高尾野

出水 御囃衆中

613

『鹿筥本』

坊津 泊 久志 秋目

右之諸浦へ當時之有船三枚帆より上ハ不残、此度吉田新
右衛門尉殿・津留助允殿兩人之帳面ニ付留可被罷通、其
帳之写を地下役人より書出、次飛脚を以鹿兒嶋へ野村大

学助殿へ可申届者也、

七月三日

民部少輔

【正本在蒲生】

覚

一 今度長崎江黒舟着岸ニ付、蒲生衆士百六拾壹人被仰付被罷立候、主取として谷口助右衛門殿・土持少外記殿・野村半右衛門尉殿・竹内兵右衛門尉殿・谷口宮内左衛門尉殿被差越候、此衆江何篇御相談之上を以、今度之御軍役等無吳儀可被為相調事、

一 雖不及申候、右五人より諸事被仰渡候刻、難決之人於有之者、日記ニ留置、御地頭御下向之折節可被仰上事、

一 各宿成程一所ニ可被仕候、村々ニ有之候得者、御急用之刻遅々有之事ニ候間、其御心得尤ニ候、付人躰之儀者不及申、被召列候もの共狼藉成躰無之様ニ主人より連々かたく被仰付候而可然存候事、

右之趣不似合儀ニ候得共、御地頭御留^(守カ)□之儀候条、

(北郷久加)
佐渡守

(川上久國)
因幡守

(島津久慶)
彈正太弼

615 【正本在蒲生】

差出

我々として如此候、以上、

正保四ノ七月七日

野村新兵衛花押
谷山民部左衛門尉花押

一身躰百六拾壹人 蒲生衆中

内巻人ハ 高百石より上

十六人ハ 高三拾石より上

百四十四人ハ 高三拾石より下

一下人拾八人 四人間ニ被下候賄夫御藏入相渡候、
山元勘左衛門殿へ渡

一 夫丸三拾六人 合人数式百拾五人

右道具之事

一 鉄炮百五十二挺

一 鐘七本

一 弓壹張 一 長刀壹振
与頭

谷口宮内左衛門

正保四年亥七月八日

同 野村半右衛門

同 竹内兵右衛門

同 土持外記

同 谷口助右衛門

御奉行衆中

616 『正本在蒲生』

覚

一弓・鉄炮、用ニ立候様ニ可被放候、黒船楫木厚サ四尺
餘有之由候、南はん人矢頃ニ見得候刻被放候て能候ハ
んと、出合候各へ談合候事、

一若舟に石火矢當候て人数海ニはまられ候刻者、類船ニ
轉間并本舟を指寄、けかなきやうに可被乗候事、

一小舟にて燒草仕様談合之事、付かね可被摺事、

一無氣任様ニ可申渡由、從鹿兒嶋可被為仰越候、猥ニ於

有之ハ、嘍衆主取可為越度候、舟造作出來候衆者、早

ニ可被乗候、若陸ニ被居候ハ、可有其沙汰事、

一其前ニ嘍衆之外下知可被任人書記可被出候事、

『正保四年』
亥七月十三日

(本文書ハ五八六号文書ト同一文書ナルベシ)

617 『正本在蒲生』

覚

蒲生衆八人

右者、石火矢うち見合を以可被申渡候、勿論石ひや船
ニ可被乗候、但三原大藏殿・伊東早馬介殿久見崎へ被

罷居候間、相談可有候、以上、

『正保四年』
亥七月廿二日

新納加賀守判
(忠清)

川上左将監印
(久國)

嶋津大膳正印
(久憲)

蒲生

嘍衆中

618 『正本在蒲生』

覚

一一夜ノ之番之人数一度ノに可被書記事、

一人居遠嶋崎・洲崎などへハ木屋をも可被懸事、

一人数不足之所者もよりの奉行を以相談可被立渡事、

一横目衆廻候内ニ可有其心得事、

一遠所より人数被寄候へて不叶所者、人数可被申渡候、

左候而此方江其段早々可承候事、

一獵船ハ晝ハ沖見得候所迄ハ不能口能、船影不見得所迄

ハかけ出儀者かたく法度可被申付事、

一自然所ニより氣任之外城有之候ハ、即無用捨此方へ

可被申越事、

以上

『正保四年丁亥』

八月七日

『川上』

因幡守『久國』

『島津』

弾正大弼『久慶』

(本文書ハ「旧記雜録追録」一六一六二号文書ト同一文書ナルベシ)

『加治木新納仲右エ門呈狀』

一正保四年夏長崎江黒船参候故、此 御方様より茂久見

崎迄御人数被差越候、一番備大筒頭東郷肥前守殿・伊

集院長右衛門殿・上井勘兵衛殿・新納仲左衛門、二番

備弓頭平田大監物殿・上原小十郎殿・相良土佐守殿・

東郷長左衛門殿、三番備新納加賀守殿・川上左近将監

殿、四番備嶋津大膳太輔殿にて候、一組ニ付士衆多人

数被召附候、尤其節人数備之書付所持仕候、其節仲左

衛門廿老人之御賦為被仰付由候事、

大筒

東郷肥前守
『重方』

伊集院右衛門

工

川内調右衛門尉

四本五左衛門尉

日高新左衛門尉

宮原覺右衛門尉

湯田平兵衛

原田盛助

指宿盛左衛門尉

堀之内勘左衛門尉

大脇言兵衛

田中兵右衛門尉

滿尾典左衛門尉

染野萬兵衛

有馬大藏助

中原猪右衛門尉

七番

梶原宇右衛門尉

西源藏

黒木神左衛門尉

橋口崎右衛門尉

摺木太郎兵衛

中野右衛門兵衛

濱田采女正

江藤為左衛門尉

赤垣右左衛門尉

山口八左衛門尉

堀之内次右衛門尉

上村源六左衛門尉

大筒

新納仲左衛門尉『忠雄』

上井勘兵衛

弓頭

平田大監物『家乘』

上原小十郎

中頭助右衛門尉

田中勘解由

長瀬襄助

宮永傳右衛門尉

酒匂半八

向井采女正

松下千左衛門尉

向井甚左衛門尉

家村源之允

高原源左衛門尉

肥後少右衛門尉

古川左近將

石塚城之助

深見左右衛門尉

市來權右衛門尉

高瀨織部佑

寺師三〇助

川越隠岐守

養田權右衛門尉

十島弥左衛門尉

東郷六兵衛

鬼塚平左衛門尉

岡村久左衛門尉

二之方三左衛門尉

四位刑部左衛門尉

佐多七兵衛

牧瀨新助

山口弥左衛門尉

久永吉兵衛

徳尾藤左衛門尉

弓頭

相良土佐守

東郷長左衛門尉『重尚』

有川了右衛門尉

宮原符野介

大脇守兵衛

大田治左衛門尉

井畔覺右衛門尉

津曲長右衛門尉

新納加賀守「忠港」

川上左近將監「久國」

四

嶋津大膳太輔「久憲」

久留万左衛門尉

間世田七左衛門尉

豊善坊

有川主計助

三

有川新兵衛	本田弥十郎	本田甚右衛門尉	橋口次兵衛	田中平次郎	指宿助左衛門尉	三原大藏介	吉村甚兵衛	川南吉次郎	松田七左衛門尉	荻野半三郎	山本内匠将	本田半兵衛 <small>〔親記〕</small>	田中八左衛門尉	浦川内藏丞	肥後与五郎	法元宇左衛門尉 <small>〔靈經〕</small>	伊東早馬助	有馬猪兵衛	阿多大炊助	川上作藏	本田喜左衛門尉	関左近	緒方源八	原田正左衛門尉	東郷左近兵衛	税所助九郎	緒方源藤
相良九左衛門尉	長野大藏助	長野大藏助	脇岡伊兵衛	西方新九郎	上村八右衛門尉	長里村右衛門尉	大山右馬助	緒方内記	藤井兵右衛門尉	淺野彦右衛門尉	原田傳左衛門尉	桑幡新左衛門尉	本渡与次右衛門尉	神川五後右衛門尉	桑幡治部	鎌田囚獄助	瀬口兵右衛門尉	鬼塚慶左衛門尉	西牟田隠岐助	緒方源八	原田正左衛門尉	関左近	緒方源八	原田正左衛門尉	東郷左近兵衛	税所助九郎	緒方源藤
有川新兵衛	本田弥十郎	本田甚右衛門尉	橋口次兵衛	田中平次郎	指宿助左衛門尉	三原大藏介	吉村甚兵衛	川南吉次郎	松田七左衛門尉	荻野半三郎	山本内匠将	本田半兵衛 <small>〔親記〕</small>	田中八左衛門尉	浦川内藏丞	肥後与五郎	法元宇左衛門尉 <small>〔靈經〕</small>	伊東早馬助	有馬猪兵衛	阿多大炊助	川上作藏	本田喜左衛門尉	関左近	緒方源八	原田正左衛門尉	東郷左近兵衛	税所助九郎	緒方源藤
相良九左衛門尉	長野大藏助	長野大藏助	脇岡伊兵衛	西方新九郎	上村八右衛門尉	長里村右衛門尉	大山右馬助	緒方内記	藤井兵右衛門尉	淺野彦右衛門尉	原田傳左衛門尉	桑幡新左衛門尉	本渡与次右衛門尉	神川五後右衛門尉	桑幡治部	鎌田囚獄助	瀬口兵右衛門尉	鬼塚慶左衛門尉	西牟田隠岐助	緒方源八	原田正左衛門尉	関左近	緒方源八	原田正左衛門尉	東郷左近兵衛	税所助九郎	緒方源藤
有川新兵衛	本田弥十郎	本田甚右衛門尉	橋口次兵衛	田中平次郎	指宿助左衛門尉	三原大藏介	吉村甚兵衛	川南吉次郎	松田七左衛門尉	荻野半三郎	山本内匠将	本田半兵衛 <small>〔親記〕</small>	田中八左衛門尉	浦川内藏丞	肥後与五郎	法元宇左衛門尉 <small>〔靈經〕</small>	伊東早馬助	有馬猪兵衛	阿多大炊助	川上作藏	本田喜左衛門尉	関左近	緒方源八	原田正左衛門尉	東郷左近兵衛	税所助九郎	緒方源藤

桑幡八郎兵衛

西牟田助右衛門尉

高橋与次郎

須子田吉左衛門尉

成合民部左衛門尉

園田善右衛門尉

成合兵太

川崎寛助

池田九右衛門尉

谷山少作

岩本孫兵衛

伊地知休弥

常吉源太

常学

本田二郎五郎

根占休兵衛

左藤惣右衛門尉

藤井清左衛門尉

久松左次兵衛

鬼塚良右衛門尉

若松弥五右衛門尉

玄俊

相良志摩守

(本文書「旧記雜錄追録」一五二号文書ト同一文書ナルシ)

井上筑後守殿御口上

一 丙 上様御機嫌御能被成 御座候由、節々御左右被聞召、御大慶之段御同前ニ被思召候事、

一 八重山嶋御番手之儀、江戸江筑後守殿より被仰上候、左様成御禮之通御慇懃被思召由候事、

一 おらんだ跡舟参候ハ、可被尋究候、おらんだ事ハ

権現様御代に参候而申上候者、南蠻人宗躰を廣め、終ニ日本を取可申との心底ニ候由申候、于今不相替由被仰候事、

一 唐之兵亂も未治ス、前王之末類共方々江多御座候に付、

(同志)とし軍ニ罷成、近年可治様ニ無之由、唐人共申由候、

北京・南京・福州などへたつた人取候、夏へたつた

人人の弓よハミ候故、唐人致合戦度存候得共、兵具無之故不罷成由、今度参たる唐人為申通被仰候、今度唐之兵具被召寄候而御覽候得者、用ニ可立物ニ而無之候、彼道具ニ而者中々合戦成間敷由御物語候事、

一 御領分之浦々被為御覽、甌嶋江御渡海、(天カ)炎矢之時分御

大儀之至ニ候、湊之様子細々(絵)會圖ヲ以被仰越候、具被

御覽届候、何之湊も自然之時綱はり場など荒波ニて可難成やうに被及御覽候哉、御尤之御念遣ニ而候、被聞召置由被仰候事、

一 長崎口之(伊王)いわり・かうやき邊江黒舟参候時之儀者、先

三郎左衛門尉殿・権八郎・筑後守殿よりいかにも輕き使一人充、通事兩人被差加、小船にて被遣様子可被聞

召候、其時訴詔に参たる由申候者、早々黒舟之使者何も陸江上り候而、南蠻より之意趣申上候へ、被聞召候而早速江戸江可被仰上候、若陸江不上候ハ、此方より

被出向候而者被聞召間敷候間、左様ニ相心得候得と可

被仰聞候、此上にては陸江不上候ハ、早々帰帆可仕

通被仰含、曾而御かまひ有間敷由被仰候事、

一 綱用意之儀者入間敷由、公方様被成御意候、御年寄

衆者左様之用意仕候而もすたらさる儀候間、まゝに可被成由候、長崎江も少々御用意共候由、御物語候事、

一 先年土佐江黒舟参候ニ付、可懸留由被仰付、質人ヲ一人取置、綱を被張候処、質人を捨舟ヲかけ出し候、其

時ハ綱もぎれ候而不懸留由、御咄被成候事、

一 近年南部へ黒舟参候条、留置候様ニと被仰付候故、質を拾人被取置候処、質十人相捨舟をかけ出し候、惣而南蠻人者捨質などもあて置候由、御物語候事、

一 去年長崎江参候黒舟も湊内江懸引なしニ御入被成筈ニ而無之候へ共、其時分筑後守殿江戸江御座候故、無御存知候、去年之被成様者、先湊江舟をよひ入被成候而より後ニ、楫・石火矢等をおろし候へとの下知之由候、就其彼方より存候者、先年南蠻人七拾人被打果候、此度も左様成手立にてもや候はんたと存候哉、舟道具も不相渡、一人も陸江不上候、御奉行衆よりの御使黒舟江被遣候時も、使者相煩之由申候而、對面もなく被成にくき次第に成立候様に被聞召候由、御物語被成候事、

一 先年於長崎南蠻人七拾人御成敗被成候而、舟を御焼候事者殊外巨細候、

権現様御時より日本之あたに可成ものハ此宗躰之由被仰置候、 怠徳院様御代にも其分ニ候、就中當 公方様日本之魔ニ而候、次第にあたをなすへきと被及 御

覽候処、 公方様御病中ニ天草・嶋原ニ而起一揆候、其脇かりうた二艘参候時、向後日本江御入被成間敷候間早々帰候へと被 仰出、日本之なけ銀之荷物を乗せ候而御帰し候処、其次年一艘参候、背御下知候之間御成敗被成候、早竟銀主共南蠻人をたまし候て呼寄せ候 へと被仰候事、

一 使者舟などを伐果可被成理にて者無之候、いかにも氣遣無之様ニ可被仰出由候通、御物語被成候事、

一 去年隣國より舟数人数を被寄せ候儀も、自最前吳國舟を可被召果との御儀定ニ而ハ無之候、長崎湊内ノ警固迄ニ候、若彼方より仕出シ日本之御ひけに可成程之子細共候へハ、 上様之儀者不及申、天下あらん限者其難きへましく候条、うか／＼と取かけ、若越度儀者深々笑止ニ候間、其時者人数可入候故被召寄たる由、御物語被成候事、

一 去年南蠻舟使者之意趣者、ほろとかるの王位いすはんやより國を被取候、其時分ほろとかるの王年少ニ候ヲ取立、盛人候而より右之ほろとかるヲ四年前に取返し

候、其祝言として色々捧進物ヲ日本江御礼申上候、右進物之外ニほろとかるの王位着用之鎧のうつし一領進上申候儀者、権現様被成爲申入筋ニ而候間、公方様御爲に右之本鎧を着用候而一命を捨御奉公可申上候、其驗ニ差上候由申候事、

一 右之意趣 上様被 聞召上候而御返事、ほろとかる取返し候祝言を日本江可申上子細ハ有間敷事ニ思召候、又ほろとかるの王一命を捨日本江御奉公可仕与申儀、是も一万里を隔吳國より左様之手筈成間敷候、又

公方様御爲に可成儀ニ而も無之候、併宗門を廣め間敷候由、神文などニ而申上候者御用捨も候間、御馳走も可有之候得共、左様之儀者一言も不申上候、但今度左様之首尾も可有之哉之由御尋候へ共、使者として何分と難申上候、帰國仕候て國王可申間由、使者御返事ニ申上候、就者使者江被仰聞候様子ハ、黒舟之儀日本江無御入儀ニ候處、宗門を廣め間敷との宛も不申、又此度参候而も役に不立申分無御合点候間、皆々可被打果儀ニ候へ共、使者舟之儀ニ候、又去年しやかたたらへ寄

おらんたを頼、舟こしらへ仕たる由、ありのまゝニ申上候、此两条ニ付而命を被助候間、早々可致帰帆之旨被 仰合候て、右進物何も被相返帰帆仕候、筑後守殿より者難被仰儀ニ候得共、御心得入儀ニ候間、御物語之由候、此段者御隱蜜之様ニ被仰候、三郎左衛門尉殿・権八郎殿よりハ曾而不被仰候事、

一 右之舟出船之刻、石火矢・小鉄炮などはなし、氣任仕候ハ、則可被打果由被 仰聞候故、左様成如在曾而不仕候由被仰候事、

一 不儀之子細共仕候時者見計を以可被仰付之由、御奉行カ写ニ相見得候、自然石火矢打かけ候ハ、見計に可仕候哉と得御意候得者、一万里石火矢打ニハ参間鋪候、為訴詔参候、縦五百艘・千艘参候而、岡之頭などへ石火矢を打かけ候共、日本之御ひけニハ成間敷候、又殊外造作入舟之由候間、舟敷可進國ニ而者無之由脱カ、御物語被成候事、

一日々下ニ日本人程ぬぎ能ものハ無之由、南蛮人申由候、然時者幾度も舵之手立を可申与御咄被成候事、

620の2

一御國江黒舟参候ハ、高力撰津守殿・日根織部殿江被仰合、早速其所江可被差越由被仰候事、

(慶安元年) 六月廿三日

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二二四の1号文書ト同一文書ナルベシ)

馬場(利重)三郎左衛門尉殿御口上

一兩 上様御機嫌御能被成(ハ)御座候通、節々御左右被聞召、御大慶之段御同前に思召候、長崎何ぞ無相替儀候由被仰候事、

一御領内南方之諸浦御見舞、其上甕嶋迄御渡海被成被入御念之段、御大儀ニ候、就其湊之様子細々(総)会圖を以被仰越候、若黒舟参候ハん刻、湊口廣く荒波之故、つななど御はらせ候事可難成様子ニ被及 御覧候ニ付、御念遣候由御尤ニ候、左様成湊ハ可被成やう無御座候、被聞召置之由被仰候事、

一若吳國舟参候ハん刻、万事 御奉書之趣を被相守可被仰付候、訴詔御座候通申上候、御國本より御取次ニ不罷成候、早々長崎江参候而可申上由、何時も被仰聞尤

620の3

候、其上ニ而も長崎江者参ましきなと申上候、於其儀早々帰帆可仕由被仰付、御かまひなき様ニ可被成由被仰候事、

一吳國人水取ニおり可申なと申候由、如何可仕哉と得御意候へハ、其時之やうす兼而御差圖難成由被仰候事、一惣而吳國舟之あたりにうかくと浦之者共寄付候而、とらハれざるやうに被入御念可被仰付置之儀肝要ニ候、かやうの儀共難被仰事ニ候得共、為御心得被仰之由候事、

(慶安元年) 六月廿二日

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二二四の2号文書ト同一文書ナルベシ)

山崎(正徳)権八郎殿御口上

一兩 上様御機嫌御能被成 御座候、御左右節々被聞召、御大慶之由御同前ニ思召候、長崎之儀相替儀無御座候由被仰候事、

一今度御領内浦々御見廻被成、炎天之時分御大儀之至候、湊之様子会圖ニ而被仰越候、具被御覧届候、吳國舟之

儀何時も被任御奉書旨ニ御尤候事、

一 諸湊荒波ニ而津口廣ク候、御念遣之由被仰越候、左様之湊ハ可被成様御座有間敷候、定自筑後守殿細々可被仰達候、万事御心得可入越候、弥々互可被仰合候、右御意趣具ニ被聞召置之由候事、

一 水を取せ候ても苦間敷候哉、事破れ候而ハ可為笑止与被仰候事、

慶安元年

六月廿三日

御使

平田狩野介(宗弘)

同

川上因幡守(久國)

(本文書ハ「旧記雜録追録」一二二四の3号文書ト同一文書ナルベシ)

621 正保四年丁亥、南蠻之黒船式艘肥前長崎へ来着、因茲從

江戸松平隠岐守殿・井上筑後守殿御下向、此時 光久公御在江戸付而、江戸詰之御家老嶋津圖書久通・新納右衛門久詮以使札、久加・相良權兵衛致同心、早速長崎へ罷渡、上使御滞在中彼地へ相詰御用等可承之旨、光久公上意之由被申越之、右使札、同正保四年丁亥七月廿七日

鹿兒府到着、則御請申上、同八月二日鹿兒府之宅打立、

同四日至于長崎、同五日松平隠岐守殿・同河内守殿・松平美作守殿御旅宿へ祇候、光久公御意趣之旨申達之、則御三所共ニ久加へ被成御逢候、且隠岐守殿任御差圖、井上筑後守殿・馬場三郎左衛門殿・山崎權八郎殿・日根織部佑殿・高力撰津守殿御旅宿へ罷出、是又 光久公御意趣申達之、各久加へ被成御逢、御叮嚀被仰下之、然而同六日南蠻船式艘共ニ被追出之、同午尅解纜出帆矣、依之同十二日隠岐守殿陸地ヲ如小倉御帰國、久加茂可致帰國之旨被仰聞付而、同日解纜、同十五日鹿兒府帰宿矣、此時役人長井主水利典扈從也、

622 急度令申候、仍鹿兒嶋御家老衆より長岡式部少輔殿へ御

文箱被遣候、就夫遠竹大炊頭殿・鈴木主馬首殿被差越候、賦銀之儀此方へ者無御座候条、如御方遣申候、高李左衛門殿より山才右衛門殿へ為被申越由候条、往来五日□之(鹿力)賦銀可被遣候、若又彼使者鹿へ参上ニ而候ハ、帰宅之刻賦等可被遣と存候、先以御急用之儀候条、則刻相渡候

様ニ御談合尤存候、恐惶謹言、

七月廿九日

山田主計助(有真)

野村(直綱)一郎右衛門殿

伊藤老岐入道殿
人々御中

623の1

寫

一物頭 一地頭衆 一兵具奉行

一軍役奉行 一兵道役者 一普請奉行

一船奉行 一御使番 一賦兵糧渡手

一石火矢射手 一弓之射手大矢射手 一金瘡醫者

一本道醫者 一筆者

向田表御下知之諸所

一士九拾六人 水引衆中 一同百貳拾人「イナシ」 高城衆中

一同百四拾人 隈之城衆中 一同卅六人 百次衆中

一同百六拾人 清敷衆中 一同三拾貳人 中郷衆中

一同三百貳拾人内四十人當分京泊にて地頭之同心 大口衆中

一同貳拾五人 高江衆中 一同貳拾五人 山田衆中

合人数九百四人

八月五日「イ」

623の2

覺

給地惣高三拾九萬三千百八拾壹石但琉球高除

三人軍役ニシテ壹萬千四百九拾五人

貳人半役ニシテ九千八百三拾人

内高三十萬六千五百貳拾八石 鹿兒嶋

三人軍役ニシテ九千九拾六人

貳人半軍役ニシテ七千六百六拾三人

623の3

覺

合人数壹萬千五百六拾貳人 諸外城

内知行持衆八千貳百貳拾八人

一ヶ所衆三千百拾九人

寺社家貳百拾五

合人数千貳百八拾三人

知行持衆千貳百四人

一ヶ所衆百四拾三人

寺社家三拾六

惣合卷萬式千八百四拾五人

出水衆 高七千六百卅四人
衆中千四百四拾四人

高四千八拾三石
主從百貳拾貳人
山田民部少輔殿

阿久根衆 高四百八拾九石
衆中百卅四人

高九百七拾九石式斗八舛九合
主從廿九人
渋谷四郎左衛門殿

水引衆 高千三百八拾老石
衆中百七人

高五百三拾斛
主從十八人
相良權兵衛尉殿

「覺イ」

一 四拾人程
筑前守殿付衆 高城衆中

一 拾人程
相良柰之助殿付衆 限之城衆中

一 十人程
諏訪左右衛門殿付衆 中郷衆中

一 十人程
猿渡大炊介殿付衆 水引衆中

一 五人程
高江衆中

右之人數衆、筑前守殿長崎より御出船三日前ニ御帰被成候与覚申候、以上、

八月五日

芦谷喜左衛門

覺 阿多

一 一夜ノ番の人数一度ノ可被書記事、

一 人数遠嶋崎・洲崎などへ小屋をも可被懸事、

一 人数不足之所ハもよりの奉行ノ以相談可被立渡事、

一 横目衆廻シ候内ニ可有心得事、

一 遠所より人数被寄候へて不叶所ハ人数可被申渡候、

一 左候而此方へ其段早ニ可承候事、

一 獵船ハ昼ハ沖見渡候所迄ハ不及口能、船影不見所迄ハ

被遣出儀ハ堅法度可被申付事、

一 自然所ノニより氣任之外城有之候ハ、即無用捨可

被申越候事、

以上

「川上」

「島津」

八月七日

「久國」

「久慶」

(本文書ハ「旧記雜録追録」一六二号文書ト同一文書ナルベシ)

624の2

猶々、被召置候人数名書之内、主取ハ何かし殿と可
被記候、勿論何方へ為被参通可被書分候、此状見届
被成候て次第ニ可被次渡候、以上、
八月十二日
〔高奉行也〕
鎌田大炊助
政慶

郡山 清敷 山田 百次 隈之城 中郷
水引 高江 高城 阿久根 高尾野 出水 大口

右諸所

右廻文大口へ次渡申候、十四日未ノ刻

御唼衆中

624の3

覺

此廻状、瀬之浦より此方へ被遣候、御方御承之様子ハ事
濟候ハんすれとも、所次ニて参候儀ニ候間持せ申候、為
御納得候、以上、

八月十四日

高尾野印

出水

御唼衆中

625

一書申候、今月三日長崎政所依 仰渡、俄ニ浦々張番被

仰付申渡候処、早速各被為越、殊ニ行儀能御調候由追々

申来肝要存候、然者先夜前北郷佐州從長崎被為帰、長崎
御奉行も皆々本國之様ニ御帰之由候、其上黒船も打續北
東風吹候間、程遠可致帰帆与功者之船頭共皆々申候条、
番被為引、各早々可被為帰候、為其如此ニ候、恐々謹言、

八月十六日

川因幡守 久國(花押)
嶋 弾正 久慶(花押)

市来 串木野 京泊 西方

阿久根 瀬之浦

夜番衆中

626の1

(本文書へ「旧記雜録追録」二一六四号文書ト同一文書ナルベシ)

寛明日記云、慶安己丑二年四月八日、松平伊豆守信綱・
阿部豊後守忠秋兩人連署ノ手紙ヲ以、西國大名在江戸ノ
面々へ被觸テ云、御用ノ儀有之間家来一人宛豊後守宅マ
テ可被差越ト云々、依之皆参候ス、被仰渡テ曰、耶蘇宗
門ノ輩於日本商仕度旨、兼々御訴訟仕候、當夏長崎へ着

岸仕事可有之、子細ニヨリ船人共ニ返シ被遣事可有之、又事ニヨリ乗船ノ輩一々被濱蹈儀モ可有、面々在江戸スト云共、松平阿波守差図有之ハ、家人等ヲ彼面ヘ差越候様ニト、尤在所ヘ早ク其旨可達由被仰渡、又云、

態令啓入候、然者今朝松平伊豆守様より被仰出候ハ、去十四日おらむた船長崎へ入津仕候、彼船於沖中南蛮舟ニ逢申候而、何方へ参候哉之(盲カ)尋候へハ、ごわと申國へ商賣ニ参由候、はてれん之兩人乗たる船ニて候と申候、尤こわニこそ可参候へ共、若日本を心掛参候て偽如右為儀も可有之候間、此中番手被申付候津浦無油断覚悟可仕候、万一南蛮人参候者、此中被仰渡候様ニ陸地へ上ケ不申様ニ心得可申との仰出ニ候、此旨早々可申越之由、太守様被仰出候間如此候、猶替儀於有之ハ可申入候、恐惶謹言、

【慶安二】

八月廿九日

新納(久登)右衛門判

伊勢(貞昌)兵部判

嶋津(久通)圖書判
嶋津筑前殿(久顯)
北郷佐渡殿(久加)
山田民部殿(有榮)
人々御中
右者、丑ノ十月十八日ニ有馬左近殿御廻時写真申候、

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二八七号文書ト同一文書ナルベシ)

急度申越候、仍去月十四日阿蘭陀船長崎へ入津候、彼舟於洋中南蛮船ニ逢候、はてれんも兩人為乗之由候、若日本へ来着之儀も可有之候間、如此中番手申付無油断其覚悟仕、南蛮人来候者陸地へ不上様ニ心得可申由、從江戸被仰下候条、津々浦々番衆連々之御置目堅相守、無懈怠相動候之様ニ可被申付候、南蛮船相見得候ハ、不移時刻鹿府へ可申越候、聊緩有間敷候、恐々謹言、

【慶安二】

九月十四日

山田(有榮)民部印
山民部印(北郷久加)
北佐渡印(島津久顯)
嶋筑前同

山川より秋目迄

暖衆中

626の4

〔本文書ハ「旧記雜錄追録二」二八九号文書ト同一文書ナルベシ〕

已上

一筆申入候、然者吳國船共近日追々帰帆申候間、於浦々飛乗之もの無之様ニ、又者船中之者不残置様ニ御領分堅可被申付候、自然風悪候て陸近く参候者、如例ニ番船を被付置、日和次第出船仕様尤ニ候、恐々謹言、

九月十一日

山崎権八郎判
(正信)

馬場三郎左衛門尉判
(利通)

松平薩摩守殿
(島津光久)
家老中

〔本文書ハ「旧記雜錄追録二」二八八号文書ト同一文書ナルベシ〕

右者、丑ノ十月十八日ニ有馬左近殿御廻候時写置申候、

〔慶安〕

一書申越候、仍はてれんきりしたん宗旨弥以御法度之由稠被仰出候、就其其浦々、或船にても陸地にても不審成者入来候者、計策を以搦捕、鹿兒嶋へ不移時可有披露候、舟ニ而参候者、鉄炮など打かけさるやうに、たはかり候

て船よりおろし可被搦捕事肝要候、此旨堅申入候条、浦役人衆へ可被仰付候、此状御覽為被届由、重而可預御報候、恐惶謹言、

十一月十一日

相良土佐守

頼元

二階堂阿波守

信行判

是枝喜右衛門

快温判

平田豊前守

宗直

鹿籠

御喫衆中

627の1

寛明日記云、承應癸巳二歳六月廿四日、御赦免ノ面々於上野被 仰渡云々、

一保科肥後守ニ御預ケ、松倉右近 〔重利〕「此外前後多人數略ス」

右ハ先年御預被成候ヘトモ、今度預ノ面々ニ被下之間、

於國元可召仕之旨被 仰渡、又京極丹後守ニ御預ケノ

者モ右同前、

627の2

きりしたん宗門之事累年御禁制たりといへ共、御代替ニ

付弥以断絶なく急度可相改之旨所被仰出也、自然不審成もの有之者可申出之、此以前ハ伴天連之訴人銀子貳百枚、いるまんニ同百枚雖被下之、自今以後者伴天連ニ同三百枚、いるまんニ同貳百枚、同宿其外宗旨之族者或五拾枚、或三拾枚御褒美として可被下之、若かくし置、他所よりあらわるにおいてハ、其五人組迄可行曲事者也、

承應二年十一月日

〔本文書ハ「旧記雜錄追録一」四九一号文書ト同一文書ナルベシ〕

就御代替従前々御禁止之きりしたん宗門之族、弥以可改之旨、所被成下 御符案也、到于諸士百姓以下迄謹而可相守此、旨尤御書出之褒貶之趣不可有相違之条、制札如件、

承應三年正月

〔島津光久〕
大隅守

天下御條書ニ右之御制札ニ而、御分國中諸外城迄相立也、

〔本文書ハ「旧記雜錄追録一」四九一号文書ト同一文書ナルベシ〕

又云、明曆丁酉三歳十一月七日、

一大村因幡守領分ニ兵助ト申吉利支丹、長崎ニ姉尊有之、此者ニ宗門勸メ申、然處ニ彼者奉行所エ訴人ニ出申シ、長崎ヨリ大村方へ申届、同類九十人計出申、尤大村方箆舎仕置吟味有之、但隠蜜ノ由也、

條々

一伴天連並貴理死丹宗門之族、吳國より日本渡海之沙汰近年無之間、自然相忍蜜々差渡儀可有之事、

一先年吳國江被差遣之南蛮人之子とも、はてれんに仕立

へき企有之之由、此以前渡海之はてれんとも申之条と

〔理カ〕
□漸伴天連に成へきの間、日本船をつくり、日本人之

姿をまなひ日本の詞をつかひ相渡儀可有之事、□〔印文「伊地知氏珍藏」〕

一吳國船近年四季共ニ渡海自由たるの間、浦々の儀者不

及申、在々所々ニ至迄常々油断なく心をつけ、見出し

聞出し可申出之、たとひ彼宗門たりといふ共、申出ニ

おひてハ其科をゆるし、御褒美の上、乗渡舟荷物共に

可被下之、万一隠置、後日にはてれん又ハ同船之輩等

捕、拷問之上ハ、其かくれ不可有之条、不申出あひか

628の1

『政昭自記』

猶々、便船無御座候ニ付、借船を以阿久根迄遣申

(本文書へ「旧記雑録追録」一六三八号文書ト同一文書ナルベシ)

明暦二年七月日

(島津光久)
大隅守

従前々御禁止之件天連并貴理死丹宗門之族、弥以可相改之旨、今度被成下 御符案候之間、國中之者共右御書出之趣能々相守、常々無油断心を付致見聞可申出、勿論御褒貶之通不可有相違之条、堅所申付置也、仍副札如件、

627の6

(本文書へ「旧記雑録追録」一六三七号文書ト同一文書ナルベシ)

明暦二年六月日

奉行

くす輩之義者不及沙汰、其一類又ハ其品により一在所之者迄急度可被行曲事事、
右條々、海上見渡之番之者之儀者勿論、獵船之輩其外浦之者ニ至迄、切々念を入、見出し聞出し、奉行所迄可申出之者也、仍執達如件、

候、阿久根より宿次ニ而可被差上由、阿久根御囃衆迄書状相添遣申候、右之通昨日有増書状ニ而申上候、相届可申と奉存候、以上、
態一書令啓上候、

一十月十一日之晩ニ大村丹後守殿御領内やつぎ村ニ罷居申候兵作と申者、長崎酒屋町利左衛門と申者之所ニ参候而申候ハ、大村へ能事御座候間急度可参由申候、右之利左衛門者兵作女房之弟ニ御座候、右利左衛門申候ハ、能事とハ如何様之様子にて候哉、承候而可参由申候得者、大村へ不思議成事御座候、何れも鬼利死丹宗ニ罷成候へハ往々ハ能身上ニ罷成由申候、右利左衛門申候ハ、今晚分別仕候而可参由申候事、

一利左衛門右之通町中へ申出、則刻御政所へ罷出、右之通申上候、就夫兵作并宿主引地町之又右衛門御搦取被成候而、拷問を以様子御尋被成候得者、大村之内はさ(み村・ヤカ) □ つぎ村へ鬼利死丹宗を廣め候由、細々申上候(ニ) □ 付、御政所より大村へ様子被仰遣、頭七人御搦被成、拷問を以御尋ニ而候、はさみ村・やつぎ村両所ニ廿一

竈頭分之者廿六人・男女九拾九人、十月□迄之御穿

鑿ニ而御擲取被成、箆舎被仰付候、就夫大村丹後守殿

御家老福田拾郎左衛門殿長崎御政所江被罷出、何れも

鬼利死丹ニ相究申候由被仰上候通承□候、

一 右之兵作事も鬼利死丹ニ相究、長崎へ箆舎被仰付候、

右之儀長崎御政所より大村殿へ被仰遣候而、大村江者

相知右之通ニ御座候、大村殿御領内御緩之様ニ出合申

候通承申候、右之通ニ御座候ニ付、高木作右衛門殿へ

内意申候へ、大村へ鬼利死丹之出合御座候、國元へ右

之通申遣、御使者など被進候而へ如何可有御座候哉、

薩摩之儀者海上遠御座候得者、申遣候而茂五日十日之

内ニ者長崎へ御使者被參候事不定ニ御座候間、御使者

被進候而可然候哉、様子被仰聞可被下之由申候へへ、

尤之儀候間、御國元より御使者被進候而可然由被仰候、

いまた或方よりも御使者無御座候得共、二三日之内ニ

ハ近國より之御使者可有御座由被申候間、御使者被為

越候而可然と奉存候、右之通可然様ニ被仰上可被下候、

相替儀御座候者、急度可申上候、恐惶謹言、

「明曆二年」
西十月廿一日

喜入五郎兵衛様

堀四郎左衛門様

参御足下
(本文書へ「旧記雜錄追録」二七五八号文書ト同一文書ナルベシ)

萩原三郎右衛門

判

628の2

態以飛脚申上候、

一 今月十四日之夜、大村より鬼利(死丹カ)謀叛之者兩人參候

而、爰元へ親類之者ニ相談仕候處ニ、彼親類之者則刻

御政所へ言上申上仕候ニ付、彼大村之鬼利死丹御取被

成箆舎被仰付、十五日之朝大村江被仰出候、其使者參

候而大村江茂相知申候、就其萬事御穿鑿被成候、大形

今迄子(七カ)七八十人御とらへ被成候、此後いか程人衆御座

候茂究不申候、其内頭立候者卅五六人、爰元へ今明日

中ニ被召寄せ候筈ニ而御座候、為御心得大形申上候、

相替儀御座候へ、重而可申上候、大形嶋原(之カ)四郎之様

子ニ相替儀無御座候、爰元へ様子を為被為成聞召候ニ、

御使者被差越候へ、いかゝ可有御座候哉と奉存候、恐

惶、

『明曆二年』
西十月廿一日

永吉一郎右衛門

判

嶋津圖書頭様
(久通)

拜上

628の3

御飛札令拜見候、如仰大村領ニ鬼利死丹宗門之者有之由、
當所之者申出候ニ付、留守居之衆へ申遣候へハ、家持廿
式人、其内成人之子共有之付而人数已上三拾六七人召捕
被申候、其以後者同類も出不申候、被入御念早々被仰越、
得其意候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

黒川与兵衛

酉十月廿六日

嶋津圖書様
(久通)

嶋津筑後様

御報

629の1

『本文近代之 仰渡ニ候得共、隣國騒動等之心得ニ成事故、此にのせ置
也』

写

遠國百姓共願を舍、所々ニ而寄合、手段を企廻状杯を出

629の2

し、外村之者共茂趣意ハ不弁して不得止事罷出、大勢
集、村役人之居宅又者遺恨ニ存候物共之家作并諸道具を
打損シ、吟味ニ相成候上ニ而数ヶ条之願を申立候類茂有
之候得共、公義を憚、領主々々ニ而申有、穩便ニ取鎮
候儀を専要ニいたし候故、百姓共かさつに相成、及狼藉
不法之儀共有之候、百姓を憐ニ候儀ハ勿論之事ニ候得共、
右躰徒黨を結、強訴を企、及狼藉者共を手弱取扱候而者
外場所ニ而茂見習候様ニ可成行哉、以来御料所之百姓共
騒立候ハ、最寄之領主より茂人数を出し、私領ニ而騒
立候ハ、其領主又者最寄之領主より茂人数を出し、手
強打散シ、手ニ當り候もの共ハ擲取(⑩願)之趣、理非之不
及沙汰取上不申候、他所之引合(⑩有之ハ差出、一領限ニ候ハ、其)之領主
ニ而遂吟味仕置候儀、可被相伺候、万石已(⑩下)之知行所騒
立候節茂同様ニ可被相心得候、以上、
(明和六年 二月)

(本文書ハ「旧記雜錄追録六」五五六の3号文書ト同一文書ナルベシ)

右之通、万石以上之面々江可被相觸候、万石以下ニ而茂

知行所百姓騒立候ハ、右ニ準シ最寄之領主江早々遂吟
味、申合可取計旨可被相觸候、

右之趣從 公義被仰渡候条、此段可被承置旨、地頭・

領主并御役人限通達いたし、御側方御勝手方江者写を
以可相達候、

四月 (島津久金)
左中

右、明和六年丑四月朔日赤松甚右衛門御取次を以被仰
渡候、

文
書
目
録

例言

- 一 本巻に収めた「寛永軍徴」巻十四ノ上から巻二十までの文書を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、年紀を欠くもので推定しうるものは（ ）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。
- 一 重複等により省略した文書には※印を付し収録した。

文書目録

番号	年月日	文書名	番号	年月日	文書名
一	寛永十五年	平塞録	一三		平塞録
二	正月廿六日	藤掛集書	一四の1	正月廿七日	伊地知季安記事
三の1	正月廿六日	伊地知季安記事	2		島津久賀・喜入忠政連署書状
2	正月廿六日	小川監物日記	一五		小川監物日記
3	正月廿六日	島津久賀・喜入忠政連署書状	一六	正月廿七日	伊地知季安記事
4	正月廿六日	島津久賀・喜入忠政連署書状	一七	正月廿七日	川上久国書状
5	正月廿六日	島津久賀・喜入忠政連署書状	一八	正月廿七日	某袖判条書
6	正月廿六日	島津久賀・喜入忠政連署書状	一九	正月廿七日	島津久賀・喜入忠政連署手形
7	正月廿六日	伊地知季安記事	二〇	正月廿七日	細川忠利書状
8	正月廿六日	島津久賀・喜入忠政連署書状	二一		寛明日記
9	正月廿六日	喜入忠政書状	二二		平塞録
四	正月廿六日	川上久国書状	二三の1	正月廿八日	伊地知季安記事
五	正月廿六日	川上久国書状	二四	正月廿八日	島津久賀・喜入忠政連署書状
六の1	正月廿六日	島原軍衆人数差出留	二五の1	正月廿八日	伊地知季安記事
2		伊地知季安記事	二六	正月廿八日	川上久国書状
七		時任氏日記	二七の1	正月廿八日	伊地知季安記事
八		時任氏日記	2		某覚書
九	寛永十五年	牧野成純外二名連署書状	二八	正月廿八日	川上久国覚
一〇	正月廿六日	川上久国書状	二九	正月廿八日	川上久国書状
一一	正月廿六日	川上久国書状	三〇	正月廿八日	川上久国書状
一二	正月廿六日	川上久国書状	三一	正月廿八日	川上久国書状

三二	正月廿八日	川上久国書状	四六	北郷久加世別記
三三	正月廿八日	川上久国書状	四七	某書状
三四	正月廿八日	川上久国書状	四八	川上久国・三原重庸連署書状
三五	正月廿八日	川上久国書状	四九	川上久国・(三原重庸)連署書状
三六	正月廿八日	川上久国書状	五〇	川上久国・(三原重庸)連署書状
三七	正月廿八日	川上久国書状	五一	川上久国・三原重庸連署書状
三八	正月廿八日	川上久国書状	五二	川上久国・三原重庸連署書状
三九の1	正月廿九日	川上久国・三原重庸連署書状	五三	川上久国・三原重庸連署書状
4	正月廿九日	川上久国・三原重庸連署書状	五四	川上久国・三原重庸連署書状
四〇の1	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	五五	川上久国・三原重庸連署書状
2	正月廿九日	伊地知季安記事	五六	島原出陣諸賦頭書
四一の1	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	五七の1	平塞録
2	正月廿九日	伊地知季安記事	2	伊地知季安記事
3	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	五八	有馬康純・同直純連署書状
4	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	五九	始良士森田家格護柝凶
四二の1	正月廿九日	伊地知季安記事	六〇	三原重庸・川上久国連署書状
2	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	六一	川上久国・三原重庸連署書状
3	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	六二	川上久国・三原重庸連署書状
4	正月廿九日	島津久賀・喜入忠政連署書状	六三	川上久国・三原重庸連署書状
四三		伊地知季安記事	六四	川上久国・三原重庸連署書状
四四		伊地知季安記事		
四五の1	正月廿九日	川上久国・三原重庸連署書状		
2	正月廿九日	島原出陣諸賦頭書	六五	寬明日記
3	八月七日	島津龍伯・同惟新・同忠恒連署書状	六六	平塞録

卷之十四ノ下

一〇八	二月 四日	川上久国・三原重庸連署書状	一二六	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状
一〇九	二月 四日	川上久国・三原重庸連署廻状	一二七	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状
一一〇	二月 四日	川上久国・三原重庸連署書状	一二八	二月 五日	三原重庸・川上久国連署書状
一一一	二月 四日	某書状	一二九	二月 五日	三原重庸・川上久国連署書状
一一二		平塞録	一三〇		寬明日記
一一三		伊地知季安記事	一三一		記事
一一四	二月 五日	島津久賀外二名連署書状	2	正月 下旬	山田右衛門佐矢文
一一五	二月 五日	島津久賀外二名連署書状	2		藤掛集書
二四の1	二月 五日	伊地知季安記事	一三二	二月 六日	伊地知季安記事
二五の1	二月 五日	島津久賀・喜入忠政連署書状	一三三	二月 六日	某寛書
二六の1	二月 五日	伊地知季安記事	一三四	二月 六日	国分友知書状
2	二月 五日	島津久賀外二名連署書状	一三五	二月 六日	川上久国・三原重庸連署書状
2	二月 五日	伊地知季安記事	一三六	二月 六日	川上久国・三原重庸連署書状
2	二月 五日	島津久賀外二名連署書状	一三七	二月 六日	川上久国・三原重庸連署書状
2	二月 五日	島津久賀外三名連署書状	一三八	二月 六日	川上久国・三原重庸連署書状
2	二月 五日	伊地知季安記事	一三九	二月 六日	川上久国・三原重庸連署書状
2	二月 五日	島津久賀外二名連署書状	1		平塞録
2	二月 五日	小川監物日記	2	二月 七日	記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	林勝正書状
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	伊地知季安記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	伊地知季安記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	伊地知季安記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	島津久賀外三名連署書状
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	伊地知季安記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	島津久賀外三名連署書状
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	伊地知季安記事
2	二月 五日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 七日	島津久元等寛

文書目錄

一四四	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	一六〇の1	二月 九日	伊地知季安記事
一四四の1		伊地知季安記事	2	二月 九日	島津久賀外三名連署書狀
2		小原織部取払留	一六〇の1		伊地知季安記事
3		伊地知季安記事	2	二月 九日	島津久賀外二名連署書狀
4		某覚書	3		某覚
5		伊地知季安記事	一六〇の1	二月 九日	伊地知季安記事
6		小原織部取払留	2	二月 九日	島津久賀外二名連署書狀
一四六		國分賦所日記	一六〇の1		伊地知季安記事
一四七	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	2		山口直重訴狀
一四八	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	3	二月 九日	新納久宣・仁礼頼充連署覚
一四九	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	一六四	二月 九日	國分賦所日記
一五〇	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	一六五		北郷久加世別記
一五一	二月 七日	川上久國・三原重庸連署書狀	一六六	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
一五二	二月 七日	某廻狀	一六七	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
			一六八	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
			一六九	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
			一七〇	二月 九日	三原重庸・川上久國連署書狀
一五三		平塞録	一七一	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
		伊地知季安記事	一七二	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
一五三の1		島津久賀・喜入忠政連署書狀	一七三	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
2		伊地知季安記事	一七四	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
一五三の1		某覚書	一七五	二月 九日	川上久國・三原重庸連署書狀
2		小原織部取払留			天草説書
一五六	二月 八日	川上久國・三原重庸連署覚	一七六の1	二月 十日	吉利支丹ニ立帰村々覚
一五七	二月 八日	川上久國・三原重庸連署書狀	2	二月 十日	伊地知季安記事
一五八	二月 八日	川上久國・三原重庸連署書狀			喜入忠政書狀
一五九	二月 八日	川上久國・三原重庸連署書狀			

卷之十五

一七七 3

伊地知季安記事

一七九の1

国分賦所日記

2

二月十二日

伊地知季安記事

三原重庸書狀

一七八

二月 十日

堅山郷兵衛外二名連署達

一九八

二月十二日

小原織部取払留

一七九

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

一九九の1

二月十二日

矢文

一八〇

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇〇

二月十二日

伊地知季安記事

一八一

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇〇

二月十二日

市来宗友書狀

一八二

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇一

二月十二日

川上久因・三原重庸連署書狀

一八三

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇二

二月十二日

小川監物日記

一八四

二月 十日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇三

二月十二日

薩本島原軍記

一八五の1

二月 十日

伊地知季安記事

二〇四

二月十二日

旧伝集

一八五の2

二月 十日

伊地知季安記事

二〇五

二月十二日

時任氏日記

一八六の1

二月 十一日

島津久賀外二名連署書狀

2

二月十三日

有馬陣中城ヨリ矢文

一八七

二月 十一日

伊地知季安記事

2

二月十三日

国分賦所日記

一八七

二月 十一日

小原織部取払留

二〇六

二月十三日

喜入忠政從臣聞書

一八七

二月 十一日

旧伝集

二〇七

二月十三日

堀興延日記

一八八

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署達

二〇八

二月十三日

川上久因・三原重庸連署廻狀

一八九

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署書狀

二〇九

二月十三日

小川監物日記

一九〇

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署書狀

二一〇

二月十三日

薩本島原軍記

一九一

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署書狀

二一一

二月十三日

御恩徳記

一九二

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署書狀

二一二

二月十三日

御功恩之次第大概

一九三

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署廻狀

二一三

二月十三日

伊地知季安記事

一九四

二月 十一日

川上久因・三原重庸連署覚

二一四の1

二月十三日

小原織部取払留

一九五

二月 十一日

三原重庸・川上久因連署書狀

2

二月十三日

旧伝集

一九六

二月 十一日

天草説書

二一五

二月十三日

時任氏日記

寛永十五年

二月 十二日

切支丹ニ無之村々人数並竈教

二一六

二月十三日

時任氏日記

二六〇	二月十六日	川上久国・三原重庸連署書状	2	二月 廿日	松井興長達
二六一	二月十六日	川上久国・三原重庸連署書状	二七八		薩本島原軍記
二六二	二月十六日	某書状	二托の1		小原織部取払留
二六三	二月十六日	川上久国・三原重庸連署書状	2		伊地知季安記事
二六四		平塞録	二八〇		国分賦所日記
二六五の1		伊地知季安記事	二八一		寛明日記
2		某覚書	二八二		平塞録
二六六		小原織部取払留	二八三		天草説書
二六七		緒方主殿覚書	二六四の1		伊地知季安記事
1		記事	2		小原織部取払留
二六八	二月十八日	原城ヨリ矢文	二八五		伊地知季安記事
二六八	二月十八日	島津久元外三名連署書状	二八六		伊地知季安記事
二六九	二月十八日	島津久元外三名連署書状	二八七		谷口氏書留
二七〇		平塞録	二八八	二月廿一日	川上久国書状
二七〇の1		伊地知季安記事	二八九	二月廿一日	島津久元・川上久国連署書状
2		某覚書	二九〇		寛明日記
二七〇の1		伊地知季安記事	二九一		平塞録
2		小原織部取払留	二九二		天草説書
3		伊地知季安記事	二九三		藤掛集書
二七三	二月十九日	矢文	二九四		味方手負・死人之覚
二七四	二月十九日	坂本権右衛門・伊地知喜左衛門連署届書	二五五の1		小川監物日記
二七五		谷口氏書留	2	二月廿二日	伊地知季安記事
二七六	二月 廿日	島津久元外二名連署書状	二九六		市来宗友覚書
二七七		平塞録	二九七		松下源五左衛門書留
1		記事	二九八		小原織部取払留
					某覚

文書目錄

三〇九	二九九	寬明日記	三二一		
三〇〇	三〇〇	平塞錄	三二二		
1	1	記事	2		
2	2	二月廿三日 戸田氏鉄・松平信綱連署寬	三二三		
3	3	記事	1		
1	1	二月廿五日 評定所案文留	2		
2	2	伊地知季安記事	1		二月廿五日 島津久元外三名連署書狀
3	3	某寬書	2		二月廿五日 島津久元外三名連署書狀
4	4	小原織部取払留	三二四		寬明日記
3	3	有馬陣立差出	三二五		平塞錄
4	4	伊地知季安記事	三二六		天草説書
三〇二	三〇二	薩本島原軍記	三二七		小原織部取払留
三〇三	三〇三	伊勢貞昌追悼文	三二七		伊地知季安記事
三〇四	三〇四	某寬書	三二七		島原軍衆人数賦
三〇五	三〇五	寬明日記	三二八の1		評定所案文帳
三〇六	三〇六	平塞錄	三二九		二月廿六日 島津久元外三名連署書狀
三〇七	三〇七	記事	2		二月廿六日 島津久元外三名連署書狀
1	1	松平信綱寬	3		評定書案文帳寬書
2	2	記事	三二〇		元寬日記
3	3	記事	三二一		天草説書
4	4	細川忠利達	三二二		藤掛集書
5	5	藤掛集書	三二三		伊地知季安記事
三〇八	三〇八	伊地知季安記事	三二四		小原織部取払留
三〇九の1	三〇九の1	小原織部取払留	三二五		松下源五左衛門書留
2	2	島津久元外三名連署書狀	三二六		伊地知季安記事
三一一	三一一		三二七		小川監物日記
3	3				

(二月)廿四日

三二八
三二九
三三〇
三三一

卷之十七

三三二
三三三

17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

田代衆中島原立之寛
坂元清長書留

塵葉

谷口氏書留

寛明日記

平塞録

記事

佐田長三郎外三名連署差出

記事

国友式右衛門差出

記事

松山次郎太夫差出

記事

某覚書

記事

二月廿七日

立花宗茂・細川忠利連署書状

記事

菟図書助差出

佐分利加左衛門差出

後藤市十郎差出

菅村藤兵衛差出

竹内八兵衛差出

有吉舎人佐差出

軍功衆人名書上
記事

米田与七郎差出

記事

益田才助差出

津川四郎右衛門差出

河喜多正重差出

山田新九郎差出

山田新九郎差出

早水一郎兵衛差出

記事

都甲太兵衛差出

後藤権右衛門差出

池永源太夫差出

記事

田中左兵衛差出

記事

平野治部左衛門差出

記事

長岡右馬助差出

記事

三淵内匠差出

記事

志水新之丞差出

記事

42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18

寛永十五年

二月廿九日

三月十二日

四月九日

四月九日

四月廿四日

二月廿九日

二月廿九日

三月

三月廿六日

二月廿九日

七月廿一日

二月廿九日

三月十二日

四月九日

四月九日

四月廿四日

二月廿九日

二月廿九日

三月

三月廿六日

二月廿九日

七月廿一日

4	3	2	1	三三七	5	4	3	2	1	三三六	3	2	1	三三五	3	2	1	三三四	46	45	44	43
---	---	---	---	-----	---	---	---	---	---	-----	---	---	---	-----	---	---	---	-----	----	----	----	----

卷之十八ノ上

二月廿七日

横井牛右衛門差出 記事	43	細川忠利・同光利連署書状 記事	44	寛明日記 記事	3	討死手負覚 記事	2	元寛日記 記事	1	味方手負死人覚 記事	2	天草説書 記事	3	落城時寄手討取首数覚 記事	1	藤掛集書 記事	4	原之城落去手負死人覚 記事	2	落城時討取敵首数覚 記事	4
----------------	----	--------------------	----	------------	---	-------------	---	------------	---	---------------	---	------------	---	------------------	---	------------	---	------------------	---	-----------------	---

5	6	7	三三八	三三九	1	2	3	4	5	6	7	8	三四〇	三四一	三四の1	2	三四三	三四四	三四五	三四六	三四七	三四八
---	---	---	-----	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	-----	------	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----

卷之十八ノ下

記事	5	水野家手筈合面々覚 記事	6	浦の波 記事	7	平塞録 記事	1	陣佐左衛門差出 記事	2	一揆討取首数覚 味方討死手負覚 記事	3	細川家中討死名付 記事	4	田代衆中島原立之覚 旧伝集	5	加久藤衆中手負注文 伊地知季安記事	6	新納忠清差出 市来宗友差出 市来家昌差出	7	伊地知重政差出 三原大蔵太夫差出 仁礼景頼差出	8	寛永十五年 二月廿八日
----	---	-----------------	---	-----------	---	-----------	---	---------------	---	--------------------------	---	----------------	---	------------------	---	----------------------	---	----------------------------	---	-------------------------------	---	----------------

三四九	二月廿八日	宮原景為実見証文	三七二	二月廿八日	高尾野衆合戦太刀打・手負・首注文
三五〇	二月廿九日	田中國質実見証文	三七三	二月廿八日	高尾野衆中失衆注文
三五二	二月廿九日	三原重英差出	三七四	二月廿九日	加久藤衆等合戦太刀打・手負・首注文
三五三		是枝快温等討取首注文	三七五	二月廿八日	伊尻祐永実見証文
三五四	二月廿九日	新納忠頼差出	三七六	二月廿九日	蒲生衆合戦太刀打・手負・首注文
三五五	二月廿九日	田中國質差出	三七七	二月廿九日	出水衆合戦太刀打・手負注文
三五五	二月廿九日	宮原与左衛門外二名連署実見証文	三七七	二月廿九日	片山重次書状
三五六	二月廿九日	宮原与左衛門・村尾重候連署実見証文	三七八	二月廿九日	伊地知重政差出
三五七	二月廿九日	有馬九郎左衛門尉差出	三七八の1	二月廿九日	伊地知重政差出
三五八	二月廿九日	村尾重候差出	2	二月廿九日	加久藤衆等合戦太刀打・手負・首注文
三五九	二月廿九日	日高正盛外三名連署差出	3		伊地知季安記事
三六〇	二月廿九日	福崎新兵衛・村尾重候連署実見証文	三八〇		喜入忠政從臣聞書
三六一	二月廿九日	大重久永差出	三八〇の1	二月廿八日	有馬原之城高名究帳
三六二	二月廿八日	平田宗宣差出	2		伊地知季安記事
三六三	二月廿八日	川田弥左衛門・木佐貫半右衛門連署差出	3	元禄十三年	有馬原之城高名究帳奥書
三六四		上原尚辰差出	4		伊地知季安記事
三六五	二月廿八日	木村時重差出	5		某覚書
三六六	二月廿九日	寺師与左衛門差出	6		伊地知季安記事
三六七	二月廿九日	有村掃部助差出	7		有馬原之城高名究帳
三六八	二月廿九日	福崎寛兵衛尉・坂元四郎兵衛尉連署差出	8		伊地知季安記事
三六九	寛永十五年(三月)朔日	村尾重候実見証文	三六の1	宝永二年	村尾重候覚書
三七〇	三月 朔日	市来宗友等合戦太刀打・手負・首注文	2	寛永十五年	鍋島勝宗実見証文
三七一		大口衆合戦太刀打・手負・首注文	3	明暦元年	鍋島勝宗書状
			三八三	二月廿八日	松下氏書留
			三八四	三月十九日	松下氏書留

文書目錄

三八五	三月十一日	松下源五左衛門書留	四五の1	三月 朔日	藤井助四郎実見証文
三八六		御厚恩記	2	三月 朔日	有馬純兵実見証文
三八七	二月廿八日	柏木主馬首実見証文	3	三月 朔日	友野七郎実見証文
三八八		福昌寺戦亡帳	4		伊地知季安記事
三八九		松下氏書留	四〇六		小原織部取弘留
三九〇		伊地知季安記事	四七の1	三月 朔日	友野七郎実見証文
三九一		田中国明・市来家年調書	2		藤井助四郎系伝
三九二		諸家大概記	四〇八		平塞録
三九三		伊地知季安記事	四〇九	三月 二日	伊地知重政実見証文
※ 四の1		新納忠清差出	四一〇	三月 二日	村尾重候実見証文
※ 2		市来宗友差出	四一一	三月 二日	村尾重候実見証文
※ 3		市来家昌差出	四一二	三月 二日	村尾重候実見証文
4		伊地知季安記事	四一三		小原織部取弘留
※ 三九五	二月廿九日	伊地知重政差出	四一四		伊地知季安記事
三九六		山元甚左衛門訴状	四一五	三月 二日	伊地知重政実見証文
三九七	寛永十五年 二月廿九日	桐野慶右衛門尉外五名連署実見証文	四一六		北郷久加世別記
三九八		小原織部取弘留	四一七		堀與延自記
三九九		旧伝集	四一八	三月 二日	高橋銀右衛門実見証文
四〇〇	二月廿九日	是枝快温実見証文	四一九		寛明日記
四〇一	二月廿九日	山本左近允外五名連署実見証文	四二〇		藤掛集書
卷之十九ノ上					
四〇二		平塞録	四二二	寛永十五年 三月 三日	小河景信書状
四〇三		藤掛集書	四二三		天草覚書
四〇四	寛永十五年 三月 一日	鍋島茂利書状	四二四		緒方主殿覚書
			四二五		北郷久加世別記

四二六	寬明日記	四四五	松下源五左衛門書留
四二七	天草覺書	四四六	小原織部取弘留
四二八	平塞錄	四四七	北郷久加世別記
	記事	四四八	谷口氏書留
2	寬永十五年	四四九	寬明日記
3	三月 四日	四五〇	元寬日記
4	有吉英貴・松井興長連署達	四五一	藤掛集書
四二九	記事	四五二	諸將有馬着陣覺書
四三〇	三月 四日	四五三	旗馬印覺書
	松井興長・有吉英貴連署廻状	四五四	天草覺書
1	伊地知季安記事	四五五	伊地知季安記事
2	阿久根古帳	四五六	清敷丸乘合人数覺
	某手形	四五七	天草覺書
四三一	某手形	四五八	伊地知季安記事
四三二	小原織部取弘留	四五九	薩本島原軍記
四三三	合戦手負注文	四六〇	天草覺書
四三四	天草覺書	四六一	伊地知季安記事
四三五	市来宗友与力衆合戦手負注文	四六二	小川監物日記
四三六	三月 五日		
四三七	市来宗友与力衆人数覺		
四三八	松下源五左衛門書留		
四三九	小原織部取弘留		
四四〇	北郷久加世別記		
四四一	長瀬新兵衛実見証文		
四四二	三月 五日		
四四三	天草覺書		
四四四	伊地知季安記事		
四四二	老岐舎人佑・池袋九左衛門連		
四四三	署送状		
四四四	北郷久加世別記		
四四四	天草覺書		

三月 八日

四四一	伊地知季安記事	四六四	伊地知季安記事
四四二	清敷丸乘合人数覺	四六五	伊地知季安記事
四四三	天草覺書	四六六	小川監物日記
四四四	伊地知季安記事	四六七	薩本島原軍記
四四五	薩本島原軍記	四六八	薩本島原軍記
四四六	天草覺書		
四四七	伊地知季安記事		
四四八	小川監物日記		
四四九	伊地知季安記事		
四五〇	天草覺書		
四五二	伊地知季安記事		
四五三	清敷丸乘合人数覺		
四五四	天草覺書		
四五五	伊地知季安記事		
四五六	薩本島原軍記		
四五七	天草覺書		
四五八	伊地知季安記事		
四五九	薩本島原軍記		
四六〇	天草覺書		
四六一	伊地知季安記事		
四六二	小川監物日記		
四六三	伊地知季安記事		
四六四	天草覺書		
四六五	伊地知季安記事		
四六六	小川監物日記		
四六七	薩本島原軍記		
四六八	薩本島原軍記		
四六八	北郷久加世別記		

文書目錄

四六九	小川監物日記	四八九	伊地知季安記事
四七〇	蒲生軍衆差出	四九〇	寬永十五年 五月十八日 某寬
四七一	北郷久加世別記		
四七二	谷口氏書留		
四七三	薩本島原軍記	四九一	卷之十九ノ下 肥前島原天草軍立之事
四七四	伊地知季安記事	四九二	寬永十五年 五月廿七日 島津久慶書狀
四七五	有川喜左衛門覺書	四九三	伊地知季安記事
四七六	北郷久加世別記	四九四	盛香集
四七七	史官雜抄	四九五	寬永十五年 六月 朔日 伊地知重政書狀
四七八	緒方主殿覺書	四九六	寬永十五年 六月十三日 新納忠清書狀
四七九	北郷久加世別記	四九七	六月廿三日 島原立之時相付參人數覺書
	記事	四九八	天草覺書
2	記事	四九九	天草覺書
3	記事	五〇〇	七月廿六日 島津久元・伊勢貞昌連署書狀
四八〇	谷口氏書留	五〇一	寬永十五年 十月十五日 島津久慶外六名連署掟書
四八一	山田右衛門佐口達	五〇二	小川監物日記
四八二	寬永十五年 三月廿九日	五〇三	寬永十五年 十月十五日 川上久因外四名連署掟書
四八三	四月 朔日 島津久慶・鎌田政統連署書狀	五〇四	十一月十二日 堀久左衛門尉有馬先船來書付
四八四	伊地知季安記事	五〇五	寬明日記
四八五	寬明日記	五〇六	元寬日記
2	記事	五〇七	寬明日記
四八六	伊達秀宗覺	五〇八	元寬日記
四八七	小川監物日記	五〇九	某寬書(皆吉長右衛門妻子召捕)
四八八	伊地知季安記事	五一〇	小川監物日記
	伊地知季安記事	五二の1	某記事

2 寛永十六年 正月廿九日 八日町五人与日記
 五二二 野村元綱書状
 五二三 加久藤衆中町在郷人数改目録
 五二四 赤川次兵衛尉・瀬戸山種左衛門尉連署覚
 五二五 上田三左衛門尉達
 五二六 伊勢貞長書状
 五二七 柳元宗真覚
 五二八 市来宗友覚
 五二九 喜入忠政書状
 五三〇 島津光久条書
 五三一 寛永十六年 七月 朔日 寛永十六年 七月 朔日
 五三二 寛永十六年 七月 五日 寛永十六年 七月 五日
 3 寛永十六年 七月 五日 松平信綱外二名連署条書
 五二二 島津光久禁制奥書
 五二三 小川監物日記
 五二四 伊勢貞昌書状
 五二五 島津久慶外四名連署書状
 五二六 幕府条書
 五二七 寛永十七年 六月 三日 寛明日記
 五二八 小川監物日記
 五二九 島津光久書状
 五三〇 島津久慶書状
 五三一 人衆賦帳
 五三二 寛永十七年 七月 九日 米良頼貞・菱刈重信連署書状

五三三 相良清兵衛口事日記
 五三四 諸家大概
 五三五 天草寛書
 五三六 北郷久加世別記
 卷之二十
 五三七 寛永十八年 九月廿八日 島津久賀外五名連署差出
 五三八 伊地知季安記事
 五三九 寛永十八年 九月廿八日 島津久賀外五名連署差出
 五四〇 九月廿八日 山田有栄覚
 五四一 使者船取仕立入目
 五四二 統長崎鑑
 五四三 寛永十九年 正月廿三日 島津久賀外三名連署覚
 五四四 寛永十九年十二月 三日 天草江移百姓人数並馬道具帳
 五四五 御役元基
 1 記事
 2 寛永十九年十二月十三日 島津光久条書
 3 寛永十九年十二月十三日 島津氏老臣条書
 五四六 寛永 廿年 三月 朔日 島津久元外二名連署達
 五四七 寛永 廿年 七月 廿日 北郷久加達
 五四八 寛永 廿年十一月 七日 川上久国外三名連署廻状
 五四九 寛永 廿年 九月 八日 伴天連入満陳述書写
 五五〇 十月廿一日 中條市兵衛差出
 五五一 正月 廿日 松下源五左衛門尉差出
 2 寛永廿一年 正月廿一日 谷山民部左衛門尉外八名連署
 1 添状

五八四	七月 九日	山田有真書狀	2	七月 二日	島津久慶外二名連署添狀
五八五	七月 十日	山田有真書狀	六〇七	七月 三日	弟子丸宗方書狀
五八六	七月十三日	某覚	六〇七	七月 三日	豊田重時・坂元源太左衛門連署書狀
五八七	七月十三日	山田有真廻狀	六〇七の1	七月 三日	豊田重時・坂元源太左衛門連署添狀
五八八	七月十三日	山田有真書狀	2	七月 三日	平田監物・鎌田大炊助連署書狀
五八九	七月廿二日	島津久憲外二名連署書狀	六〇九	七月 三日	寺師宗俊外二名連署書狀
五九〇	七月十四日	島津久慶外二名連署廻狀	六一〇	七月 三日	東郷重方・川越重昌連署書狀
五九一	七月 朔日	高所達	六一一	七月 三日	東郷重方・川越重昌連署廻狀
五九二	七月 朔日	喜入吉兵衛・相良頼員連署書狀	六三の1	七月 三日	川越重昌・東郷重方連署添狀
五九三	七月 朔日	相良頼員・喜入吉兵衛連署書狀	2	七月 三日	島津久慶外三名連署廻狀
五九四	七月 朔日	出水軍衆人数賦	六一三	七月 三日	島津久慶外二名連署書狀
五九五	七月 二日	某達	六一四	七月 七日	谷山民部左衛門尉・野村新兵衛連署書狀
五九六	七月 二日	某書狀	六一五	七月 八日	谷口助右衛門外四名連署差出
五九七	七月 朔日	相良頼員・喜入吉兵衛連署廻狀	六一六	七月 十三日	某覚
五九八	七月 朔日	島津久慶外二名連署廻狀	六一七	七月廿二日	島津久憲外二名連署書狀
五九九	七月 朔日	相良頼元廻狀	六一八	八月 七日	島津久慶・川上久因連署書狀
六〇〇	七月 朔日	東郷重方・川越重昌連署廻狀	六九の1		加治木新納氏由緒拔書
六〇一	七月 二日	島津久慶外三名連署廻狀	2		異国船警固陣立賦
六〇二	七月 二日	東郷重方・川越重昌連署書狀	六〇の1 (慶安元年)	六月廿三日	井上政重口上書
六〇三	七月 二日	山田有榮書狀	2 (慶安元年)	六月廿二日	馬場利重口上書
六〇四	七月 二日	宍岐秀晴書狀	3 慶安元年	六月廿三日	山崎正信口上書
六〇五の1	七月 二日	東郷重方・川越重昌連署廻狀	六二一		某覚書
六〇五の2	七月 二日	東郷重方・川越重昌連署添狀	六二二	七月廿九日	山田有真書狀
六〇六の1	七月 二日	島津久慶外三名連署廻狀	六二三	八月 五日	芦谷喜左衛門覚書
			1		向田表諸所軍役人数賦

文書目録

六元の1 (明和六年) 二月	3	明曆二年 十月廿一日	幕府触書
	2	明曆二年 十月廿一日	永吉一郎右衛門書状
	1	明曆二年 十月廿一日	萩原三郎右衛門書状
六二八	6	明曆二年 七月 日	鎌田正昭自記
	5	明曆二年 六月 日	切支丹禁制
	4		記事
	3	承応三年 正月	島津光久切支丹禁制札
	2	承応二年十一月 日	切支丹禁制
	1		記事
六二七	5	十一月十一日	平田宗直外三名連署書状
	4	九月十一日	馬場利重・山崎正信連署書状
	3	九月十四日	島津久頼外二名連署廻状
	2	八月廿九日	島津久通外二名連署書状
	1		記事
六二六	3	八月十四日	高尾野暖衆中覚
六二五	2	八月十二日	鎌田政慶添状
	1	八月 五日	長崎出船人数覚書
六二四の1	4	八月 七日	島津久慶・川上久因連署覚
	3	八月十六日	島津久慶・川上久因連署廻状
	2		寛明日記
	1		記事

2 明和六年 四月

島津久金達

秩父家牒 全

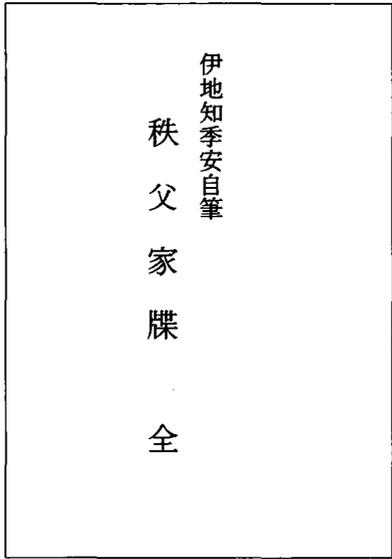
凡例

- 一 伊地知季安による補筆と思われるものは「」（墨書）、「」（朱書）で囲んだ。
- 一 伊地知季安による補筆のうち特に長文に及ぶものは、番号を付し関連箇所文末に移して注記した。
- 一 原文の磨滅虫損は東京大学史料編纂所蔵本にて校訂した。

(表紙)

伊地知季安自筆

秩父家牒 全



秩父家牒序

秩父氏本姓伊地知氏也、貞享四年丁卯四月
伊地知重直始爲秩父氏、按舊譜圖其先出自
桓武帝七世孫秩父將恒、而歷其裔畠山重能・
重光・季光至季親、季親後號尊西生時季、
時季更姓伊地知生兼季、兼季生季清、季清
生季隨、從夫世世嫡傳而爲秩父畠山氏之宗
室、蓋其記誤焉、本府先大史田中國明・市

祖先功勳渺乎遠矣、孫葉彊戾綿連不絕終至淑嗣、嗚呼、念茲在茲吉凶榮辱惟人所召、

來家年・肥後盛香議之、因一紙舊章遂以尊西爲鼻祖、且曰、季隨父季清兼季之三子而二兄有族、何以季隨後爲嫡流、季平覽以爲然、重能及子重忠固武州大姓而其譜見大系圖、獨不見有重光者孫葉相連、考諸青史、元久二年乙丑重忠被殺、賜其采邑於其夫人北條氏、北條氏即時政女也、以其邑再嫁足利義純、義純竟更姓畠山焉、重忠族類於是微弱、尊西又其餘孽、或有之其審不可得聞也、嘗聞宋狄青辭爲狄、仁傑之後明朱某自斷不爲朱文公之裔、議者以爲作譜者所宜鑒視也、人各有祖妄附會於華胄者矯情欺人耳、鄙陋淺劣甚矣、抑秩父氏仕于公室、自康永三年季隨來奔至文化五年季保自盡、凡十九世四百七十年、嗚呼、祖先英傑與家創基、孫葉彊戾籍沒殄滅念茲在茲惟人所召、方今同宗數十族咸降在早隸家聲淪塞無甚、於此時余懼久之、而玉石或混昭穆無序、故閱簡

牘考其真偽、而成拾錄然不能廣察、於四方
國史有禁不得聽無識而論之、豈得無代匠之
傷也哉、

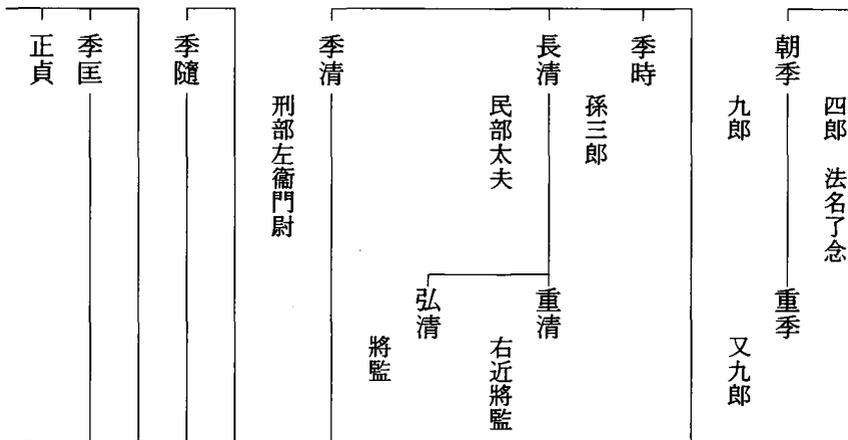
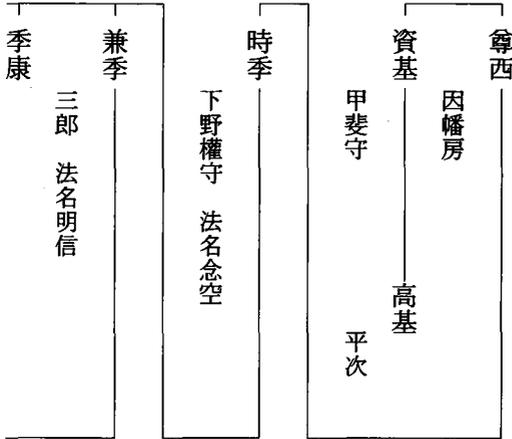
文化一十三年丙子秋九月乙丑

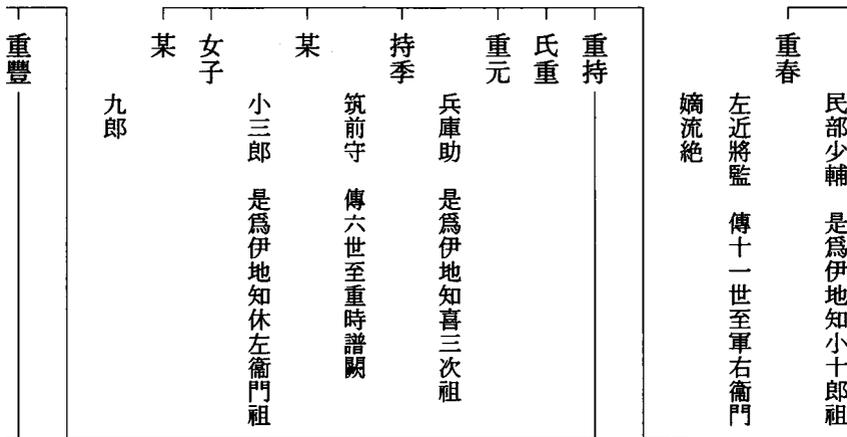
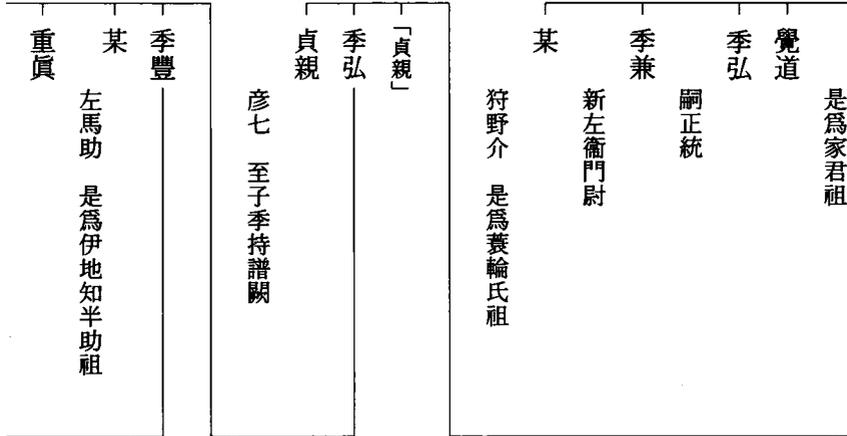
(印文「季平之章」)

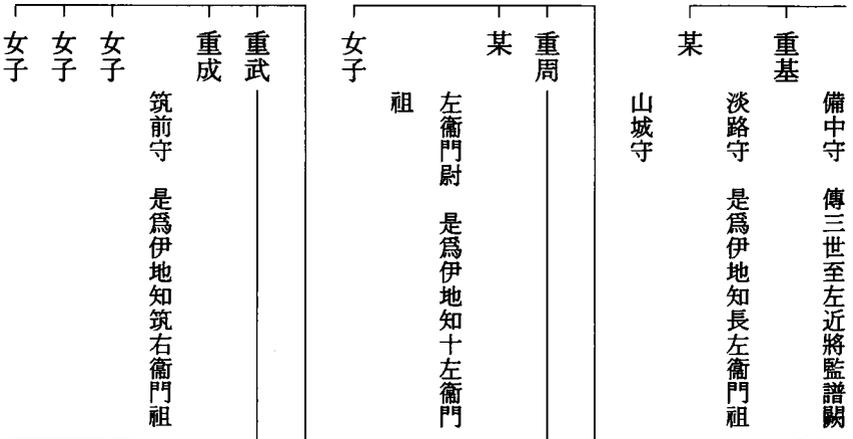
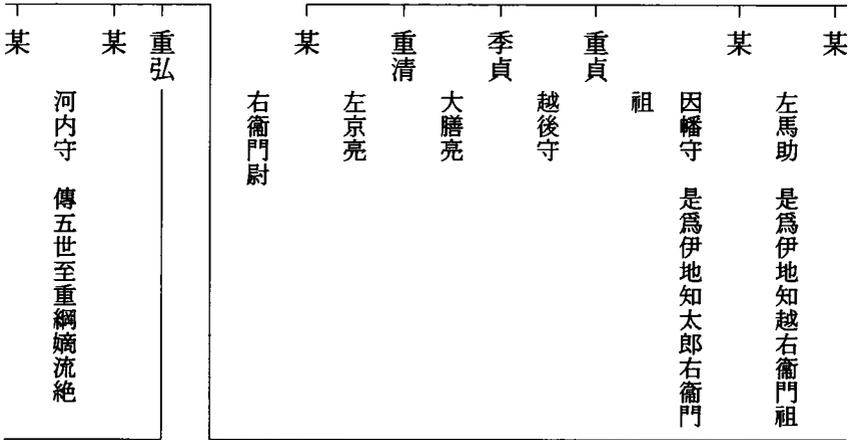
薩藩伊地知季平謹書

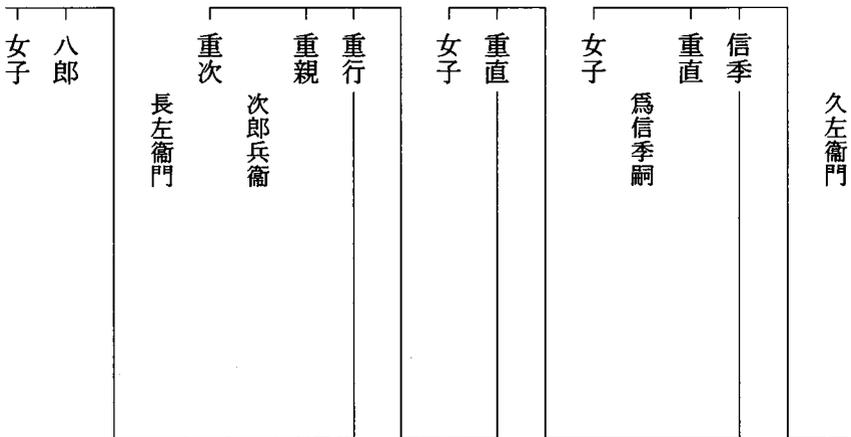
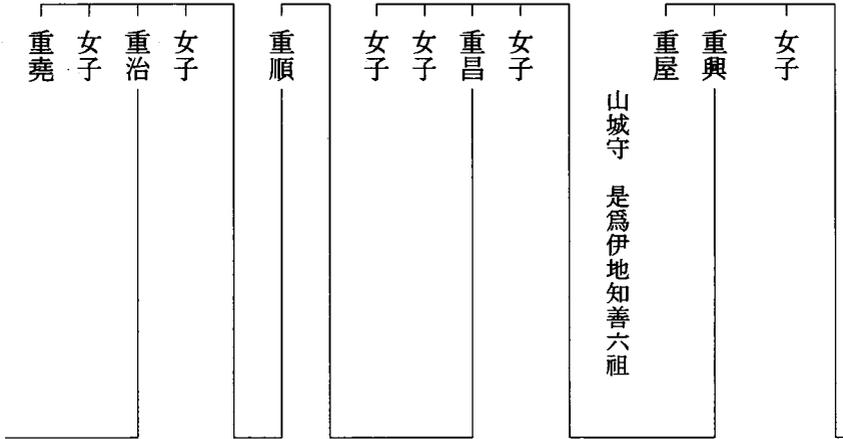


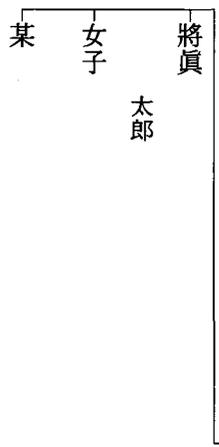
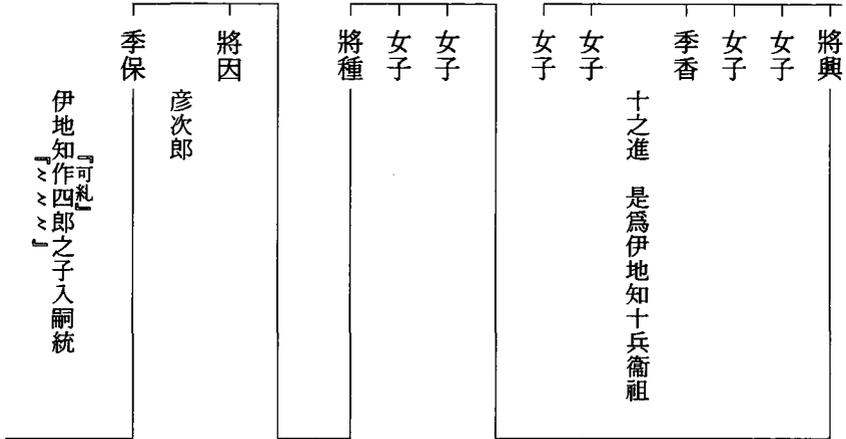
糸圖











秩父家牒

季隨八郎彈正少弼

其先越前牧伯聽令於鎌倉幕府、五世祖曰尊西、承久亂後北條泰時置右筆六人司書檄參謀議、尊西及弟資基充其數、尊西生時季、時季邑在越前伊地知、始姓伊地知云地名今造井筒、語相近故蓋轉用之、井筒山永嚴寺其城墟也、生兼季、兼季生三子、長季時、次長清、次季清小字八郎、自尊西至長清世世領右筆職、北條隨時・北條英時爲九州探題之日、季清至探題府助守備、道儀公等其列也、季清生季隨、季隨述職於京師

六波羅、又給事於探題府、道鑑公等其列

也、後醍醐帝建武中、中將新田義貞與大

納言足利尊氏構兵、天下大亂、朝為股肱夕

為仇敵、世路艱險難乎、免此世季隨座叛逆

為尊氏囚矣、初尊氏敗亡於筑前而還兵也、

道鑑公忠於其軍而勝於湊川、定京師兵革稍

脩尊氏使、公歸藩、且曰、君之功莫大賞賜

從請、公曰、方今世向治平我無他望、然

而我於季隨有同宿衛之舊好請寬彼囚、尊氏

曰、我思擬君請邑信義之厚堪感賞遂赦之、

季隨以為、遁刑戮一依、公之恩德、故欲仕

而報之幣于北野天神廟、晝夜七日而發京師、

從者福崎能村號源左、中馬通泰號三郎等六十餘

人、僧鑄阿亦從鑄岳公創建安養院、康永三年

甲申六月、來本州見、公、公大悅賜邑與

刀名大十、待以賓禮、觀應二年辛卯九月、

齡岳公代、道鑑公師於筑前、季隨及公子資

忠等從、廿八日屬探題一色範忠與官之軍大戰

按公辭等、作一

色右馬權頭範光

此云範忠恐非

主稅名能廣

於金隈、吾師敗績、齡岳公以下傷敵兵逼

而冒、吾師季隨名告島津又三郎而戰死、本

州別府海濱有浮屍流、披鎧有十字章、按之、

季隨因葬之、法名光輝都仁庵主、建西昭寺

祀之、初軍蹙季隨謂福崎能廣主稅曰、事急我請

誑敵汝可護、公以間出故、主稅從、公如博

多隱林香庵尼寺也、棹扁舟而得還、公以免危

難、擢主稅能村親從士、建林香庵於本府、

季隨娶細川氏生五子、側室生一子、長季匡、

次正貞為、道鑑公之義兒、食日州田島邑蚤

死六年十、次覺道又蚤死九年十、次季弘、次季

兼仕、義天公、應永廿年癸巳十二月、公

如隅州菱刈季兼留守、伊集院賴久窺、公之

亡而攻府城、季兼及衆守戰而死於毘沙門堂、

次庶子狩野介凡兼子之行隨舊譜圖、雖若妾出

姓養輪氏、細川氏造細川清以八月廿二日掩

粧凡書以其月日者、法名廣山妙通大姉、

考夫世俗之結交附於勢利久矣、廉頗田文

鑄疑瓊訛、諸君問之、安養院示余其實幸甚

齡岳公新東福寺更名安養院、使鑄阿為院主、蓋為正平中之事

(1)

(2)

之門、猶然張耳陳餘爲匹夫也、爲刎頸之交及其爭勢也、忽飄爲寇讎、況數千歲之下干戈之朝也、人情反復無常可知獨、

道鑑公之於季隨也不然矣、不甘官爵郡國之封償一夫於囹圄之中、於此時季隨爲島津氏臣未可知也、唯救舊友之難耳、實是列世士大夫所缺望也、公既信義脫急、

季隨又感激歸從君臣遭遇之際、任狹慷慨之氣象可見、今人往往多季隨之代死未論其感義無極、嚮既存此等忠節也、使季隨無金限之役其功業未可測也、

(伊地知李安筆)

「頭」

(1) 季彬按、尊氏賜季匡及本田熊鬼丸・伊集院又五郎・中條彌六・

池上彌四郎御教書竝作九月八日、然據又賜 齡岳公御教書及公室系圖等皆作九月二十八日、以是考之、公親被疵季隨死之則知二十八日矣、明年閏二月 道鑑公所注進之狀疑當誤作九月八日若二十八日、是以蓋尊氏右筆於 公被疵若黨等戰死之事爲二十八日、於其賜死者子爲八日只因循抵悟爾、

(2) 季彬聖榮自記を按云、北郷殿三男喝食をおとこになし申され、

元久之御養子として鶴戸丸と申太刀遣ると云々、又云、高木左馬介殿方之二男を御養子候而次郎三郎と名を付、御紋を給候上永吉十二町預と云々、又安國寺申状云、畠山親として男と成すへし、此時ハ斟酌も入ましとて、十三にて御元服有、

然者左折之烏帽子源氏之恒例に任せ、御直垂を召され名乗を忠久と申と云々、又云、佐多彌三郎殿・樺山六郎惟音殿初猷三猷の御酌云々、其上兩人ハ元久の御養子ニ而御渡候、然者頼申候、上様の御子にて御座候と云々、又云、伊地知方之事云々、殊之外御賞翫にて候、仍子を一人御養子ニ而候云々、又北郷氏記載云、四代知久既に釋氏の門に入り喝食たりしを遷化の身となり、元久公の御養育にて元服の儀式あり、知久と名を賜ひ鶴戸丸と云宝刀を給候云々、又佐多譜云、三世氏義次男弥三郎元忠或忠元と見ゆ、因是按之、舊記にて御養子と云詞は烏帽子子の意にて、即今の所謂御直元服の事に非や、左候て貞久公の御養子ハ正貞と云ひ、元久公の御養子は元忠或は忠元と云ひ、久豊公の御養子は直に其御幼名次郎三郎と名乗の類、皆重忠 忠久公の御元服に加冠し諱の忠字を奉たる遺風にて、御諱の字を賜て正貞或は元忠と名乗に非や、夫とて島津号を許されし例未見及ハす、請博古の人に論

し給へ、他邦の□書多く故禮家に傳ふ、必援證あるべし、

季匡彦七 左近藏人
剃髮號了忍

正平七年辛卯二年即觀應五月廿二日、道鑑公

賜本州本郡田上村之半代官職、公告金限

之敗於尊氏、觀應三年壬辰四月廿五日、尊

〔二十五日、或作
二十九日、恐非
是五字訛耳〕

氏感將士之誠懇行賞、各有差、季匡又賜廣

多、季隨死、文和二年癸巳六月六日、

道鑑公賜季隨遺邑豐後井田郷柴比名之平地

頭代官職、季匡生貞親、貞親生季持皆號、
彦七

正平十三年四月
廿八日、齡岳
公彌訪社御寄進
鹿兒島伊敷村國
引田一町、是伊
地知彦七遺領也、

季持戰死於下大隅牛河内、後絶、

舊譜季匡傳曰、無道而不許繼家故病狂而

亡命、本府先大史河野通古議附此傳於貞

親、季平按、季隨沒後尊氏賜書於季匡、

則道鑑公告故於京師也、謂季隨子季匡

必矣、又從賜諸遺邑、然則季匡當此時不

廢於父與君明矣、其晚年病狂不可知、然

非始不繼家者、故登載之及至貞親無書可

徵、蓋有無承守之德、季持牛河内之役、
又不知在何年而與何人、

季弘生一九彦六 民部
少輔、剃髮號良宗

文和三年甲午三月廿六日、道鑑公使季弘

守衛木牟禮城公室始都之地
屬本州出水郡、賜西方田八段有

餘、康曆二年庚申正月廿七日、伊地知左近

將監滅於越州季弘同宗在越前
而屬足利義滿者、今川貞世爲九州

探題請 齡岳公之來會、前年殺小貳冬資於

會故群臣難之、公不聽遂行、季弘從焉、

既踵於館前、其氣甚惡矣、門監禁從者、本

田氏親持 公之佩刀而從季弘繼焉、門監不

許、季弘・氏親曰、君臨會臣盍從、寡君去

則君曹可自專矣、入而侍席意氣洪然、貞世

畏之、不敢發燕罷、而 公就旅舍、遂絶貞

世而歸議者曰、初 公軍金限、季隨代其死、

貞世之會季弘脫其難、是據義重命輕之家訓

宜乎、伊地知氏之有後於本州、至德元年甲

〔本文書ノ〕

〔比是年道鑑公實

在于此城、請再

考〕

(1)

〔彦六改稱民部、

而於永和中既書
民部、至德遺書
彦六〔得無疑哉〕
然古書多如此者
亦不可泥焉〔

子十一月十六日、公行犬追物季弘從射之、
初 道鑒公置 定山於碓山知本州、置

齡岳公於本府知隅州、季弘屬 齡岳公、

定山公生久哲君、久哲君與子守久不善、明

德四年癸酉、守久攻久哲君於本州河邊、

恕翁公說理曉之守久解去、於是君告讓

得佛公之甲冑與小十文字之刀〔各公室於

恕翁公、公辭不當君彊之、故使季弘及山

田忠能〔號右京亮〕往而受、此君使阿蘇谷周防守。

石塚大和守贈此於河邊畔、周防介與刀忠能

受之、大和守授甲冑季弘接了之、季弘以四

月十四日卒、法名月峰名一庵主、娶伊東氏

生四男、長季豐、次左馬助、次重眞、次重

春、居本州出水、應永廿四年丁酉九月十一

日戰死於河邊〔平田重宗妻伊地知氏女、

其名闕、疑季弘女、伊東氏以

七月廿五日掩粧、法名同悅妙闍大姉〔一作悅、

窓妙闍

〔伊地知季安筆〕

〔頭〕(1)季彬按舊記、會地作博多、而又無年、近得室町記讀之云、今

川了俊以永和元年乙卯八月二十六日、誅小貳冬資於肥後陳中、
又按、重英先生查讀書云、是月了俊封 齡岳公於筑前聞事于
京師、乃二十八日贈 公書致其意、今季彬併考諸聖樂說則知
當此年事、而 公亦會于肥後也耳、

季豐〔又太郎、縫殿介、剃髮、號久安、亦作久阿〕

仕 恕翁公 義天公 大岳公爲國老、應永

六年己卯、恕翁公養久哲君之子生黑丸爲

義子、國中失望者多矣、十二月 公以不服

生黑丸討肥後氏・石井氏・伊地知氏於下大

隅、明年國中又謀不軌生黑丸、遂辭而還本

族、九年壬午、恕翁公使 義天公鎮日州

穆佐壓伊東氏、公族世臣輔祐之、季豐及弟

從而遷穆佐、十二月十三日、義天公賜書曰、

下大隅之邑若有没入則賜季豐〔併携之壬辰三月

季豐取邑而、十八年辛卯八月六日、 恕翁公

訖、伊集院賴久陽稱遺命、以吾兒初犬爲嗣

而臨葬、 義天公聽計走喪追初犬而繼大統、

(1)

季豐及弟從而入府、廿八日山田久興號式部少輔

盟於季豐曰、終身懷忠信事于 義天公設渝

此盟靈神罰之、十九年壬辰三月廿四日、

公以季豐舊邑之故割下大隅賜之、八月季豐

築下城居此季豐素巧築城之規矩、故請、而經營者前後四十八所云、十二月

十三日、公賜書曰、凡封內季豐祖先之邑、

若爲官取則復賜季豐、初守久子久世在碓山、

殺舊臣取其邑諸與高城氏、故臣庶憂感之、

公使季豐於碓山結信親於久世、久世雖外通信

公、而私黨於伊集院賴久計 公之不利、竟

請賴久遷于川邊、廿三年丙申十二月、久世

來府賀除夕、公留之、廿四年丁酉正月十

三日、公殺之、其臣立其子、合從賴久而

叛於川邊、酒匂紀伊久世據松尾城請以城降、

九月 公起川邊之役入兵於松尾、季豐從之、

賴久救川邊與吾師戰、吾師敗績、伊地知重

春等戰死、賴久又絕松尾之糧道、城中糧盡

大困、公聽之以疾不、賂地行成吾師得還有、

廿八年三月十五

日、大寺元幸、

柏原好實久阿、

鹿屋玄兼・樺山

季宗・平田重宗

進判、伊作勝久

江神文、

(2) (3)

伊地知對馬者助紀伊戊城及自川邊至、同僚

謀曰、公捨地行成實爲吾儕計生也救死、蓋拔

賴久之谷山城報此恩德衆、左祖對馬及酒匂

氏・北原氏爲先鋒盛氣督戰矣、賴久恐怖獻

地而降、三十一年甲辰、公大舉擊伊東氏、

季豐・平田重宗・鹿屋玄兼・大寺元幸以國

老職從軍、伊東安藝據加江田吾師縮攻焉、

曾井・清武共伊東之兵救加江田、季豐・玄

兼曰、援軍新盛請嚴備以待之、公曰、渠

雖衆備數耳、汝等勿憚、試觀吾敗之、既而

討走之城又降、永亨七年庚子六月九日、

大岳公賜下大隅、且曰、新有闕邑則賜汝、

十年戊午、公修福昌寺之損壞而許群臣資

給、季豐獻馬代錢一貫文、文安五年戊辰十

一月七日、公附祭田於谷山權現社、季豐・

村田經房・柏原永好奉行之舊譜曰、季豐定家法

田氏婚、二曰、本田氏來賀新正、則接見於階謝之以家

臣、三曰、本田氏共行、則可先行於渠矣、渠吾先世之

臣族故如斯云、案、季豐宿世元老頗通、以正月十

九日不祿、年八十八、法名金象龍公庵主、

季豐娶入來院重門號彈正忠女生四男、妾生二男

一女、長重持、次氏重繼從祖父正貞之後、

次兵庫助、次持季、文安三年丙寅三月、季

豐割下大隅海瀉邑與之、以八月七日戰死於

隅州鹿屋、次妾出小三郎母本府平門民家女、季豐與

小牟田三段竟姓小牟田傳四世至重元告嫡流復伊地知姓、次

女母隈歸菱刈氏重號民部太夫、次九郎母菱刈人日高土佐守女

季豐佩刀冒叔姓爲日高氏、入來院氏以四月

廿九日卒、法名家山妙珍太姉應永元年甲戌三月

川貞兼於日州庄内、伊地知又七戰死、三年丙子春

義天公朝探題濫川滿賴於肥前、十二月至自肥前伊地知

彦六從之、又七、至德大迫物彦六有之

〔伊地知季安筆〕

〔頭〕季彬所作宗譜、十九年十二月章之季如左、○蓋比是歲 公及

久世成乃使季豐與久世忠朝及市來家親會于碓山、謀合師伐伊

集院氏、既而 公帥師陣平等寺以殛三氏師、久世忠朝及市來

人至于宮園市來地名、伊集院賴久乃發兵、專當公帥、公使人急招

三氏、三氏師不會平等寺、於是公不利、遂班師、乃築川田。

比志島・郡山等以備之、季豐復爲之歟初、

如右請君賜評、

〔頭〕季彬按、十年戊午蓋書事成也、據義公載募緣籍可以知也、因

記余宗譜如左、十年戊午初 公命建佛殿於福昌寺、工料不辨

募諸公族大臣各令協助之、於是季豐乃獻折馬錢一貫文于本寺、

〔頭〕又按、文安元年、本田重恒據清水不臣、大岳公自將伐之、

重恒不能拒乃委城奔、稅所氏於是賜新納四郎三郎忠匡清水、

無幾忠匡辭清水邑、因又賜之本田國親、國親乃重恒之姪也、

重恒怒、文安五年、及稅所氏攻清水・姬木、公在姬木拒戰、

當此時 公之賤重恒可以知也、蓋季豐爲三章當在此等時、凡

事乘勢有如此者、謗大坂於慶□□大翁公於大天皆其勢也、所

以天下服神祖、三州歸大中公之使然也、季豐賤本田、其庶幾

焉哉、

〔四日或作八日、未知是非〕

重持又太郎 太郎左衛門尉 剃髮號久德 以五月四日 大岳公賜尺牘其楮尾才存故難解、重持建

金龍院爲祖先菩提場、以十一月十日卒、法

名却山祐久居士、娶新納氏生六男、妾生一

子、長重豐、次左馬助早世、次妾出因幡守法名 祐本、次重貞爲左馬助嗣仕爲國老、大岳

公 節山公 圓室公 蘭窓公每行犬追物、

重貞從射之、文明十六年甲辰六月、從

圓室公討島津久逸有功、明應五年丙辰二月、

公擊加治木久平號能登守、賜其邑於重貞、故遷

家於加治木、文龜四年甲子二月、公幣于

隅州八幡大神、川上忠直號筑前守將前隊、重貞

將後隊、永正六年己巳二月、重貞及男重兼

號新左衛門尉建天神廟於邑、小山田嘗與・田島久

純・本田兼親・桑波田景元・石井義忠・大

寺安勝・肝屬兼演、謀定 公室終歲之規範、

大永七年丁亥、與島津昌久號下野守黨島津實久

叛 大中公前年大翁公讓位、於大中公、五月六日、爲日

新君被誅大中公赦重貞之第三子重房嗣後、次季貞、次重清、

次右衛門尉、新納氏以二月二日卒、法名覺

岸妙了大姉、

重豐又太郎 郎左衛門尉

重豐建福壽寺、以正月十六日卒、法名月窓

明公居士、娶谷山氏生四子、妾生一子、長

重弘、次庶子河内守母盛山氏、次備中守爲新納

氏釋桂庵有應、伊地知公三男之求詩、三男疑備中守、次重基、次山

城守號伊白、谷山氏以三月十五日卒、法名玉

巖十五日或作二十五日、未知孰是、

巖妙金大姉舊譜、重豐初妻作島津成久女、以二月十日卒、年十八、法名松岩妙泉大姉、成久

譜曰、第四女歸於伊地知太郎左衛門尉重光、法名又同矣、然宗譜無重光、考諸成久衆子歲次伯仲於重豐孫重周兄弟、又一本譜、作重豐妻谷山氏初無成久女。

(伊地知季安筆)

(1)伊地知氏之居本城也、梶原氏居田上城、石井氏居垂水城、肥

後氏居高城、池袋氏居(T)城、飢肥氏居廻城、土岐氏居敷根城、

世謂之邊田七人、諸君考之、大概記按、其年代採錄可也、是

余所記憶必有誤耳、

重弘又太郎 郎左衛門尉

長亨三年己酉、圓室公賜鹿屋相原於重弘

云、以八月廿七日卒、年廿六、法名默堂久

公禪定門、娶某氏生二男一女、長重周、次

左衛門尉、某年月戰死於高城郡名不詳、次女嫁

〔頭〕
〔左二門戰死為大永三年事、季彬

於他書見之未知
果然」

梶原氏、某死以四月廿日卒、法名如芳妙忠
大姉、

「季彬、以重周死

重周又太郎
重周縫殿助

年逆量計之、則
長亨元年丁未生、永正四年丁卯九月六日、

重周與男虎兒建手貫社、六年己巳二月、建

河上大神於海瀉、重周仕於 蘭窓公 與岳

公 大翁公爲國老、九年壬申五月廿七日、

與禰寢尊重和守、重周報盟曰、君務 公

室爲取肝屬氏之鹿屋、宜爲君請指宿郡、十

一年甲戌九月十四日、 蘭窓公行犬追物、

重周從射之、菅東郷氏・祁答院氏・入來院

氏・高城氏以上是云、與岳公賜之宴、

樺山長久・北郷教久・重周・重貞接伴、大

永二年壬午八月十七日、 大翁公賜下大隅

高城、重周遷金龍院寺、於此三年癸未、新納

忠勝號近據日州志布志拔於 公、重周與吉

田美作守奉 命討之、十二月五日、忠勝迎

(1)

「或作建金藏寺、
與本文不合、請
聞其詳」
「忠勝或作忠武、
未知孰是」

(2)

戰於月野、吾師大敗、重周・美作守戰死、

重周之族新四郎死於月野梅淵等六人同死、凡喪公

軍七百三十八人、重周年三十六、法名周巖

宗觀居士、娶平田兼宗號右馬助、菅兼宗、贈重周手翰有一章、女生

二男三女、長重武、次重成、居本州吉田城

後遷領田布施高橋邑、次女嫁肥後氏食邑於、下大隅、

次女嫁善法寺隅州八幡大、神之廟令、次女嫁種子島時述

號出雲守、天文十二年、突卯爲其兄惠時見殺、平田氏以八月廿八日掩粧、

法名蘭室妙安大姉、

(伊地知季安筆)

書入

(1) 天正三年丙寅三月初、 大岳公使人如京師學移徙禮、至是

圓室公始移新殿、蓋乃命伊地知八郎重實復行此禮、重實氏世

掌此禮、蓋亦於是始也、

(2) 永正中初、 圓室公之伐肝屬兼久也、新納忠武帥兵援兼久、

而還忠武不朝有年矣、島津豐州說忠武謝罪、至是六月忠武朝

本府謁 蘭窓公謝罪也、二十二日 公賜之宴、七月十七日

公復夜賜忠武宴、重周接伴、二十三日忠武招列相宴于客邸、

重周又與 忠武・重周・大寺治部少輔、日置周防介、平田右馬助、本
田治部左五門、池袋筑前・二階堂左馬助、隈元某等是也

十四日、一瓢君亦朝本府、八月、重周宴于府邸、饗君及忠武等也、
豐州祿養孫二郎・高城珠全・池袋筑前守就其主位、一瓢君・忠武・二郎三郎・平田兼宗・梶原某就其客位。○年紀無傳據舊記載、忠治公□□當在於五年戊辰迄十二年乙亥之間、註于此、以俟再考。

重武、虎太郎丸
周防介

永正三年丙寅生、建月海寺、嘗 大翁公賜

書於重武命安樂某之所置其故不詳、享祿三年庚

寅十一月十六日、建神貴大神於新城、天文

五年丙申、取垂水、八年己亥〔三カ〕、大中

公討平田宗秀號備中守於苦辛城、屬本州、宗秀降矣、

公移營於神前、兵威新盛、重武及肝屬氏・

禰寢氏初朝於公所、先是 大翁公之季世管

內擾亂、實久專威福、四方多靡附之、重武

又與肝屬氏・禰寢氏應實久經營自家、十年

辛丑十二月廿二日、重武與男虎太郎丸修造

手貫社、十三年甲辰正月十三日、取田上

田上・垂水・高城後世、
總呼垂水 屬大隅郡

卒、年四十二、法名月海源心居士、重武初

娶祢答院氏、早世、年十七、繼娶本田親尚

號次郎
左衛門女、生二男一女、長女名虎、大永六年

丙戌二月廿日生、嫁村田經威號雅、次重興、

次重屋、享祿二年己丑九月十五日生、

(2) (伊地知季安鑑)

(1) 按養輪日記等、是年閏六月、公師于市來、十七日、取平城

直圍本城、城將新納常陸堅拒城守、八月、川上某以串木野城

降、二十九日、常陸亦遂委城而降、此行伊地知佐渡守者將衆

以從重武、重興未聞稱佐渡、蓋追書誤也、然他書亦載〔貴久記等ナリ〕此役

入來院重聰・種子島惠時・禰寢・肝屬・伊地知・蒲生・顯娃

某等率援兵會 公軍、請再考、

(2) 〔頭〕季彬按西藩野史及庄内平治記、天文十四年乙巳三月、島津忠

廣・北郷忠相憂無主於國、欲復 大中公即位會舊臣議之、十

三日、忠廣・忠相詣伊集院議之、伊地知・本田之舊臣等遂立

之、十八日、公再為太守云々、而得能通昭分註于伊地知・

本田之下曰、按、二氏 貴久公近臣也、據是按之、非伊地知・

本田共指宗子也、當此時伊地知筑前守重成事 公為親昵臣、

且伊地知美作守重常亦居伊集院、所謂近臣此乎、今無考也、

但據上文、會舊臣議之則伊地知・本田皆謂宗子、却近是矣、

重興虎太郎丸又九郎
上總介 周防介

(1) 亨祿元年戊子八月廿日生、天文廿三年甲寅、盟 大中公曰、今後遇喪亂不陷詐謀任以誠忠而敢無貳、七月朔日、公賜盟書曰、余不信讒誣當以舊臣待汝、如渝此盟上下神祇殛之、九月二日、重興建藥師佛於城中、是月 公圍祁答院氏之兵於隅州岩劍壘、重興詣軍營獻佩刀、弘治二年丙辰十一月、公討蒲生茂清號越前守、重興從軍、三年丁巳四月、茂清降、永祿二年己未夏、黨肝屬兼續號法印・彌寢重長號右近叛於 公、初兼續娶日新君女、以大姓且姻家見重來府、饗 公於私第、家老藥丸出雲接伴、從者國老伊集院忠朗戲指幕章翔鶴曰、阿主設宴盍羹、此出雲曰、如君曹再來則幸贈吾一匹狐公室世瑞故諱、而報怨、忠朗憮然立而截翔鶴頸、兼續聽之怒曰、彼截吾家之章、不異截吾首、慚愧何勝此、遂不告而去據其邑叛、重興・重長起

(2) 兵應之、兼續結親於伊東義祐國城在日州都於郡、重興又交幣、嘗贈馬義祐以書謝之、四年辛酉五月、兼續取隅州廻城廻城今稱福山、使肝屬治部戊之、六月 公攻治部、兼續救之、公子忠將備之、重興・重長助兼續、廿三日、兼續伏兵、自率輕兵襲竹原之前軍、忠將救竹原、伏發殺忠將及從者七十餘人、兼續等轉執路於恒吉而去、初公繼厄運之統、除荆棘敷治教、上下藩守其分、天文十九年、再入府城、國人號中興主、然此時和泉島津氏・東郷氏・入來院氏・菱刈氏・北原氏、各叛於其邑窺本府之虛、義祐亦爲兼續之應、故 公不敢長驅班師而畫復讎之策、永祿六年癸亥、重興修新城神貫社、九年丙寅十一月十五日、兼續死於日州志布志、子兼輔立兼續庶子號、三郎四郎、兼續廻之役殺忠將、既而悔曰、吾背 大守事起於蒼卒、自思歷歲月而請和、今也釀成深讎吾家必滅、嘗重興・重長浮小舟寇於本

「書入」
「季彬按、夫人以

永祿六年癸亥十一月卒、據是考之、重興等燒東宮之事、當編于九年丙寅之前、似不合 公衆」

(3)

【頭】
〔或為是年十一月二十日之事〕

(4)

府、燒日新君夫人之宮其宮云東、元龜二年辛未春、府兵擊海瀉、吉利忠澄號下等、重興・重長以肝屬氏・伊東氏之兵、纒三百餘艘寇於本府、公子家久・鎌田政近戍向島、賊見此直向府、伊集院善左衛門為町地頭率市人舟戰、竟中銃丸死、府兵列隊於陸而待之、重興等止發矢銃、巡向島而去、隅州帖佐地頭平田光宗聽府之戰爭、其徒五十人直趨、難海上會賊棄船待於瀧水之艮、賊追之、重興之兵馬場玄蕃下大隅新拵人先衆進、勝目與左衛門光宗之放銃中之、肝屬兵檢見崎某繼進亦斃、重興家老伊地知重隆號伊賀亦伏銃死、賊不利竟去、光宗聞捷於公、誤聽馬場玄蕃曰大山玄蕃、公曰、新拵之馬場玄蕃則是得他日、得實而歡咲、重興之兵田上助左衛門亦戰沒、助左衛門有弟曰二介、熟水軍最善射、數寇於向島、一日襲府射戰、其鏃落於武氏之居大如巨鑿云、五月四日、府兵敗於下大

〔季彬按、肝屬兵福島人伊地知彌五郎者元正是役、因改作竹友以下伊地知彌五郎等使者云々、如何〕
〔寬明公之寬當作實字、後皆倣之〕

〔季彬按、公衆、此云九月二十七日為元龜三年之日、義輪日記、作天正元年事、恐日記誤〕

隅、死者七十八人、九月廿七日、府兵襲海瀉不利、島津忠俊號五郎四郎戰死、三年壬申十二月五日、府兵擊海瀉、重興臣前田長門見殺、天正元年癸酉正月六日、肝屬兵與北鄉時久戰於住吉原日隅之境、肝屬兵敗績、肝屬竹友以下死者四百三十人、肝屬之精英始折、〔伊地知彌五郎等〕寬明公使八木昌信號越後守及寶持院僧於禰寢說重長降、重長曰、吾固痛恨為逆徒、然而歸順則賊之梟雄吾不保一日、昌信曰、君有兒盍約婚於公而堅守備、重長從之、遂質其子而降、公救重長隔海次於指宿、島津征久・島津忠長將先軍入兵於禰寢、三月、兼輔・重興怨重長之畔約、焚蹂其邑高洲、進驅與重長・征久等戰於橫尾、兼輔・重興敗走、四月、府兵取下大隅之麥、重興發兵追之、九月廿七日、公討重興屯營於早崎、〔元龜三年〕公子歲久攻重興之小瀨城、守將伊地知重矩號美出城戰、伊集院久春號源被重禿、肥後

【頭】
「三字或作太恐是」

平次郎・桑波田孫三郎・川野玄蕃戰死、城陷、重興臣福崎重純號和泉・枝元清左衛門等死者百餘人、重矩及弟重貞、子民部出奔、

伊地知重秀號勸解由左衛門尉・伊地知重康號民部少輔・伊

地知朝季號大膳・養輪重澄號舍人共屬歲久軍、

【本田與四郎親實戰死于牛根、見其譜、年月無考】

(5)

而驅馳力戰、公攻牛根城、重興・兼輔救之、對壘相拒數月、十一月、歲久・征久軍於平床、絕城與援軍之路、援軍將屯於茶園、

忠長・川上久信號上野介擊走之、二年甲戌正月、

牛根城降、守將安樂備前遁於重興、新納忠

元據牛根城鎮邊境、廿七日、公移師趨指宿、

喜入季久爲先鋒至禰寢、守國見壘、三月、

【頭】
「季彬按、擾亂記及喜入譜、為正月之事、未知孰是」

重興・兼輔以伊東氏之兵襲禰寢、拔瀆拵直

圍重長之居、季久見之發兵戰於岩戶口、賊

敗走、死者百餘人、季久之弟忠通號圖・久

續號小四郎亦戰沒、重興受兵於四方數所窘蹙、

於是 公使僧期阿淨光明寺住持誘降、重興從命剃髮、而入朝謝罪、公刪重興邑知垂水於河

【頭】

「季彬按覺兼日記、三日、伊地知鑄殿助使中馬方、

堀原方請於老中云々、然則知當

重昌、此書重興恐誤也、且比比

也重興尚在本府、悉使重昌留守下

城也」

(6)

「忠元一作忠興、大田亦作島津近

是」

田義照號河守、賜新城於征久、田上於重長、

以下城賜重興而以邑主此云一、所衆、見待肝屬兼

輔尋降、八月六日、公命重興蓄髮賜號周

防介、重興獻佩刀之貲三千錢拜之、上井覺

兼贊之、十月三日、重興使梶原備前・中馬

重好號伊賀於府請高城官署、國老以告 公曰、

重興爲亂乎誰人不知之、今許其請則人將曰、

重興族類滿朝、故不端人猶得志焉、如斯則

聊損綱紀、卿等謀以他辭之、國老教覺兼告

二使曰、未詳下大隅之地形、宜待他日命之、

四年丙子二月廿五日、公設聯句之會、重

興在其列、五年丁丑七月廿八日、公祭諏

訪社、從者大田忠元號周防介將前隊、上井覺兼

將中隊、重興將後隊凡當時幣神廟則從者別隊、

十二月、伊東義祐出奔於豐後、薩隅日三州

始平定、六年戊寅九月、豐後侯大友義鎮及

子義統侵日州、十一月、公帥師逆之、重

興・平田歲宗將偏師先行、十二日、公大

(7)

敗豐軍於耳川、八年庚辰正月元日、重興朝宮而獻坑飯獻饋此云坑飯、公賜宴酬酌三獻、而

「公臨於私宅以正月二日為例、非元日之事、是季彬所聞也」

召家臣三人隔闕賜酒隔闕行陪、臣之禮、凡元日、伊地知氏獻坑飯於大守公、而是日「明」大守公

「或作十二日」

來於伊地知氏之第、與伊地知氏更朝服此云素袍替、其禮久矣或曰大守公之伊地知氏更素袍之禮、道鑑公待季隨之遺法、至重

「越後名兼純」

順出境盡廢、二月十二日卒、年五十三、法名千山守法居士、娶禰寢重就號式部女、太輔、生一男二女、妾生一女、長女名虎千代天文十五年丙午六月十日生、嫁肝屬越後守、次重昌、次庶女母前田氏廿三年甲寅二月十六日生、嫁新納權介、次女名瑠璃甲寅四月七日生、嫁米良重春號權、禰寢氏名乾後仕于貫明公宮中、慶長十四年己酉九月八日卒於國分、法名妙尊、葬於國分、鳥越持侍明君使吏士護葬、

「伊地知季安筆」

討肝屬于廻城、肝屬乞援于伊地知、禰寢之事未見於六月、以

「頭」

重興・重長黨肝屬氏始見於四年辛酉六月、公

「頭」

前伊地知等叛公者也、先是忠平公在飢肥、義祐畏而乞和于豐州忠親、忠平公許之、丁此時省鈞寇於下大隅、大中

「頭」

公欲召忠平公於飢肥使伐省鈞、亡幾、省鈞取廻城事見于野史、據是考之、重興為省鈞所侵伐、不得已黨之可以知也、請君、可以中馬佐渡言、合考于此說、佐渡言見宗氏記錄、○又

「頭」

按、肝屬兵殺忠將及從士七十餘人、為七月十二日之事、六月二十三日、則忠將至馬立之日、是愚所見也、

「頭」

(2)季彬按投谷八幡棟札、天文二十二年八月、大檀越當主君良兼并御隠居河内守兼續、今沙彌省鈞云々、又按其古系圖、兼續、天文十三年八月二十二日、年三十四入道、法名省鈞、而良兼嗣、而兼道嗣、又按、宝滿寺鎮守八幡棟云、永祿九年七月六日、大旦那肝付河内守伴兼續・同左馬頭良兼云々、以是觀之、兼續既老傳事于良兼、良兼無男養弟兼輔為嗣明矣、非兼輔親代兼續也、但兼輔・兼道一人異名未可知耳、

「頭」

(3)季彬按、武氏家狀有石見者、居于本府武邨因為氏、伊地知氏寇於本府、馳赴海濱拒戰死之、生子五郎右工門、伊地知兵田上二之助所發箭、中五郎右工門右袂、而貫屋柱云々、

「頭」

(4)○二年辛未正月十九日、肝屬遺岸良將監等、帥水兵如隅州侵小村、小村人拒戰、取其艦一艘、將監以下二十四人死之、○五月、貫公在攝宿、二十四日、重長帥兵侵摺瀨、公師拒

之射中重長、重長被箭力戰、遂敗而還、

〔書入〕(5)天正元年七月、欲襲早崎陣、二十三日重興潛兵三千夜行、二

十四日黎明陣放火、公子家久親戰拒之、肝屬人河南安藝等

接公子、不克而遁田邊田、清左衛門亦與公子戰遂死之、重

興兵於是斬、東郷掃部助等數人乃還、但安藝或作式部左工門

尉、元年作二年、或有之未知孰是、請君、精究幸甚、

〔書入〕(6)四年丙子八月、公親將伐伊東氏、重興率家衆以從、十九日、

與攻高原城有功、二十三日、城將伊東新次郎委城而降、公

乃入城、於是列將獻大刀賀之、重興又與焉、

〔頭〕(7)季彬按伊勢氏故禮書、椀飯作碗飯、因考諸、字典碗與盃同小

孟也、孟雲俱切音于飯器也、然則碗飯是也、椀音換無字若王

音、但盃或作碗、碗訛境稍為近耳、原夫碗飯□、肇乎賴朝公

時、元日則千葉介・執權北條獻之云、又故禮書云、應永二十

八年辛丑正月一日有碗飯、出仕細川右馬助云々、二日、大御

所等光臨于管領細川入道館、三日、碗飯出仕京極加賀守高教、

二十九年壬寅正月一日、有碗飯、出仕管領畠山左衛門督入道々

瑞一男畠山彈正少弼持國、三十一年甲辰正月一日、有碗飯、

出仕管領畠山持國、御所有御對面式三獻參、二日、有碗飯、

土岐次郎持益、次第同前、御所成于管領、三日、碗飯、出

仕六角四郎兵工尉持綱、儀式同前、七日、碗飯、出仕赤松左

京大夫滿祐、十五日、有碗飯、出仕山名刑部少輔持照云々、

三十二年乙巳正月一日、碗飯、出仕管領代管領一男畠山持國、

儀式同前、二日、御成于管領、十五日、碗飯、出仕山名持照

有御對面、又云、斯波・細川・畠山之三管領及一色・山名等

四職俗為御相伴衆、又按、我家狀云、初季隨之臣本藩也、

道鑑公特遇為御相伴衆、而至重興尚獻碗飯不異乎、執權・管

領之獻幕府、據是觀之、公室世遇伊地知、猶幕府世遇畠山等

也、其待季隨之遺風云、豈可無謂乎、

重昌虎太郎 三郎九郎
縫殿介 齋名芦津

天文十九年庚戌七月三日生、天正三年乙亥

〔實明公〕

十一月三日、寬明公臨稻荷社祭禮、重昌

與上井覺兼・本田刑部少輔為公膳之御者、

十二月、近衛相公諱前諫於本州、重昌素好

倭歌、故親師相公而學焉、四年丙子七月、

相公發本州上道、重昌寄書於左右、或問起

居、或請倭歌之指教、相公又屢賜手翰小牋

重昌資質多病不堪承職、惟以歌書自悞、文

祿三年甲午、重順出奔官収邑、重昌蟄居於

舊邑桂迫、及重昌復歸從而遷日州、元和四年戊午三月六日、誦讀法華經八卷了夷然而逝、年六十九、法名花叟守榮居士、葬於倉岡龍泉寺、重昌娶肝屬良兼號左馬助、兼續女、長子、先父死、生重順、肝屬氏、慶長四年己亥三月三日卒、法名冠室芳玉大姉、後改葬於龍泉寺、

重順虎太郎 又太郎 縫殿助 佐渡守

元龜元年庚午二月六日生、天正八年庚辰二月重興卒、重昌多病、故重順承職、然年甫十一、未足當戶命伊地知重賢號新介、持繼攝季四世孫、內外事、九年辛巳八月、寬明公擊相良義陽於肥後水俣、重順從之、與島津忠長・彌重長子・佐多忠將號伯耆守屬歲久、島津義虎之軍為副將此云脇、大將、公威大震遠近懼伏、

義陽請降、於是重順與諸將俱獻佩刀之賀賀公、十年壬午正月朔旦、重順朝宮而獻坑飯、公賜宴手自酬酌、十二年甲申十月、公遣「三」「乙酉八」

「堀飯・坑飯是乎」
「季彬按古書、十三年乙酉八月、

公怒阿蘇氏陷花山堡乃十一日、進兵破甲斐氏於限庄、十三日、又攻志田城陷之、此作十二年十月事、恐因舊譜誤也」

「內藏助或作藏人、十三人或作十一人、未知孰是」

「力キ入」
「重賢稱民部少輔」

軍攻肥後、堅志田城陷之、重順率家臣百五十人、先登而有功、十四年丙戌正月朔旦、獻坑飯、公賜宴飲酒五行、重順酌於公、公又親酌於重順、既而呼出家臣三人賜酒、四月、澁谷太夫為散樂於府城三日矣、公頒賜看棚於重順、十月、從家久帥百七十人軍於豐後、十二月七日、家久攻戶次城、重順挺身、提槍與利滿內藏助豐驍勇士戰刺之、伊地知重賢・中馬重好等十三人力戰、十二日、家久與豐後侯義統及仙石權兵衛戰於府內、豐軍敗績、重順有功、十五年丁亥、豐臣氏加兵於本州、五月、公與豐臣氏成直如京師、重順從之、九月二日、公朝聚樂豐臣氏之城名、重順扈從歸藩之年、不詳、十七年己丑七月廿八日、公臨諏訪社祭禮、川上久林號助將先隊、伊地知重康號備、後守將中隊、重順將後隊、文祿元年壬辰、豐臣氏擊朝鮮、松齡公為前軍、二年癸巳、重順航洋而至、松齡公之營、為

船奉行兼旗奉行、三年甲午秋、有忤 松齡公之命其故不詳、公怒追焉、故歸國而不能入

藩、漂泊於京師、舊識石田三成國城在江州佐和山就

其聘、三成欲祿之、重順恥仕二姓、辭而遁

於紀州高野、三成嘗訴重順復歸於 松齡公、

公曰、重順吾世臣也、彼平日氣傲聊有忤吾

命、故姑以此懲之耳、慶長五年庚子、關原

之役、重順密從於薩軍戰爭矣、及西師敗君

臣失所在、伴散兵如京師、適會驟雨主一賈

避雨、賈憐之、為燎衣進飯頗盡意、重順謝

之亦之高野、臨別告其賈曰、吾薩伊地知姓

也、汝望冒吾姓吾與之、賈遂冒伊地知氏其裔

伊地知主殿今、後重順贈茶盒時俗販茶器、其雜物

王家之瓶人也、〔七年壬寅八月〕奇雅賈鐘愛、〔六年辛丑春〕慈眼公在伏見、

重順就國老鎌田政近・新納旅庵訴復歸、

公許焉、故歸藩矣、尋而為日州高岡壓使、

挈家遷任賜花見田五百石、嘗 松齡公使萩

原寺僧於重順曰、思賜舊邑然公族久信

〔十三年戊申正月、倉岡地頭丹生備前卒于任所、重順之為地頭當在此時十年乙巳之說恐非是也〕

〔十三年戊申〕

有之、故比其稅撰他邑而食之、〔十三年戊申〕十年乙巳、

為日州倉岡地頭職、十四年己酉八月三日、

令澤重俊號權右衛門冒伊地知氏、初伊地知重貞

及子重兼事在大永七年見誅、重兼女嫁澤永堅生、

重俊與姓因其請也、十五年庚戌二月七日、

見 松齡公賀新正、公賜三獻之宴、寬永

四年丁卯六月、慈眼公妻女於北鄉〔翁久〕

號山豫脩禮命、伊地知重信號勘解由左衛門・伊地知

重清號壹執貝桶矣、重信當左而重清右、重

清曰、重信之先雖顯著、然有冒島津氏而後

復本姓、吾不欲為新進家之右俗尚左方、故言及之、國

老召重順於倉岡而決之、重順責重清之失辭、

重清不服、故報諸國老、於此共罷執貝桶代

以大田氏、而沒收重清家貲、六年己巳十月

二日、附書於三原重庸辭地頭職、以外任崇

重俸祿不給也、國老不許、九年壬申、定國

中兵馬賦、重順出一騎十九人充一番備、十

一年甲戌、〔一、一〕獻廟朝京師、慈眼公 寬陽

〔頭〕

慶長十八年癸丑

九月、公從於

新館、十八日、

使別族周防助重

康及本田隼人親

紀等行移徙、禮

亦故事也

(2)

季彬按國乘、七

年壬寅八月、

公如洛始朝 神

祖也、十月、

公在伏見、蓋近

此時之事此云、

六年、因齋讀、

請再考

(3)

家、

公從之、重順未見 寬陽公、故請如京師而拜焉、國老不許、閏七月廿日、使男重治於

江戸就國老、伊勢貞昌請邑曰、往年 松齡

公許臣以邑、故嘗就仁禮頼景人號藏・鎌田政

喬號左訴之、 慈眼公亦既諾焉、今也臣家

道匱乏願濟其約、又附書於三原重庸・伊地

知重政號李右・伊地知重康號采・伊地知重良

號清左請爲此周旋、其訴遂不聽、十月六日、

福崎重張號助因伊地知重詮號參請伊地知姓

於重順、重順以其先有舊歎許之、十四年丁

丑、倉岡饑、二月、重順請新納忠清號加・

町田久慶號勸解由貸米十三石於官、十九年壬午

十月廿二日卒於倉岡、年七十三、法名久山

清良居士、葬於龍泉寺其墓銘龜山佐渡守、重順娶本

田親兼號大炊太夫女、生一男一女、妾生一男一

女、長女嫁菱刈重秀號善四郎、次重治、次庶女、

初嫁川上久知、再嫁伊瀬知氏、次庶子重堯、

初見 公獻佩刀之賞、出嗣上村行定號彌左衛門

(伊地知季安筆)

(1)初頭 公室從 太祖時有禮制矣、而使我宗五世掌其圖籍以行於

節新正及五節句之屬、故重順傳明其禮於 貫明公、朝每節行之、重

順之出奔他州也、伊地知氏方無宗子可奉職者 公乃命、別族

治左衛門重康代而掌之、於是重康悉取其圖籍焉、

右、寬陽公親書跋之說也、季彬疑重貞・久純・兼親・景元・

義忠等所議而定之、歲時規範此也乎、請君、示之是非、

(2)文化頭中、雲上明鑑有伊地知主殿者、居于京師塔祖為御勸定給

事 仙洞御所、又伊地知出羽介者為侍給事 聖護院宮、

(3)重順頭之徙高岡也、同伊集院助右衛門尉・平田大久坊宗如・入

田掃部頭氏隆等、為物頭佐地頭比志島國貞、重順乃居于二丸

云、又一說、重順及本田淡路守親存・鹿島駿河守國重・平田

宗如為相談役徒之云、

(4)元和六年庚申、官命收諸士田祿百石以上四分之一、以下三

分之一、國用不足故也、重順所食五百石、於是致百二十石於

官、其餘定為三百八十石、而居地頭職如故、

重治小太郎 縫殿助

〔久知稱織部〕

孰是

〔良或作長、未知

頭〕

慶長九年甲辰正月十六日生、寬永十九年壬午十二月、携家自倉岡來府、廿年癸未八月

〔季彬謂、花見恐有田誤〕

二日、請免重順之裸且易花見田祿於近郊、正保四年丁亥、與遠矢良珍號金兵衛爲八重山

〔頭〕今琉球國管內警衛、慶安二年己丑、至自八重山、

〔明曆元年乙未七月五日、泰濟公徙於新宮、使別族重時及本田兵右工門等、行移從禮故事也〕

〔寬文元年辛丑十二月、寬陽公徵伊地知重時所藏年中節禮及移徙等圖籍、而摘其要別成一篇、二十五日、親跋書本〕

石、而在外任多費、方今有百石衣食不給、

請依他人復歸之例而添加祿嘗與書於前田七

兵衛、以爲前田氏之宗族、寬文四年甲辰八

月廿日卒、年六十一、法名常一中行居士、

重治娶桂忠秀號民部少輔女、生二男一女、長信

季、次重直、次女嫁伊東祐位號五右衛門、桂氏、

貞享二年癸丑十月五日卒年七十八、法名明山素

光信女、

秩父氏傳、稱重治獻白旗於 寬陽公矣、

僧政負使、此白旗有八幡大菩薩之五字、僧文覺書而、源大將軍起兵於豆州時、

航之而賜畠山重忠、以傳而至重治云、案、

秩父氏古器一不傳、如十文字刀既失之而

誣名他刀也、唯白旗歷幾喪亂、而偶然存

可異、秩父氏世世論功必以獻旗籍于口、

抑其獻果實吾未明眞與贗、又不知以所爲

功、或曰、公室奇寶有所謂五字之旗、蓋

源大將軍賜於得佛公也、

信季初名重辰 又重賴 小太郎 六郎兵衛

寬永四年丁卯九月十四日生、十二年乙亥正

月、行冠禮於 公宮、慈眼公親授冠、國

老川上久國理髮、公賜脇刀、信季獻佩刀

之質及折六合盛殺器、是云折一器、云一合、酒六樽、慶安

中 寬陽公命御番於信季、且曰、汝家固免

番務、然小番不給放假補之、信季恐異日是

做辭之凡衆士警衛 公宮、此云御番、其先世歷然有 功爲小番 其部寡故名也 其餘爲大番 其部

〔季彬按書記、書

乙亥二月二十七

日、家久公至

江戸、據是考之、

則 公之加重慶

冠也、知必當其

正月矣

衆、故名、寬文四年甲辰十月三日、告貧囊乞

也、重治之時有祿百十三石、信季如江戸費用多矣、自江戸至而賣祿償之、於是家道益

貧窘、故數請祿、然其言不遜官不聽之、信季亦請去國、其言曰、家貧而不知所以處置、

死則似狂、乞食於道路則近辱、請辭而往他邦、然而非臣素志也、不得已也、十二年壬

子正月十日、依中馬三右衛門請許伊地知姓、中馬氏固舊臣之族、而又其父清左衛門仕重

順於倉岡三十矣、故以許之中馬氏世家於倉岡、三月五日、請得命定義子、公憎其累疏無忌憚

命養城外土凡國制養城外土爲後則貶爵、禮貌、國人賤之以比賣其家、信季奉命而憂恚積鬱竟生疾、延寶二年甲寅三月

廿三日、燒譜圖世傳之語、故族子聽之悉會於伊地知重祀號權左、衛門、遣伊地知重長問其以

所然之意、信季曰、吾愧養城外土爲後故欲亡家耳、重長曰、死亡非難而存生實難矣、

請君翻志再謀興復、信季曰、僧西行固奧州

大姓一、悟幻世無常之教棄家累如蔽徒、吾意氣何滅乎、西行夫新田氏・楠氏之忠功有時亦亡、豈吾寒族違於吝惜乎、不謂其他、

廿五日、盛水於大盃飲之、十九而暴死、年四十八、法名即幼知翁居士、信季娶濱田氏、

生女嫁重行濱田氏之死年、紀、法名不詳、信季之死族氏等秘之、以病卒聞焉、請弟重直於官爲之嗣、

〔伊地知季安筆〕

〔書入〕(1)河野通古對松平安心軒、松浦內藏充以畠山氏臣 公室之狀、

且酒井遠江守問八右衛門重堅所自出祖於 公、公命通古為

書以對之、竝不詳其年紀、請君、若得其詳必採錄可也、亦涉 閔本宗事焉、

〔或作十七日、未 重直 初名重時 又季實 長左衛門 縫殿 勘助 知孰是〕

〔書入〕寬永十一年甲戌閏七月十日生、初見 寬陽 公將以明年 公獻中紙、仕爲定供 此云定御供 延寶四

年丙辰十一月廿日、爲信季嗣、五年丁巳十 如江戸、乃命 二月廿一日、見 大玄公拜承職 此云家、獻 手實爲定御供、 僧御禮

○二年己亥春、公如江戸、季實以定御供從、三月二十九日至江戸、後每公東西鮮不從焉」

(2) (1)

佩刀貨、其座次爲菱刈重敦號孫下、兵衛、重直辭之、請其長、國老使野津鎮政號安右、兵衛門曰、伊地知氏門地宜長於菱刈氏、然近世無職矣、

菱刈氏於今列邑主、故爲其上難、異日伊地知氏爲顯官則有再命、七年己未九月廿七日、

公召平田宗正、命重直男重行爲貳室此云新番、宗正諷、公以重直世許番務、公曰、

新番親衛起居此云新番、近世以新番爲爵其班次於小番、非親任人則不可也、重行自江戸隨乘輜而識爲人、故命之、

宗正使鎌田政方號後藤、兵衛告諸重直、重直拜命、

八年庚申正月十二日、本府火、重直宅延燒、申時火發於田尻八郎兵衛、酉時滅、凡罹災

三千八百八字、死者五十四人、初信季寫譜圖文獻藏諸國史館庫、故重直陳甲寅之變、

而訴臨寫此、國老許之、四月五日、島津久輝加跋文獻十一、章以賜之、天和元年辛酉十一月廿日、公在貳室、使澁谷重仍號周、防曰、

重直家許番務素識之、然其人不給、故權使

之旨」

「頭」

「貞享二年乙丑九月六日、世嫡

移于四駝館、乃命別族重時及本田市郎左門等、行移禮故事也」

重行爲新番事比近臣而期以、明年公聘於

江戸重直拜命、三年癸亥十二月、因坂口與兵衛請許伊地知姓、與兵衛祖父坂口壹岐本族中馬氏之故也、貞享四年丁卯、重直從

公在江戸、請改姓爲秩父氏、其訴狀曰、臣家近世多難、私以爲伊地知姓不便、請更之

爲舊姓秩父、若島山苟忝命即世世令嫡子名

之、次子以下爲伊地知氏、五月十三日、

公及大玄公聽爲秩父氏、國老島津久寬・

島津久輝以書傳命、重直拜之獻佩刀之貨、

八月、更名重直、元祿二年己巳春、從

大玄公在江戸、訴家貧衣食不給、三年庚午九月十日、又訴諸本府併陳祖先世功、國老新

納久了以聞、公曰、重直之先有盛勲、其貧乏可閔、宜與之年俸六十石、十二月朔日、久了達其命

是年使中馬仁右衛門爲伊地知氏從其請也仁右衛門、五年壬申四月十日、重直割年俸亦倉岡人

與九石於重親六石於重次、六月十七日卒、

「延宝六年正廿八、

系圖ハ不被下、

内分ニテ御記録

所筆者ヨリ相渡

候様國老ノ命」

「季實請、官寫模

本、復藏于家非

此年之事、六年

戊午五月、於其

所撰系圖序既已

言之、然則八年

四月、久輝追跋

「公命賜六十石非

九月十日之事、

十二月朔日也、

請再考」

年五十九、法名一無純法大禪定門、葬於本

府翁心軒、重直娶日置久興號吉女、兵衛、生三男、

長重行、次重親號次郎、兵衛、延寶元年癸丑五月

十日生、貞享三年甲寅十一月十五日、初見

大玄公於江戸芝藩邸、獻佩刀之實、諏訪兼

時號仲左衛門、實永五年戊子三月十五日卒、

法名化外真龍居士、重親生行有號彦右、出衛門

嗣花田氏、重親之弟重次號長左、衛門、延寶五年

丁巳七月廿二日生、出嗣桂忠直號彌左、衛門家、

享保二年丁酉十二月廿八日卒、法名單翁日

傳居士、日置氏實永二年乙酉三月廿八日卒、

法名玄養妙通大姉、葬於翁心軒、

(伊地知季安筆)

〔書入〕命字下

(1)〇是月昇都城臣小牟田藏右衛門重住、伊地知氏重住雖固為小

三郎裔屬、不詳其所出、至是蓋請復本氏因許之也、但重信譜

作縫殿季繁允許當季實也、

〔書入〕
(2)七年己未八月、公還自江戸、季實復從、時季佳亦為權御與

之命、此云二十七日疑非拜命日也、

重行初名季佳、又季名、太郎兵衛、重行、彦七、十郎兵衛、剃髮號十安

〔或作十三日生、未知孰是〕

寬文三年癸卯十月三日生、天和元年辛酉十

月十六日、大玄公賀世子菊公江戸之初行

俱射犬追物、重行與伊地知重倫號奎右、助衛門

公衣行騰、重行奉左、重倫奉右、伊地知重

英奉菊公之左、伊地知重賴號彦右、衛門奉右、貞

享四年丁卯四月、重直拜更姓之命、重行亦

見 大玄公、獻佩刀一腰・馬一匹之實拜之、

元祿六年癸酉正月元日、大玄公幣諏訪社

命重行之庶族從行焉、重行充伊地知重記

號三左、衛門・伊地知重經號才右、衛門、本田氏族俱從行

謂曰、先君 齡岳公賜本田氏書曰、管内衆

士之族不可為長於本田氏、故與伊地知氏從

行則自為左隊從行行制異於昔時、當時群臣朝服而前道於二行、若伊知地氏・本田氏各

二人前後於衆、一家前後於左隊、一、重記・重經

家前後於右隊、此云先陣後陣御供、

曰、先君之命所未聽也、以曠昔而論之、我

又何爲本田氏之右官、有命曰、今臨事矣不

可速決也、仍命聞而成左右隊、明日重行請

官裁曰、本田氏吾家先世之臣族也、已往在

吾族之下位久矣、何爲用聞且對我其言不遜、

請明名分、官倚違不決、三月、同族胥議附

銀二百四十七錢五分於西昭寺、爲洒掃之資、

十六日、上疏而請左右隊之官裁、六月十日

命承職、七年甲戌八月十九日、請獻佩刀及

殺二種二種乾魚
昆布也、酒二樽、而拜承職、十月、

復請決去年左右隊之論、大島慶左衛門・吉

富爲左衛門來於老人伊地知重昶家、而止重

行之請、重行不聽遂上疏、八年乙亥二月七

日、上疏而致年俸罷仕願早決左右隊之論、

重行素無生產、伊地知重英號助右
衛門分祿三十

四石資給、廿二日、伊地知重昌號越右
衛門辭移徙

之事凡新建宮殿落成之日、爲祈祝成歡、
此云移徙有其禮、重昌族世世司之、宗族罷仕

故也、重行與同族盟曰、官設命本田氏同列

則死之而絕後、猿渡信安號要・仁禮景代

號覺左
衛門謂重行曰、以本月廿八日 公受拜禮、

可重行行承職之拜、廿三日、重行上疏曰、

本田氏混序吾深辱之、請待裁斷而後行矣、

伊地知姓行拜者聽之威辭焉、官憂之謀使行

拜伊地知重堅號八右衛門、
仕爲御用人、之孫松之助當初見

此云初
御目見、重堅辭之、御用人等說重堅曰、君

初爲官盟曰、事無大小不背上命、今而戾命

辭見何故也、重堅語塞忙然思、從於官命則

似忘宗子、辭見則犯誓文欲自殺、重行等覺

之陽削屬籍、廿四日、御用人鎌田政方・平

山忠知號次郎
右衛門・仁禮景代・中神頼安號內
藏丞・外

山義明・猿渡信安列座、而呼伊地知重英・

伊地知重供號八郎
兵衛・伊地知重記・伊地知重

經、信安曰、吾曹有私於重行、故因諸君告

此、夫重行新承職而辭拜謝、實大不敬矣、

謀令重行行拜而因備請官裁、因還昨日之疏、

重英等筆其言而告重行、重行曰、余無失敬

上疏、吾意既決不可中止也、明日重英等又

附疏於信安・景代、別錄重行之意以授之、

信安巧言詭辭、重英忿然面折之、廿六日、

國老佐多久達使向井友貞號市之丞說伊地知重親

誘行拜、重昶曉之重行、重行不從、廿七日、

御用人等使遠矢金兵衛・鹽津正左衛門・和

田平右衛門於伊地知重英說重行之、行拜百

端、重英不肯、廿八日、官有命曰、癸酉而

還本田・伊地知相爲爭訟、重行之論議詳聞

于公、公曰、今後前後從者罷伊地知氏

代以新納氏、又若重行論門地官置不聽、族

氏來會、拜牘皆快快、一人曰、罷從者固所

榮也、書本田於伊地知上者必記者之誤矣、

衆諾之、廿九日、重行上疏曰、頻年之爭論

得命小臣望足矣、請賜年俸就職事拜承職之

恩、

初有重行盟族子曰、官設命本田氏同列則

身死而不置、後蓋憤激、官裁不速而及此

矣、季平按、本田親恒事于畠山重忠則有

(3)

之、然重行非重忠之嫡裔、及其來藩乃等

是公室之臣也、重行剛愎不學專推原五

百歲之閹閼、而汲汲苦小節許死既甚矣、

於此時官雖不顯言、而舍本田氏貶吾家、

其意炳然明矣、嗚呼重行既不能蹈其誓、

又何望足之有、

伊地知重定號十左衛門盟重行曰、癸酉與本田氏

有事、官裁罷我之從行眷遇滅、於先世吾深

慚之、吾族重弘之次室於同姓爲章著焉、故

與君俱生死、是年重行座論議被幽閉此云、

(*コノ頁下ニ貼紙アリ、後ニ掲グ)十二年己卯十二月五日、賜年俸三十石、上

井朗喜號五郎左衛門傳命曰、重行先年辭祿、

今也家道貧窘、公念先臣之忠周急矣、宜

聞命之忝於同姓輩、明日伊地知重昌・伊地

知重倫・伊地知重堅代重行拜恩重行幽閉故於

是重行辭重英之資給、十六年癸未八月十五

日、舉伊地知重堅家於次子籍、重堅小牟田

氏支庶、然因辭見之誠功也、寶永二年乙酉

秋、赦幽閉凡十、十二月二日、訴 公親冠

此云御直元服於兒併陳祖先之舊勲、公許冠於席

前此云御元服、廿八日、兒行冠禮、重行又見

淨國公獻佩刀之賀拜之、三年丙戌三月十一

日、請年俸因舊即十六、四年丁亥五月廿七日、

依命上家乘於國史館、七年庚寅十二月廿五

日、初命小番御番、重行以爲世世功臣之胄、

而今下爲御番非榮也、故及子重雄解辭官不

可、初重治以降家聲微衰、世世注名於小番

籍而無番事、正德二年壬辰十月、淨國公

沙汰門地定爵、曰一所持、曰一所持格、曰

寄合、曰寄合并、曰小番、曰大番、秩父氏

仍舊入於小番部、是故有斯命、享保四年己

亥十二月廿二日、國老種子島伊時刪重行俸

十石、是官縮略用費故也、十七年壬子十一

月、乞老致仕、十八年癸丑四月五日、許之、剃

髮號十安、廿年乙卯七月十九日卒、年七十

三、法名林巒秀茂居士、葬於南林寺中重行以後

〔丙寅〕

咸葬於南林寺、置牌於實性院、重行初娶信季女、生八郎、

貞享三年甲寅閏三月八日五歲而夭、法名如

幻春花童子、葬於大興寺在本府、信季女天和

二年壬戌八月十九日卒、年十九、法名孤峰

菴壽大姉、繼娶於林氏其父號刑部左衛門、加世田人、生二

男五女、長女貞享三年甲寅九月十四日生、

嫁岸勘左衛門、享保九年甲辰七月廿六日卒、

法名桂秋自香大姉、次將興、次女元祿四年

辛未九月十一日生、嫁伊地知季英號彦、九郎、次

女七年甲戌六月廿五日生、嫁黒田傳右衛門、

延享四年丁卯正月五日卒、法名梅室貞心大

姉、次季香元祿十三年庚辰八月廿五日生、

享保六年辛丑二月初見 有邦公於四

配亭、獻佩刀一腰・馬一匹之賀、廿年乙卯

將興在江戶往來職名不傳、重行疾病也家匱藥費、初

重行愛季香過於將興、季香有私貨以進藥而

請償於將興、且誣遺命分財各一半、廿一年

丙辰五月、桂吉兵衛・花田行有簡於伊地知

〔頭〕

〔享保二年丁酉六

月、四配罷落成、

八月、公至自

江戸、乃命越右

三門重、等行移

徙礼〕

〔或作二十一日、

未知孰是〕

〔致仕爲十八年四

月二日、此云十

七年云々、恐上

書之年乎〕

季英・日置藤左衛門、諫季香之貪欲、將與・

季香遂不善、延享三年丙寅三月、將與請季

香別族於官、七月許之、季香家於内丸本府地名

先是寓居於荒田之第重治來府後、世世移居於府中而後、重行居於荒田、將種居、寶曆九年己卯十一月二日死、

中村、其餘未考、

法名大通知光居士、次女寶永三年丙戌十一

月十日生、嫁東郷實勝號藤、十郎、次女七年庚寅

十月廿六日生、嫁藤野良致號甚右、十郎、林氏寶

曆己卯十一月十一日卒、年九十三、法名桂

月芳盛大姉、

(伊地知季安條)

(1) 「書入」 延寶六年戊午、家父季實上邸江戸、季佳少從於是十六歲、

七年己未八月、世子大女還自江戸、季佳以權御與廻從之、

十三日發江戸、九月十五日至 府城、二十九日、命為新御

番、詳見父下、

(2) 「頭」 元禄二年己巳正月元日、公調諸社、本宗及川上氏、騎從我

為後駈、乃本田次郎左工門度親告 官沮之曰、臣未嘗聞有伊

地知氏與之者、唯吾本田氏世系所奉也、四月三日、國老新納

久了乃使黑葛原治部下大史查驗其事歷、當此時重英居史職、

因驗其例上疏伊地知氏文龜以來數次所與故事、久了乃服、

「頭」 十七年甲申二月二十八日、公使別族重昌及本田氏行移徙禮

於朝堂此云御初故事、行禮既竣 公賜之觴、重昌氏每為最先

而本田次之為例、至是本田氏請 官、乃有 命革其例式使酌

者二人竝行、賜伊地知・本田各無先後、重昌乃因高橋種周・

中原尚請依舊例、二子止之曰、議已定矣、不可敢違、於是重

昌乃應以期逼故也、

將與初名重雄 又重知 又季伴 小太郎 四郎太夫 太郎兵衛 十郎右衛門

元禄二年己巳七月五日生、寶永二年乙酉十

二月廿八日、朝 公宮而行冠禮於 淨國公

之前、佐多久達授冠、肝屬兼柄理髮、重雄

獻折六合・酒六樽及劍馬之實、 公賜脇刀

治工與和 泉守忠重、享保十八年癸丑四月五日、命承

職、九月朔日、見 有邦公拜承職、獻劍馬

之實及穀二種・酒二樽、元文五年庚申正月

廿三日、與書於蒲生人伊地知季文號源、曰、

汝家由出不詳、雖然先世聞之吾族之餘孽也、

「季彬曰、據享保十年七月、既避家重公之諱、則重行亦當改之、分註所書季名非其所更名乎、若果然則書之、正文亦可請君熟思」

故贈此以爲證、延享二年乙丑十月、惇廟

諱家即位、將興避諱始以將字冠名議取秩父將恒嫡流之說

庶族盡復季字先是享保十年乙未七月、官命、明禁、大家之諱及賴忠等之字、

和三年丙戌九月二日卒、年七十八、法名圓

明院法雲月心居士、將興娶伊地知季治號

左衛門女、生二女一男、長女享保二年丁酉正

月廿日生、天明三年癸卯七月卒、法名高禪

院寶山妙永大姉、次女享保六年辛丑五月廿

五日生、嫁阿多實莠號六郎、兵衛、男將種、

將種十太夫

享保八年癸卯十月廿四日生、元文三年戊午

十二月十五日、行冠禮於公宮、比年

有邦公罹病在江戶、公族貴儔代公行禮、

國老樺山久初加冠、伊勢貞起理髮、賜脇刀

治工本、州元貞、將種獻劍馬之貲及折三合・酒四樽

合樽減、將與亦奉劍馬之貲拜之、明和三年

丙戌十二月廿一日、命承職、四年丁亥四月

廿八日、見于國老拜承職、贄品如將興時、

寬政七年乙卯十月六日卒、年七十三、法名

操節院榮松良盛居士、初將種以地方檢者職

如指宿郡悅郡人、前田善助女娶而生將因號

次郎、小、將因大老之時行冠禮如法、

公褒其容姿、天明三年癸卯六月十二日、噉

於瘦狗而死、年十七、法名大仙院鐵眼通心

居士、將種無子養伊地知季武號左衛門之子季

起號十、定嗣居七八歲、將種・季起資質不

愜稍失慈孝、遂追季起季武之先前田氏也、前田重

庶族宗子蓋重順、將種晚年狃於伊地知作四

郎之孀婦東郷氏、東郷氏請以其子季保爲後、

將種許之、

(1)

(伊地知季安筆)

(1) 季彬聞諸、伊地知□女曰、作四郎乃季周親子官爲御目附死

于江戶、於是季周乞川上氏之子爲嗣、稱彌平次、生季保兄弟

亦先死于九月九日、失其年間云、請君有相識於高奉行所必假

高系圖、考之、其辨惑決疑莫速且明焉、一笑々々、又曰十郎

季起出入亦詳于高系圖、

季保新太夫伊賀太郎

季保先重持次子左馬助裔也、左馬助十世

曰重澄號越右衛門、有子數人、嫡重記嗣其家、

次季周號新太夫、別族而仕矣、累進為勘定奉

行、季周養川上某為子、號作四郎、仕為

御目附、娶東郷氏、生二男一女、長即季

保、次新太夫、女適于南雲氏、作四郎蚤

死、季保嗣於季周及為秩父氏、使弟新太

夫嗣其本族、

寛政八年丙辰三月廿一日、命承職、時仕為

御目附、凡國制新承職者請官而註名於番籍、

此云番入、季保不請曰、吾家世許番務、國

老市田致國議諸史官、史官曰、非也、前世

既命定矣、秩父氏自前世動論家系為煩曠甚

矣、今季保做左當詰責之致國責、季保以身

居監察職而濫奏不學、事前田氏長於村里踐

〔罷季保職並貶小番而老于家〕

居墮容敢不習禮法、季保夫妻奉之定省嚴矣、

前田氏憂之滯有不慈官教家、君與伊地知季

徽號越右衛門大歸前田氏、前田氏泣曰、今岩兒

存則吾不至此、享和元年辛酉、與清水盛之

號源左衛門免御目附職所禁固、文化三年赦禁固、

為御裁許掛年俸五十八苞、七月廿八日、拜

承職、贖品如例、四年丁卯正月十一日、遷

道奉行、十一月十九日、為當番頭兼御用人、

廿八日、舉大監察掌利權陞家於寄合籍、十

二月六日、為國老、掌利權如故賜職田千石、

是月賜正清刀及金二百兩、五年戊辰正月十

一日、領志布志地頭職、二月六日、拜將真

之冠禮及國老職・地頭職、十日、遷於三官

橋邸、四月、大君受 大老公之命、免季

保職於江戸芝邸、令親戚交守衛之伊地知新

太夫季保弟、相良市郎左衛門承旨、五月九日、

自江戸至季保奉命、六月廿一日、召於決獄

署放於惡石嶼矣、而囚深室待順風、且除寄

秩父家牒終

「秩父家牒後序

秩父氏自古有世為宗器而付授所重如賜書及譜籍者數函、以藏之家、明曆中、寬陽公徵而上之、乃命史臣多模親本、還賜于家、寬文己酉、

大玄公又徵上之、如初、後至甲寅、信季遭心疾集而燔之、悉灰燼亡矣、幸有模本在於史館者、則雖皆得寫傳乎今、亦惟存十一於千百、豈可不惜哉、元祿甲戌、

公論史臣脩衆士譜、於是、重行遍訪族裔、輯其譜系、併之其新譜等、復悉上之、當是時、有故邑人因循為垂無故、藏尺紙先系者、乃繫尊西至季隨五世屬上、最為古書矣、附而上之、自初徵時、

【頭】
「三十五、愚所聞也」

合廻原籍、更號太郎、七月六日、蜜賜死、年三十六、法名英心宗徹居士、初季保以直言清潔稱焉、丁其禁錮與樺山久言等以講正思錄、為名夜集談論日久矣、云未知其然否也、丁卯久言拜國老、季保亦不次累進共當國政、於是以理財省費為說廢格、大老公所行以親舊備職、故群臣不歸而有黨名及其敗、久言・季保・清水盛之等十二人自盡、餘貶謫以下連座者百餘人、十二月廿八日、國老穎娃久喬使御用人傳命籍沒季保家、其妻子籍名於親族之家人凡國制重罪者誅而籍沒、人而得全命、此云家內、使其妻子籍名於親戚之家、禮、國人之遇實如僕隸、季保娶大島久珉號清女、號清女、號太、生二男一女、長將真號太、文化五年戊辰二月六日冠於老公之前、其禮如法、四月廿一日卒、年十二、法名惠山元明居士、次女享和三年癸亥生、次道之助文化丙寅生、大島氏携二子託於大島久用號休左、號休左、衛門、籍名於伊地知新太夫之家人、

公及史臣平田純正・大田久知・河野通古等
未_レ有_レ間_三乎其所_レ譜語_二、前年元旦、及_三本
田氏_二騎_三從

公謁_三于外廟_一、各將_二一隊_一、驅_レ之前後、
左右排列、例尚_三其左_一、是役也皆欲_三以左_一、
互伐_三閔閔_一、至_下屢論疏內以忘_レ持_レ身乎禮
讓_一、外以凌_中。命於有司_上、時方重英先生及_三
田中國明_二居_三於史官_一、齊名_三博識_一先生輔_三
宗子_一、國明善_三本田_一、陽雖_レ處_三公事_一、交
如_三陰有_レ挾焉_一、爾後彼此分裂樹_レ黨、能言
距_レ彼者秩父之徒也、能言距_レ我者本田之徒
也、故我則惡_下。

齡岳公貴_三本田_二為_中第一_上、至_レ言_三其所_レ賜
書出_三乎偽手_一、彼又羞_下先世臣_三秩父_一有_中援
證_上、至_レ言_三東鑑所_レ載親恒固非_三己祖_一、盡_レ
辯相摧、無_レ所_レ不至、今按_三其說_一、交有_二
得失_一、要_レ之只欲_レ勝_レ焉耳、一家於_三公
室_一自_レ古竝稱_三為_二舊臣_一、當_下各守_三禮讓_一、

以忘_三其私_一、惟忠是勵_上、惜哉其反_レ之、先
生遂謫、既無_レ能距_レ彼者_一、繇_レ是國明愈鳴_三
于世_一、乃疑_三本宗故_三為_二重忠後_一、始變_三之
說_一、一據_三尺紙古系_一、而於_三新譜_一無_レ多取_一
焉、按_三嘗所_レ爭辭_一以觀_レ之、蓋本_下乎我非_レ
胄_三重忠_一、則彼祖_三親恒_一而固無_上差也、余
謂新譜寫_三之史本_一、史本寫_三之親本_一、親本
乃所_レ謂世_三為_二宗器_一、而付授所_レ重者也、尺
紙雖_レ古、亦據_レ藏_三諸家臣之後_一、則知_レ非_下
初所_三重而傳_上者也、今以為_三千金亦難_レ易、
幸賴_レ得_三之於灰燼之餘_一也、若使_下所_レ燔親
本能免_三信季災_一、尚存_上於今世_上、何為_レ易_レ
之哉、且其所_レ燔猶多_下史館所_レ未_レ寫載籍_上
云、其有_下諸可_レ取而據_上者_上必矣、不_レ亦思_レ
耳、凡事疑則愈疑、信則愈信、汎乎其不_レ
可_レ決矣、況自_三數百歲之下_一、稽_三數百歲之
上_一、安得_レ如_下披_三雲霧_一覩_中青天_上乎哉、且
夫家乘也、子孫之所_下以顯_三揚先德_一、明_三其

昭穆^一、致^中之追孝^上也、誰得^下私^三於盛衰^一、
以誣^中諸天^上哉、莫^レ如^下由^三其世^所傳古說^一、
而誤則正^レ之、疑以傳^レ疑焉、無^レ苟確據^一、
不^レ可^レ亦得^三以輕革^二其說^一也、族人季平傷^三
宗祀之既絕、而先德之日就^レ逸墜^一、博採旁
羅、勤竭^二其材^一、謬誤必正、歲月維積、近
著^三此篇^一、請^二序于余^一、余閱而言曰、夫古
之人徒伐^二門望^一、如^レ彼其甚焉、而未^レ覩^二其
成編如^レ此者^一、子之功其大矣哉、余雖^二不
敏^一、亦志在^レ斯、然所^レ欲^レ言、子既譜^レ焉、
而其著述意、亦自序^レ之、余何敢贅、且為
叙^二其如^レ所^レ略者^一、以穢^二卷尾^一、聊塞^二責
耳、季平自稱^二六郎^一、胄^二于田島島津氏^一、
即先生之後也、夙學^二泮宮^一、今為^二外監^一、
其志氣實稱^二先生後人^一者也、
文政庚辰夏五月下浣

本府騎衛士伊地知季彬謹識

(*ハリ紙)

十二年己卯二月、上疏曰、臣前年與本田氏
有事、請官裁、速決近聞、當時大史田中國
明批點曰、請^二家甲乙不用明辨^一、近日國明
示此於伊地知重英、臣初聞之、自失愕然、
抑昔日辭承職之拜不受祿等之事、悉起于不
知、國明上議、故^レ深伏^レ唐突之罪、請明臣愚
衷、